

TALES OF SYMPHONIA
ラタトスクの騎士
世界の願い②
とき
テイルズ オブ シンフォニア
ラタトスクの騎士
矢島さら
SPECIAL STORY
ファミ通文庫

矢島さら
Sara Yajima

横浜市生まれ。ゲームノベライズを中心に、ファンタジー小説やエッセイなど、幅広いジャンルの執筆を手掛ける。また、カエルを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著書に『テイルズ オブ』シリーズ（エンターブレイン）、『まきこママの通販推理生活』（ベネッセ）、『ガーコとケロタン』（世界文化社）他多数。
http://sarah.m78.com/

株式会社バンダイナムコゲームス
奥村大悟
Daigo Okumura

『テイルズ オブ』シリーズのキャラクターデザイン（〝エターニア〟の大精霊、〝シンフォニア〟のマーテル、〝アビス〟のイオン、ミュウなど）を数多く手掛けているほか、『テイルズ オブ ザ ワールド～サモナーズ リネージ～』、『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-』では、メインキャラクターのデザインを担当。アメリカ製のゲームが面白過ぎて、朝起きられないことが最近の悩み。



カバーイラスト　株式会社バンダイナムコゲームス 奥村大悟

テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-

世界(とき)の願い②

矢島さら

FB Famitsu Bunko
ファミ通文庫


Aqua
Brute
Tenebrae
Marta
Emil
Seles
Richter



テイルズ オブ シンフォニア

TALES OF SYMPHONIA®
ラタトスクの騎士

世界(とき)の願い②

Contents



テイルズ オブ シンフォニア－ラタトスクの騎士－

世界(とき)の願い②

矢島さら

FB Famitsu Bunko
ファミ通文庫

口絵・本文イラスト　株式会社バンダイナムコゲームス　奥村大悟

6

村の入り口で足を止めると、涼しい風が吹き抜けた。少し肌寒いくらいだ。

エミル・キャスタニエもマルタ・ルアルディも、かつての神託（しんたく）の村イセリアを知っているわけではなかった。暖（あたた）かな日差しも、その下で咲き誇る花もなかったが、それでもふたりの目にここが穏やかな場所と映るには、充分な落ち着きがあった。

「イセリア……。ここがロイドのふるさと……」

エミルが複雑な思いでつぶやくと、

「お姉ちゃんたち、いまロイドって言ったか？」

ちょうどそこを通りかかった小さな男の子が立ち止まる。

「うん？　キミは？」

「オイラはロイドの一番弟子のポールだ」

男の子は胸をはってみせた。臙脂色（えんじいろ）のシャツを着、まだ柔らかい髪を無理やりツンツンに立たせている。両手に一本ずつ握りしめているのは木の枝だ。

「これから呪いの牧場の見回りに行くんだぞ、一緒に行くか？」

「……ロイドの弟子だなんて馬鹿みたい」
エミルがバカにして言うと、
「何だと！」
男の子の顔色が変わった。
「エミル！　相手は子供だよ」
あわててマルタがエミルを止めたが、それも気に入らなかったらしい。
「おいら子供じゃないぞ！　二刀流のポールさまだぞ！」
(そっか。この枝、剣のつもりなんだ)
子供らしい発想に、マルタは思わず口元をほころばせた。
「ふふ、ごめんね、ポールさま」
「まったく。礼儀知らずのよそ者だぜ」
ポールは肩をすくめながら村の外へ出て行った。エミルはその後ろ姿を睨みつけながら、
「あんな子供までロイドの味方だなんて……。あいつはマーテル教会の奴らと一緒にパルマコスタを襲ったのに……！」
と、唇を噛みしめた。
「……エミル。気持ちはわかるけど落ち着こう」
マルタは軽いため息をつく。

「とにかくまずは情報収集しようよ。村長さんなら、ロイドがどこに行ったのかとか、知ってるかも」
「……」
エミルは返事もせずに歩き出した。

畑を耕していた村人に訊ね、村長の家の前まで来ると、別の子供たちが三、四人で遊んでいるのが目に入った。
「はっはっはっ！　私がディザイアンの五聖刃（ごせいじん）、フォシテスだ！」
「ロイド・アーヴィング参上！　悪のディザイアンめ！　成敗（せいばい）してやる！」
うわーっと歓声をあげ、彼らは走り去る。
（ロイドごっこか……ふん）
いちいち腹を立てていても仕方ないな、とエミルが思ったとき、
「あの、ディザイアンという単語をよく聞くのですが、一体何なのでしょうか」
センチュリオン・テネブラエが姿を現した。
「テネブラエ、知らないの？　世界再生が始まるまで、世界中を荒らしてたハーフエルフの集団だよ」

意外そうに言うマルタに、エミルも頷く。

「人間をさらって、人間牧場ってところに連れて行って酷(ひど)いことをしてたんだって」

「エミル、他人事みたいに言うけど、パルマコスタの近くにも牧場があってみんな怖がってたじゃない」

「……そうだった？」

虚を突かれ、エミルはほんの少し首を傾げた。

「そうだよ。その点、イセリアは恵まれてたんだよね。神子(みこ)が生まれる村だったから、ディザイアンと不可侵契約を結んで、村の人を守ってたんだって。ずるいよね」

「なるほど。私たちが眠っている間に色々なことがあったんですねぇ」

すっかり納得したテネブラエにぼんやり視線を当てながら、

（……そう……だよな。そうだったんだ……）

エミルは自分に言い聞かせるように、そう繰り返していた。

「すみません。この村に住んでいたロイド・アーヴィングを捜しているんです」

村長は幸い在宅しており、エミルたちに会ってくれた。

「最近姿を見かけませんでしたか？」

　マルタとエミルが問いかけると、だが村長はすぐにうんざりした顔になった。
「……また、ロイドか。どうせパルマコスタで起きた血の粛清の件だろう。——おかしな話だ。あいつがマーテル教会を扇動してパルマコスタを襲うなどありえん……」
　その瞬間、澄んでいたエミルの緑の瞳が、燃えるような赤にとって代わる。
「俺の親はロイドに殺されたんだ！」
　村長はエミルをじっと見つめながら続けた。
「……世界再生前、この村で大量虐殺が行われた。そのきっかけを作ったのが、ロイドだ」
　けっ、とエミルが吐き捨てる。
「やっぱりあいつはろくでなしなんだな！　だからパルマコスタも……」
　マルタはあわてて、
「で、でも、イセリアはディザイアンと不可侵契約を結んでいたんじゃ……」
　と、村長に問いかける。
「ロイドは人間牧場にいた知り合いを助けようとして、ディザイアンを刺激してしまったんだよ。——馬鹿な奴だ。人間牧場にいるたったひとりのちっぽけな命と、村の大勢の人間の命。どちらが大切か子供でもわかる」
　マルタはそれを聞いて、きゅっと眉を寄せた。
「ちっぽけな命なんて……そんな言い方、ひどい！」

「ではひとりの命で一〇〇〇人が救われるのと、一〇〇〇人の命でひとりが救われるのとではどちらがいいというのかね」

「……それは……」

村長の問いかけに答えられないでいるマルタに、エミルが、

「決まってる。ひとりが犠牲になれば——」

と、言いかけたときだった。元のエミルの意識が唇を動かした。

「だ、駄目だ！　そんなの違う！　犠牲になるのが自分でも同じことが言えるんですか？　もしかしたら一〇〇一人救える方法だってあるかもしれないのに……」

「……そう、ロイドもそう考えていた」

村長はゆっくりと首を縦に振り、

「だが、結局あいつは失敗した。理屈が正しければいいってもんじゃない。理想と現実は違う。——あいつは馬鹿だ。命は平等だと信じ、生きたい人間が生きられる世界を理想だとぬかす。……だが、自分の理想を貫き、実現する男なんだよ。それがいいか悪いかはともかくな」

ふうっと吐息を漏らした。そこまで聞いて、マルタは言った。

「村長さんはロイドを信じてるんですね」

「好きにはなれんが、な」

エミルはうなだれてしまう。

(好きじゃないのに信じてるって……そんな)
「どうしてみんなロイドをかばうんだよ……僕は知ってるんだ。お母さんがロイドに殺されたって……!」
エミルの悲痛な声に心を動かされたのだろう、村長は窓の外を横目で眺め、
「……それは村の連中に聞くといい。今ならロイドを教えていた教師も帰ってきている。それに、聖堂に行けばダイク――ロイドの父親に会えるはずだ。なんなら会って話を聞くといい。ロイドが何か連絡しているかもしれないからな」
と、口髭を捻った。
「聖堂、ですか」
よく磨かれた窓に歩み寄ったマルタの背に、村長の声が重なる。
「村の北側にあるマーテル教会の建物だ。ロイドの父親は腕のいい職人でな。今、補修工事をしている」
教会はあっちだ、と彼は窓の外を指差して教えてくれた。

マーテル教会は丘の上に建てられていた。聖堂へ続く外階段の下まで来たエミルたちは、

「あ！　これ、海岸で会った変な人が連れてた魔物！」

驚いて足を止める。

濃淡のある優しい緑色の毛皮、長い耳――。間違いない。あのときの魔物だ。

「変な人は失礼ですよ。あの人はドワーフ族です」

テネブラエがエミルに向かって訂正した。

「それにこのコは魔物じゃなくて犬でしょ？　ねえ、どいてくれないかな、ワンちゃん」

マルタは言い、おとなしそうな魔物に手を合わせると頼み込んだ。エミルは調子が狂ってしまう。

「……犬……じゃないと思うけど……」

いずれにせよ、魔物が道をふさいでしまっているので、どいてくれなければ階段を昇ることはできない。

「ここは私にお任せを」

テネブラエが言い、魔物に近づく。そしてなにやら話をしている様子だった。

「……はっはっはっ……」

すぐにテネブラエは、身を揺すり出す。

「笑ってるよ、テネブラエ……」

エミルが思わず一歩退いた時、魔物はひょいと階段のそばから離れた。
「あっ……、どいてくれた」
マルタが歓声をあげる。エミルは、
「ねえ、何がそんなに面白いの？」
まだ身を震わせているテネブラエに訊ねたが、
「それは追々ということで。さあ、行きましょう……ははは」
と、はぐらかされてしまった。
(人間にはわからないつきあいってのがあるんだろうけど……)
「思い出し笑いしてるよ」
「ありえない……」
エミルとマルタは顔を見合わせた。

聖堂の内部は薄暗く、冷んやりした空気に満たされていた。塵(ちり)ひとつ落ちていない床(ゆか)といい、何度も修復された跡のある壁といい、村人がいかにこの教会を大切にしているかがわかる。
そのとき、もの珍しそうにあたりを見回しているエミルたちの前を道具箱を抱えた男

が通りかかった。
「おまえら、迷子の……」
海岸で出会ったドワーフ族の男だ。魔物を階下に待たせて上がってきたのだろう、と
エミルは別段不思議には思わなかった。
「あの時はありがとうございました」
礼を言うマルタの横で、エミルは訊ねた。
「あの……。ここにロイド・アーヴィングの父親がいるって聞いたんですけど……」
すると、男があっさりと頷いた。
「そいつぁ俺のことだ。血の繋がりはねぇがな」
「！」
エミルとマルタに、さっと緊張が走る。そして、ほとんど同時に口を開いてしまった。
「ロイドから何か連絡はありませんか？　私たちロイドを捜して……」
「あなたは！　あなたは父親としてロイドがパルマコスタでしたことを恥ずかしいと思
わないんですか！」
男はふたりを見比べていたが、エミルに向かって答えた。
「あいつは俺の自慢の息子だ。何も恥ずかしいことはない」
「あんた……！」
エミルが赤い瞳で男を睨みつける。だが男は少しも動じず、

「あいつがパルマコスタで起きた血の粛清に関わっているなら、姿をくらましたりしねえさ。自分の責任から逃げるような男に育てたつもりはねぇからな」

と当然のように言った。

「あいつは馬鹿だが、曲がったことをする奴じゃねぇ」

「……」

元の自分に戻ったエミルは、言葉を継ぐことができない。

「あの、じゃあロイドから連絡は……」

ないな、と男がマルタに即答した。

「あいつはエクスフィアを集める旅をしてたんだが、半年前突然戻ってきてな。友だちを助けるために身軽になりたいってノイシュ——外にいた動物を俺に預けて行った。それきりでぇ」

男の口調は次第に淋しそうになる。

「そうですか……」

(この人、ほんとに知らないんだ)

マルタは、エミルにそっと目配せした。聖堂を出て行こうとするふたりに、

「あんたら、もしロイドの奴に会ったら伝えてくれ」

男の声が追いかけてきた。

「ノイシュが淋しがってる。早く帰ってこいってな」

「エミル、どうしたの？」
聖堂の階段を降りたところで、マルタは元気のないエミルに気づいた。
「あの人はロイドと血が繋がっていないのに本当のお父さんみたいだった」
エミルがぼそぼそと応える。
「……それに比べて僕のおじさんは、僕のこと、いつも恥ずかしいって……」
「エミル……」
マルタがどう慰めようかと考え始めたとき、
「あなたたち、ちょっとよろしい？」
凛とした声が聞こえた。振り返ると、銀色の髪の理知的な顔立ちの女性——二十代半ばくらいだろうか——が立っていた。
「村のポールという子供が行方不明なの。この辺で八歳ぐらいの男の子を見かけなかったかしら」
「それなら、村の入り口で会いました。なんか呪いの牧場へ行くとか……」
マルタが答えると、女性は一瞬驚いたように目を瞠ったが、
「ポールは人間牧場へ行ったのね。ありがとう」

失礼にならないぎりぎりの淡白さで礼を述べると、歩み去って行った。
「呪いの牧場って、ディザイアンの人間牧場だったんだ。あの子、大丈夫かな……」
マルタは、先ほどの男の子を思い出して心配そうにつぶやいた。
「ディザイアンはもういないんだし平気だよ。それに……どうせロイドの弟子なんて言ってるんだし」
「エミル……。ロイドは確かにキミの仇だけど、あのポールって子は関係ないよね」
エミルの口調に意地悪なものを感じ、マルタは顔をしかめた。
「そんなこと言うエミルは、私の好きなエミルじゃない」
「――うるさいなっ！」
エミルに怒鳴られ、マルタはびくっとする。
「僕はマルタのことなんて覚えてないんだ！　マルタこそ勝手に理想像作って僕に押しつけないでよ！　好意の押し売りは迷惑だ！」
（好意の、押し売り……私……）
「……ご……ごめん……なさい……」
エミルを傷つけていたという思いが、マルタの胸を締めつける。
「……」
（言い過ぎた……？　でも、僕……）
マルタの自己嫌悪の表情に、エミルは言葉を重ねるきっかけを失ってしまった。

気まずい雰囲気のままふたりが村の入り口まで戻ってくると、人の輪ができていた。
「私のせいです」
中央で口元を押さえている女性が、いまにも泣きそうに声を震わせている。
「私が目を離さなければ、あの子が村を出て行くのを止められたのに……」
あの男の子の母親らしい。エミルとマルタはそっと彼らの背後に近づいた。
「大丈夫だよ、リリアさん。ポールはリフィル先生が見つけてくれる。きっと無事さ」
「え……ええ……」
村の男に慰められ、リリアと呼ばれた母親が気丈に顔を上げたときだった。ひとりの中年女が声をひそめた。
「けどリフィル先生はほら……ハーフエルフじゃないか……」
「何言ってるんだよ！　リフィルさんは神子さまを助けてくださった方じゃないか」
すぐさま反論する別の女性に、他の村人たちも加勢する。
「あの人は、いいハーフエルフだよ。ディザイアンとは違う。きっとポールを助けてくれる」
そうだそうだ、と村人たちはふたたびリリアを慰め始めた。

「ね、ねぇ、エミル。……リフィルってさっきの女の人のことかな?」
そっとその場を離れてから、マルタは訊ねた。
(それにしても、なんだか聞いたことのある名前のような……)
だが、相変わらず機嫌の悪そうなエミルが気になって、それ以上思い出してみようという気にはなれない。
「……かもね」
「あの人……リフィル先生って、ハーフエルフなんだね……。ハーフエルフだから、ひとりでポールを捜しに行かされたのかな?」
マルタが言うと、エミルは、
「……え?」
ようやく顔を上げた。
「だってハーフエルフって差別されてるじゃない。私も……昔は怖いって思ってた」
「ハーフエルフ……差別……」
しっくり来ない言葉の並びに、エミルは首を傾げる。マルタは気持ちを切り替えるように、
「……私、人間牧場に行ってみる。エミルとテネブラエは村で待ってて」
と、努めて明るい口調で告げた。
「は?　どうして?」

ようやく感情が戻って来たように、エミルは驚いてみせた。

「いくらディザイアンは滅んでても、魔物はいるだろうし……女の人ひとりじゃ危ないよ。マルタだって女の子でしょ。僕も一緒に行くよ」

「……けど……。ポールはロイドの弟子なんだよ？」

「いいよ。いまさらそんな風に気を遣わなくても」

目をそらすエミルに、

「……ご、ごめん……」

マルタはまた謝ることになった。

「ごめんね。私……自分ひとりで舞い上がって……迷惑かけて……」

「……ううん。僕……僕も言い過ぎた。ごめん、マルタ……」

エミルも今度は素直に詫びることができた。

「……エミル……。ありがとう」

すっきりした顔で、ふたりはどちらからともなく微笑んだ。

「うわ……。すごい霧だね……」
　人間牧場の敷地の入り口は、霧で先が見えないほどだった。かつてここでエクスフィアが作られていたことを道々マルタから聞かされたエミルには、このうえなく不気味な場所に感じられる。
（いくらエクスフィアってものが人間の能力を極限まで高めてくれるっていったって、人をさらってきて、残酷な人体実験をしてたなんて……！）
「これじゃリフィルって人も、ポールを見つける前に迷っちゃうかも」
　マルタの言葉に、エミルは叫んでみる。
「おーい、ポール！　いたら返事をして！」
　だが、あたりはただ静まり返っているだけだ。
「……なんか……不安……」
「勇気は夢を叶える魔法、なんでしょ？」
　マルタに言われ、エミルはリヒター・アーベントのことを思い出した。
　――勇気は夢を叶える魔法。
　――え？
　――昔、頭のネジのゆるんだ『人間』がほざいていた台詞だ。
（センチュリオン・コアを探してれば、リヒターさんにもまた会うはずだ。そのとき臆病なままだと、笑われちゃう）

「……よし、ちょっと怖いけど、もう少し奥まで行こう」
こくっ、とエミルは喉を鳴らし、先に立って歩き出した。

「それにしても霧が濃いね……」
マルタがため息混じりに漏らした。牧場の施設はまだ残っているはずだが、まだ辿（たど）り着（つ）かない。
「うん。それになんだか嫌な気配が……」
エミルは頷きかけ、ハッと足を止めた。
「マルタ、何かいる！」
「えっ？　ポール？」
霧をかき分けるようにして、マルタはエミルの指さす方を調べてみた。が、すぐに、ほっと息をつく。
「なんだ、ただの樹じゃない」
目の前には数本の樹が生（は）えているだけだった。
「ご、ごめん……。確かに動く気配がしたと思ったんだけど……」
霧がもやもやと動いているせいかなと思いながら、エミルは頭を掻いた。

「ふふ。エミルってば、怖いの？」
「そ、そりゃ……怖いよ。僕、本当は戦うのだって……」
木立(こだち)に背を向けて言葉を交わすふたりに、テネブラエが鋭く叫んだ。
「ふたりとも！　危険です！」
ハッと振り返ると、二本の樹がゆらゆらと動いているのが目に入った。
「うわっ！」
剣の柄(つか)へと手を伸ばしながら、エミルが飛び退る。
「ま、魔物！」
樹だとばかり思っていたものは魔物だったのだ。マルタもスピナーを構え、霧の中に目を凝らした。
「これは、ヒルスタです！」
テネブラエの声を耳にしたのは赤い瞳のエミルだった。
「行くぞっ！」
ふたりはそれぞれ一体の魔物と向き合う。
「私はこっち！」
サボテンに似た魔物は長い腕をひらひらさせて攻撃してきたが、幸いそれほど手強(てごわ)い敵ではなかった。
エミルにやや遅れ、マルタも魔物を倒してしまうと、あれだけ濃かった霧が晴れて視

界がひらけた。
めちゃくちゃに破壊された跡はあるが、施設はすぐ目と鼻の先に建っていた。
「ポールもこの奥なのかな……」
「ヒルスタは移動しますから、こいつが入り口をふさぐ前に、ポールが奥へ進んでいる可能性はありますね」
気味悪そうに灰色の建物を見上げるエミルに、テネブラエが頷く。
「それにしても、エミル、すごい！　テネブラエも気づかなかった魔物の気配に気づいたんだもん」
マルタは施設に向かって歩き出しながら、くるりと振り返って笑った。
「その点は不覚でした。私としたことがお恥ずかしい」
テネブラエは、自分が魔物の気配を察知できなかったことをふたりに詫びた。
「しかし確かにマルタさまの言う通り、エミルは目覚めつつあるようですね」
「目覚める？　何に？」
エミルが訊ねる。
「マルタさまを守るラタトスクの騎士として、ですよ」
「……テネブラエ。私を守るとかそういうの、もうナシにしたから」
さばさばした口調で言い切るマルタに、テネブラエはだが不満そうだった。
「はぁ。ですがラタトスクの騎士であるということは……」

「私のおでこのラタトスク・コアを守るってことでしょ。私とふたりで。それでいいよね、エミル」
「う、うん……」
思わず同意してしまってから、
(なんかちょっと淋しい気がするのはなんでだろ……)
彼はマルタの横顔に視線を当てる。
(両極端なんだよな、マルタ……。でもそれなら僕だって)
ふだんの自分とラタトスクの騎士である自分。どちらもエミルだと言ってくれるマルタの方が自分よりずっと大人なのかもしれない、と彼は思った。

施設の扉はとうになくなっており、冷たい風が吹き込んでくる。内部もひどく破壊されていたが、非常用の灯(あか)りだけは生きていたので、かろうじて足元の安全を確認することができた。
「ここが人間牧場……」

ぶるっと身震いしながらエミルが言うと、思わぬ大きさで声が反響する。
「エミルってば。心配しなくても、もうここにはディザイアンはいないんだよ」
「う……うん……」
今度は囁く(ささや)ように返事をしたエミルを見て、マルタはいたずらっぽい表情になった。
「……これじゃあ、どうやら私がエミルを守るナイトになりそう」
「ぼ、僕は男だよ！」
あわてて言い返すエミルがおかしくて、
「あはは、ごめんごめん」
と、マルタは笑ってしまう。
「でも、男の子だからって女の子に守られたらだめ、なんて決まりはないよね」
「そりゃそうだけど……」
そのとき、テネブラエが咳払いをした。
「ふたりとも。今いちばん重要なのは？」
「ポールを捜すこと」
「ポールを捜すこと」
同時に答えたふたりに、
「よろしい」
センチュリオンは満足げに頷いた。

だが、ポールを見つけ出すのは容易ではなかった。効率よく捜そうにも施設の主要な通路は破壊されており、端から順に調べて行くということができないのだ。
「ディザイアンを倒したのは神子たちだよね？　まさか……ここもコレットが？」
歩けそうな場所を探しながら、ふと思いついてエミルがそう口にすると、
「そんな乱暴なことする感じじゃなかったけど」
マルタが答えた。
「コレットさんはのどかな感じの方でしたからね」
テネブラエも会話に入ってくる。
「血の粛清で笑いながら人を殺していたロイドとは、結びつかないのも当然です」
「コレットは特にテセアラびいきって感じはしなかったけど、ロイドはどうなんだろうね」
マルタがエミルを見やると、彼は吐き捨てるように言った。
「……決まってる。あいつは、マーテル教会とテセアラ人以外を虫けらだと思ってるんだ」
瓦礫（がれき）を踏みつけ、がらんとした部屋に足を踏み入れる。そのとたん、エミルは一段高くなった場所に倒れている男の子を見つけた。
「ポール！」
思わず駆け寄ったエミルの背後に、馴染みのない気配が生まれる。

いきなり半透明な何かに体を締め付けられ、彼は叫んだ。
「うわあっ！」
「きゃあっ！　なにコレ！」
マルタは、エミルを摑んでいるものの正体が、さっと実体を持ったことに驚く。半透明だったそれは、いつの間にか巨大な樹木の姿に変わっていた。
「じ、地面から魔物が生えてる！」
エミルは、自分を締め付けているのが床を突き破って咆哮（ほうこう）している魔物の手であることを知って、唇をわななかせた。
「部屋そのものが魔物だったってこと⁉」
あわてたマルタが部屋中を見回した。エミルが、
「こ、こういうの、なんて言うんだっけ……」
ええと、と考えていると、部屋の入り口で声がした。
「木を見て森を見ず、と言うのよ」
「そ、それだ……って、えっ？」
ポールを見かけなかったかと訊ねた、あの女性だった。
（ええと……リフィル……先生……だっけ？）
驚いて瞠ったエミルの瞳に、まばゆい光が映る。
（え……⁉）



「フォトン！」
「うわっ！」
　彼女が手にしていた杖から放たれたのは光の粒子だった。攻撃をまともに食らった魔物――メイヘムは、エミルからいったん手を離したものの、すぐに怒りに満ちた唸り声をあげる。
「来るわよ！　あなたたち戦えて？」
「は、はいっ！」
　エミルがリフィルの横につくより早く、
「もちろん！　やられたらやり返す！」
　マルタが飛び出した。
「あっ、さっきのと同じ……」
　暗がりから出てきた二体のヒルスタを目にして、マルタは再びスピナーを構えた。
「こっちを先にやっちゃった方がいいかも」
　彼女はリフィルに目配せする。
　その間にもメイヘムは巨体を揺すり、足元で唸り声を上げているウルフを手で払いのけながらエミルに向かってきた。
「俺が相手だ！　うおぉぉぉぉっ！」
　エミルは床を蹴り、穿孔破（せんこうは）で魔物の胸の辺りを鋭く突いた。乾いた木の皮のような手

ごたえだ。
よく見ると、胴体にあたる幹の部分は太いのに、脚はひ弱でひょろりとしていた。
「おとなしく地面に埋まってろ！　鳳翼旋っ！」
体勢を崩したメイヘムにエミルの剣が縦に振り下ろされ、再び回転してくる刃が傷を抉る。体勢を立て直せないメイヘムを、ウルフたち味方の魔物が取り囲んだ。
「エミル！」
ヒルスタを倒したマルタとリフィルが駆け寄る。エミルはふたりにちらりと視線を流し、メイヘムに挑んだ。
「待ってろ——これで終わりだ！　魔王地顎陣っ！」
噴き上がる力で床が弾け飛ぶ。圧倒的な攻撃がメイヘムを叩きのめした。
「ちっ、無様だな……」
地響きをたてて倒れたメイヘムの幹を蹴飛ばした瞬間、もとのエミルが内に戻る。
「ポール、しっかりして」
エミルに優しく肩を揺すられ、男の子は目を覚ました。
「あ、あんたたちは……」
ポールはぼんやりとエミルとマルタの顔を見上げていたが、
「ポール。まずはこのふたりにお礼を言いなさい。あなたを捜しに来てくれたのよ」
つかつかと歩み寄った女性を見て、ハッとした。

「リフィル先生！」

「怪我（けが）はない？」

マルタが優しく訊ねる。

「う、うん……。ありがとう……」

「ところでポール。ここは立ち入り禁止だと教えなかったかしら」

リフィル先生と呼ばれた女性は、にこりともせずに訊ねた。とたんにポールはしどろもどろになる。

「あ、あの……おいら、ロイドに代わって見回りを……」

「それは自警団の人たちの仕事です。さあ、約束を破った子にはおしおきよ」

リフィルは男の子をひょいと小脇に抱えると、高らかな音を響（ひび）かせてお尻をぶち始める。

「先生、ごめんなさぁい！」

「……」

エミルもマルタも、おしおきが終わるまでそこに立ち尽くしているしかなかった。

ようやく解放されたポールは、小さな手でリフィルの指にしがみつくようにして立つ。

ふらついているのかな、とエミルは彼がかわいそうになった。それでも、かつて叔父のアルバから受けた折檻（せっかん）を思い出せば可愛いものだ。

「自己紹介がまだだったわね」

リフィルはようやくふたりに向き直った。
「私はリフィル・セイジ。教師よ。あなたたちは？」
「あ、僕はエミルです」
「私はマルタ。ふたりで旅をしています」
そう、と頷いたリフィルは、
「話をしたいことがあるの。とりあえずいったんイセリアへ戻りましょう」
と、出口へ向かい始めた。

「私はこの子を親御さんのところへ送って行くわ。よかったら学校で待っていてもらえるかしら」
イセリアの村に戻ったところで、リフィルが言った。
「は、はい……」
彼女はエミルを一瞥すると、学校の場所を説明してからポールの家へ向かった。
「話ってなんだろうね」
「うん……。何か怖い目で僕のこと見てたけど」
マルタとエミルはそう話しながら、いま聞いたばかりの学校への道を辿る。

「もしかして、村長さんが言ってたロイドの先生ってあの人なのかな?」
マルタの言葉に、エミルはどきりとする。
「……ロイドの……」
それならリフィル・セイジもまた、自分にとって好ましくない存在なのだろうか。エミルは遠くに見えてきた学校の屋根を見つめながら、そう思った。

村の学校には教室がひとつしかないようだった。放課後でなければ、子供たちの賑やかな声でうるさいくらいなのだろう。
「すごい。これってみんなロイドの似顔絵だよね……」
壁に並べて貼られている画用紙に歩み寄りながら、マルタが声をあげる。赤い服にツンツンの髪。それだけが共通点の絵は、子供たちの数だけの個性を持って描かれている。
「人間は器用ですね。どれ、ちょっと見てみましょう」
「テネブラエに絵心があるとは思わなかった」
マルタがからかうと、
「心外ですね」
テネブラエはぷいと顔を背けてみせた。が、すぐに一枚の絵に視線を止める。ロイド

の顔がどアップで描かれている。
「これは先ほど助けたポールが描いたもののようですね」
「だいすきロイド……か」
へたくそなシルヴァラント語の下には、やはり汚い字でポールの署名があった。
「……みんなどうして――」
ロイドなんか、といいかけたロイドを、
「誰か来ます！」
テネブラエが遮り、姿を消した。
「お待たせ――あら、絵を見ていたのね」
教室に入ってきたのはリフィルだった。
「これ、さっきの子が描いたものですよね。ロイドのこと大好きなんですね」
「……ポールの父親は二年前のディザイアンによるイセリア攻撃で亡くなったの」
リフィルはマルタに応え、微かなため息を漏らす。
「ロイドの……いえ、ロイドと私の弟が引き起こした、あの事件でね」
ふたりで何かやったらしい、とマルタは思う。
「それなのに、どうして……」
弟がいるのか、と思いながらエミルは訊ねた。
「ポールは笑顔を忘れ、ふさぎ込んでしまったわ。世界再生の後でそれを知ったロイド

は毎日、ポールの元に通ったの。ポールのお母さんに罵(ののし)られてもね」
彼女はひと呼吸置くと、窓から差す西日に目を細めた。
「そして、ポールのお母さん――リリアさんにプロポーズした」
「プロポーズ？」
「プロポーズ？」
エミルとマルタの声が揃う。
「ええ。自分が父親の代わりになろうと思ったらしいわ。そのためにリリアさんと結婚する必要があると考えたのね」
「そ、そんなバカな……」
なんて単純なの、とマルタは頭を抱えたくなった。
「当然リリアさんも怒ったわ。怒ってトマトを投げつけた。それをロイドが反射的に打ち返してしまって、トマトはリリアさんに命中――その後は、家中がトマトまみれで大騒ぎ。でも、気づいたらポールもリリアさんも大笑いしながらトマトを投げていたの」
ロイドがポールの笑顔を取り戻したんだ、と微笑むマルタは、エミルの変化に気づかずにいた。
「……そんな話、聞きたくねぇっ！　みんなうぜぇんだよ！　ふた言目にはロイドロイドってな！」
（エミル⁉）

　ハッとしたときにはもう遅く、赤い瞳のエミルがリフィルに食ってかかるところだった。
「だいたいてめぇはどうしてそんな話を聞かせやがるんだ！」
「あなたたちの話は村長から聞いたわ。私がロイドの担任だった教師よ。あの子と一緒に旅をしていたわ」
「何故みんなロイドをかばうのか、聞きたいのではなかったの？」
　リフィルはエミルの剣幕に少しも怯(ひる)むことはない。
「うるせぇっ！」
　エミルは喚いた。
「どうせてめぇもロイドは悪くねぇとか言い出すんだろーが！」
「あら、誰がそんなことを言ったかしら」
　おかしな雲行きに、マルタは思わずリフィルの顔を見上げる。
「あなたはロイドのことを信じていないんですか？　あなたはロイドの仲間だったんでしょう」
「私があの子を信じることと、パルマコスタの事件が事実か否かは別の問題よ。それにパルマコスタの事件と過去のロイドの人間性は何の関係もないわ。冷静になりなさい。そうしなければ真実は何も見えないわ」
　理屈は合っているのだろう。だが、感情の入り込む隙がまったく感じられない。マル

タは眉を寄せた。
「……冷たいんですね」
「そうかもしれないわね」
「……最低！」
そう言い捨てると、マルタはブーツの足音も荒く、教室を飛び出して行った。
「……マルタ……。マルタ、待ってよ！」
驚くエミルの中に、一瞬でいつもの自分が戻ってきた。リフィルへの中途半端な会釈もそこそこに、あわてて学校の外へ出る。が、彼女の姿はもう見当たらなかった。
「マルタ、どうしちゃったんだろう」
「さあ……。とにかく捜してみましょう。この村からマルタの気配がします。まだ遠くには行っていないと思いますよ」
テネブラエが鼻先を持ち上げるようにして言った。

マルタは池のほとりに座り込んでいた。

「マルタ、急にどうしたの。リフィルさんって僕たちの味方っぽかったのに」

ほっとしながら訊ねると、

「……私、ああいうの嫌だ」

頑なな口調が返って来た。

「マルタ……」

「あの人ロイドの仲間だったんだよ。それなのにどうしてあんなに冷たいことが言えるの？」

マルタは立ち上がって水面を見つめていたが、くるりとエミルを振り返る。

「もし私があの人と同じ立場で、エミルを悪く言われたら私、絶対かばう。だって仲間だもん。エミルを悪く言う人のこと怒るし、きっと説得もする」

「……そうか。だからみんなロイドをかばうんだ」

エミルは、やっと納得したという表情で、マルタを見た。

「エミル……？」

「ロイドのこと好きだって言う人のこと怒っても仕方ないんだ。みんな僕らと同じなんだもん」

そう言うと、彼はハァッとため息をついた。

「そんな当たり前のことに僕、気づかなかった。ずっとイライラしてた」

「だからあのリフィルという人は、冷静になれと言ったのかもしれませんね」

テネブラエがゆっくりと尻尾を振る。

「誰だって自分が好感を持っている相手を否定されれば腹も立つでしょう。そんな状態では仮にロイドの行方を知っていても、教えてはくれない。——違いますか？」

テネブラエの言う通りだ、とエミルは認めた。そしてマルタを説得しなければと思う。

「ねぇ、マルタ。もう一度リフィルさんに話を聞こう。あの人なら僕らの力になってくれるかもしれないよ」

「……うん」

渋々ではあったが、マルタは頷いてくれた。

リフィル・セイジはまだ学校に残っていた。

「あの……さっきは……」

おそるおそるエミルが声をかける。意外にも彼女は怒っていなかった。

「謝らなくていいわ。あなたにとってロイドが仇なのは事実なんだから……。でも彼に助けられた人間にとって、彼は恩人なの。その事実だけは認めなくてはね」

すると、マルタが単刀直入に訊ねた。

「……あなたはロイドを信じていないんですか？」

「私の個人的主観があなたたちの役に立つとは思えないけれど」
挑むようなもの言いに、マルタはムッとなる。
「私にはわかりません。あなたはロイドの先生で、仲間なんですよね」
「そうね、私はロイドが好きよ。信頼できる人物だと思っている。それは今も変わらないわ。でも、人は良くも悪くも変わるものだわ。今の彼を私は知らない」
リフィルは腕組みをし、根気強くマルタに説明しようと試みているようだった。
「私の『信じる』という主観がパルマコスタ襲撃に巻き込まれた人たちの言葉を否定するだけの根拠にはならない。──そう思っているだけよ」
「む、難しいんですけど、つまり僕たちのことも信じてくれるってことですか？」
エミルの問いに、彼女は小さく首を振る。
「あなたたちの人格ではなく、パルマコスタ襲撃という事実を信じるということよ」
「わ、私たちは信じられないって言うんですか？」
「あら、あなたたちだって私を信じられる？　私たちは出会ってまだいくらもたっていないのよ。信じるに値するかは、お互い今後にかかっていると思うのだけれど」
「……理屈っぽい人」
マルタが思わず唇を尖らせると、リフィルは、
「ふふ。ロイドの情報を持っているかもしれない相手に、それはないわね」
と、思わせぶりに笑ってみせた。

「ロイドの行方、知っているんですか？」
エミルが訊ねると、
「あなたたちの旅のこと……特にセンチュリオン・コアについて教えてくれるなら、ヒントをあげるわ」
と微笑む。マルタは驚いて、思わず一歩後ずさった。
「ど、どうしてセンチュリオン・コアのことを⁉」
「コレットから話を聞いたのよ。だから人間牧場の跡地であなたたちの名前を聞いてすぐにピンときたわ」
なぁんだ、とエミルは思う。
(どうりで詳しいはずだよ)
「マルタ……どうする？」
「……話そう。コレットは私たちの敵じゃなかったんだし」
「そうだね」
エミルは、リフィルにこれまでの事情をかいつまんで話して聞かせた。
「……なるほど。ラタトスクの騎士、ね」
リフィルの頭の中では、恐ろしい速さで話が整理されているようだった。
「いいわ。疑問点は追々(おいおい)、聞かせてもらうことにしましょう――それでロイドの行方だけれど、あの子を見かけた人がいるそうなの」

「ホントですか？」
エミルが身を乗り出した。
「ええ。コレットのご近所さんでペペという人よ。一緒に話を聞きに行きましょう」

リフィルの来訪を知ると、ペペという青年はすぐに家の中から出てきた。
「リフィルさまっ！」
だが、一緒にいるエミルとマルタを見るや、微かに顔を顰める。
「ペ、ペ、悪いんだけれど、このふたりにロイドを見かけたときのこと話してくれるかしら」
「え……だけどこいつらロイドを仇だって追い回してるって……」
誰が言いふらしたのか、ふたりの噂はすっかり村に広まっているらしい。
「誤解よ。私が保証するわ」
「リフィルさまがそうおっしゃるなら……」
ようやくペペは話をする気になったらしい。
「少し前、変な空飛ぶ乗り物が旧トリエット跡の方へ飛んでったんだ。あのツンツン頭は間違いなくロイドだよ」

「ホントですか！　あ、ありがとうございます！」
ぺペに礼を言うエミルの腕を、マルタが引っぱる。
「エミル、急ごう！　もしかしたら追いつけるかも！」
「うん」
ちょっと待って、とリフィルがふたりを呼び止めた。
「私も同行させて欲しいのだけれど」
「ど、どうしてですか？」
意外な申し出に、マルタはびっくりしてしまう。
「私はロイドの担任教師よ。もしも本当に道を踏み外したのなら、支え、正しい道に戻してあげなくては。それに――」
と、リフィルは続けた。
「ロイドがセンチュリオン・コアを集めているというのも気になるわね。あの子は半年前までエクスフィア探しの旅をしていたの。あの子にとっては父親との約束でもある、大切な使命なのよ」
「父親……」
マルタは、つっと視線を足元に落とす。エミルが、
「それってダイクさんですか？」
と聞いたが、リフィルは答えなかった。

「……とにかくそのエクスフィア探しを中断するぐらい、センチュリオン・コアが重要だということよ。興味深いわ」
「……エミル、どうする？」
マルタ自身はあまり乗り気でない様子だったが、
「一緒に行ってもらおう」
と、エミルは即答する。
「リフィルさんが一緒なら、パルマコスタのことも聞けるかもしれない……」
「そうだね……」
「なら、しばらくの間よろしくお願いするわね」
リフィルは腕組みをしたまま言い、それからがらりと口調を変えた。
「ところで、ふたりともおなかがすいたんじゃない？」
「え……」
「そういえば」
顔を見合わせるふたりに、
「これ、私が作ったのよ。出発前に召(め)し上(あ)がれ」
リフィルはいそいそと紙包みを差し出した。
「そ、それはどうも」
（さすがは学校の先生。面倒見いいんだ……）

マルタは包みをぺりりと破いたが、とたんにぎょっとなった。
「な、なんですか、これ……」
ごつごつした茶色っぽいものが、ごろりと現れたからだった。それに、この鼻を突く刺激臭は何だろう。
「ああ、説明がまだだったわね。レモン詰めご飯よ。ほら、酢めしっていくらでも入っちゃうような食べやすい感じがするでしょう？　あれを普通のご飯にも生かせないかと思って、レモンを丸ごとくりぬいて、その中にお米を入れて炊いてみたの。隠し味はガラムマサラね。画期的でしょう⁉」
「あ……や、やっぱり僕たち、もうちょっとあとでいただきます……」
エミルは変色したレモンと、そこからはみ出しているご飯から目を背けながら言った。
「あら、そう？」
リフィルは残念そうだ。
（マルタも決して料理がうまいとは言えないけど……この人はその上をいってるな。いや、上じゃなくて下と言うべきかな……）
エミルは密かにそう思った。これまでの旅でマルタの作った食事を何度か口にしたことはあるが、今ではすっかり彼が料理担当だ。
（マルタのは味見をしないからどっちかっていうと味が極端なんだけど……、この人のは理屈っぽいからなお悪い気が……）

これからは三人分の食事作りが日課になるんだろうな、と彼は覚悟した。
「そうだ。マルタ、リフィルさんにテネブラエを紹介しないと」
さりげなく紙包みをしまいながらエミルがマルタを促したのは、イセリア村の入り口だった。幸いひと気はない。
「あ、そっか」
「お呼びですか？」
すぐにテネブラエが姿を現した。
「！」
リフィルは黒ずくめのセンチュリオンを凝視する。
「動物――いいえ、魔物が喋（しゃべ）った？　……ああ、これがコレットの言っていたテネブちゃんね」
「テネブラエ、です」
しっかり訂正してから、彼は続けて言った。
「あなたはなかなか賢い方のようだ。マルタさまとエミルをお願い致します」
「精霊……とは気配が違うのね。やはり魔物に近い感じだわ」
「魔物は私のしもべですから」
テネブラエが頷く。
「なかなか興味深いわね。是非色々お話ししてみたいわ」

「すごいなぁ、リフィルさん。動じないよ」
「そうだね。根本的にクールな人なんだろうな」
エミルはマルタと話しながら、
（やっぱり普通の人とは違うんだな……ロイドの仲間だから……）
と思いかけ、そんなことを感じた自分をあわてて否定する。
ロイドの故郷なんかにいるから調子が狂っているだけなんだ、と彼は自分に言い聞かせた。
「歓迎しますよ」
ふたりはそれからもしばらく対等に言葉を交わした。

7

びっしりと霜が降りた道に、雪がちらつきだした。
エミルたちはロイドがこちらの方角へ向かったという情報を得て、旧トリエット跡までやって来たのだった。
が、同行してきたリフィルは旧トリエット跡に駆け込むなり、
「おおおおお！」
と、野太い声をあげてのけぞり、髪をかきむしり始めた。
「ど、どうしたんですか⁉」
驚いたエミルが訊ねたが、彼女の耳には入らないらしい。遺跡の入り口へ続く階段を数段飛ばしに駆け上がる。
「ああ、なんということだ！　大樹暴走で崩壊したとは聞いていたが貴重な遺跡が！カーボネイトがっ！」
リフィルは遺跡をまじまじと見、ふたたび叫んだ。
「損失だ……偉大な歴史の損失だ！」

マルタはエミルの側に寄ると、そっと囁く。

「リフィルさんも二重人格なのかな」

「も？」

「ほら、エミルも戦闘中とか、それ以外もときどき人が変わったみたいになるから……」

「え、戦ってるとき以外も変わってる？」

「う、うん……。あれ、気づいてると思ってたけど……」

ラタトスクモードになるのは戦闘のときだけだと思っていたエミルは、驚いた。

そのとき、ふたりの会話がやっと聞こえたらしいリフィルが降りてきて、言った。

「戦闘中に人が変わったようになるのは、ラタトスクの騎士の力、と聞いていたけれど……」

「あ、はい。ラタトスクの力が憑依して変わっちゃうみたいです」

元のリフィルに戻っていることにほっとしながら、エミルは答える。

「……ラタトスク・コアというのは、確かマルタに寄生しているのよね」

マルタは、

「はい、おでこのところについている宝石がそうです」

と、前髪をかきあげ、美しい赤い輝きを指さして見せた。

「……そう」

リフィルが重ねて唇を動かそうとしたとき、テネブラエが近づいてきた。

「少しよろしいですか？　この瓦礫（がれき）の奥、魔物と人の気配がします」
「ほんと？　リフィルさん、行ってみましょう。ロイドかもしれません」
マルタは髪飾りを手で直しながら、女教師を促した。
「……ええ、そうね。行きましょう」

遺跡の中は暗く、エミルたちは瓦礫につまずかないように歩くのが精一杯だったが、リフィルは実に興味深そうに壁に触り、ときにはあたりの匂いを嗅ぎ、そしてまた崩壊の酷（ひど）さを呪うような言葉を吐き捨てたりした。
（忙しい人だなぁ……そう言えば）
「もしかして、コレットの言っていた〝まにあ〟って、リフィルさんのことですか？」
エミルが訊ねてみると、マルタも横で「あ、そうか」と声をあげた。
（だから名前に聞き覚えがあったんだ。石舞台の儀式の手順も一度聞いただけで覚えちゃったっていう、あの人だよね）
「たしかに、あの子達は私のことを遺跡マニアと呼んでいるようね」

リフィルは頷き、そして冷静に質問を返す。
「でも、どうして『マニア』という単語だけで私のことだと思うの？」
「あ、あの、その……コレットが、遺跡を見ると突然別人のようになる仲間がいるって……」
エミルはしどろもどろになる。リフィルはさらに突っ込んで、
「別人のように？」
と鋭く訊ねた。
ええ、とテネブラエが割り込んできた。
「性格が突然豹変するさまはまさに、悪鬼羅刹異類異形怨霊怪異怪力乱神牛頭馬頭狐狸妖怪山精木魅魑魅魍魎妖異幻怪妖怪変化だと言っていました」
「！」
リフィルの唇がわなわなと震える。
「私がそれに当てはまると、エミル？」
「えっ、そんなこと！　ちょっとテネブラエ！　そういうのやめてよ！」
エミルが声を裏返すと、テネブラエは「ふっふっふっ」と低く笑いながら、さっさと先へ進んで行ってしまった。

テネブラエが感じた気配の正体は、ほどなく判明した。
「もうダメだぁ……」
遺跡の奥へ続く通路を大きな枯(か)れ木(き)に似た魔物が占領してしまっている。そこで困り果てているひとりの少年がいた。
「ジーニアス!?」
彼を見るなり、リフィルが声を上げる。
「姉さん!?」
振り返った少年はリフィルと同じ銀色の髪を持っていた。
(姉さん、ってことは、彼がリフィルさんの弟か——十歳くらいは年齢が離れてる感じだな)
エミルはかつてロイドと行動を共にしていたという少年をじっと見つめた。小柄で目が大きく聡明そうな顔立ちをしており、ロイドの仲間に会う度(たび)に感じることだが——とても悪人には見えない。
「ジーニアス！　あなたこんなところで何をしているの。イセリアで落ち合う約束だったでしょう」
リフィルが大きな声で叱ると、ジーニアスはうなだれ、
「ごめん……。でもロイドを見かけたんだ。それで追いかけようと……」

と言いかけたが、ふいに顔を上げる。
「……っていうか、姉さん。その後ろの人たちは誰？」
「それが、実はね――」
リフィルはエミルとマルタを紹介し、簡単に事情を説明して聞かせた。
「なるほどね。それで姉さんたちもここへ来たんだ」
ジーニアスは賢そうな瞳をくるりと動かした。エミルは、
「ロイドはこの奥？」
と、気になっていることを訊ねてみる。
「そうだけど、あの魔物が通せんぼしてて先に進めないんだ。攻撃してもびくともしないし……」
魔物は眠っているらしく、少しも動かない。
「ロイドはこれをどうやってどかしたんだろう」
ジーニアスが首を傾げたとき、それまで姿を消していたテネブラエが現れた。
「多分餌を与えたのでしょう」
「な、な、何っ!?」
少年はびっくりして後ずさった。
「私はセンチュリオン・テネブラエ。お見知り置きを」
「あ……ああ。さっき話に出てたテネブちゃんとかいう……」

ジーニアスの言葉に、

「テネブラエ、です」

と、テネブラエはまた嫌な顔をしてみせた。

「……それであの魔物、デナイドですが、睡眠中は全ての属性攻撃を吸収してしまいます。ただ、食い意地が張っていますから、餌を与えれば目を覚まし、どいてくれるでしょう」

そうか、とジーニアスは魔物を改めてまじまじと眺め、

「昔ここに来たときは、こんな奴いなかったけどなぁ」

とため息まじりに言った。

「暑いところを好む魔物ですから、この寒さで暖かい地下に逃げ込んできたのかもしれません」

「じゃあまずはあいつの餌を取ってこないと。何を食べるの？」

マルタがテネブラエに訊ねる。

「主に淡水系の魚や魔物が好物です」

「この辺りの淡水というとトリエットのオアシスかしらね」

リフィルが頭の中の地図でも見ているような顔つきで言った。

「トリエットに行くならボクもついてく。ずっとここでこいつとにらめっこしてて疲れちゃったよ」

ジーニアスはトントンと自分の肩を叩いてみせた。
「トリエットに……砂漠に雪が降るなんて……」
一面まっ白の砂漠は、奇妙なものだった。マルタは積もった雪のせいでたわんでしまっている露店の屋根を悲しげに眺めた。店にひと気がまったくないのは、これでは商売にならないからだろう。むろん観光客の姿もない。
「異常気象のせいでこうなってるんじゃないの？　イセリアだって寒かったし」
エミルが言うと、マルタはまだ納得がいかない口調で、
「でも、つい何か月か前に来たときはこんなじゃなかったのに……」
と、足元の雪を蹴った。
「そうね。確かに雪まで降り始めたのはここ一か月ぐらいのことらしいわ」
リフィルがあたりを見回していると、テネブラエが姿を現した。
「これはセンチュリオン・コアの暴走によるものかもしれません」
「でも、こんなに突然変わるもの？」
マルタはまだ唇を尖らせている。
「他のセンチュリオン・コアの覚醒（かくせい）によって、よりバランスが狂ったとも考えられます」

ふーん、とジーニアスがテネブラエを横目で見、
「センチュリオン・コアって迷惑なものだなぁ……」
と文句を言った。
「いやはや、申し訳ありません」
テネブラエはきゅっと身を縮める素振りをしてみせた。
「そ、それにしても寒くない？」
エミルがぶるっと身震いすると、ジーニアスも、
「凍えちゃうよ」
と、足踏みをする。なにしろ彼は元気な半ズボン姿なのだ。
「あれっ。マルタ、なにしてるんだろう……」
ジーニアスが指差す方向に目をやると、露店の空きスペースを借りて火を起こしているマルタの姿があった。
「みんな、あったかいシチューができるよ！　体をあっためてから行こうよ♡」
「え……」
エミルは、こちらに向かって手を振るマルタに顔をひきつらせた。
「うっわぁ、気がきくなあ、マルタ。……って、あれ？」
歓声をあげかけたジーニアスは、ごしごしと目をこすった。
「ねえ、エミル。いまマルタ、鍋になにか白いものをどばっと入れなかった？　水がわ

りの雪かなあ？」
「い、いや、雪じゃなくてたぶん……塩、かと」
「っ!?」
ジーニアスはエミルに体を寄せ、
「いつもああなの？」
と訊ねる。
「いや……あはは……はは……」
(こっちもレモン詰めご飯のこと聞いてやろうかな)
エミルはごまかし笑いをしながら、密かにそう考えた。

オアシスは完全に凍結してしまっていた。
「うわ……、凍ってる……」
エミルはかつては水汲み場だったあたりで足を滑らせかけ、ひやりとした。
「これじゃ水の中に棲む動物なんて捕まえられないよ」
マルタは氷の分厚さにあきれてしまう。ジーニアスがけん玉を手に、
「ボクが魔術で溶かそうか？」

と、提案したが、
「それでお目当ての魔物まで焼いてしまったら問題よ」
と、リフィルに却下される。そのときテネブラエが現れ、氷の上に浮かんだ。
「湖面に穴を空けて釣り上げてはどうでしょう」
「じゃあ釣竿持ってこないと……」
「いえ、私が釣竿に変化します。餌は配下にした魔物を使いましょう」
「え!? そんなことできるの!?」
釣竿をどこで借りてこようかと考え始めていたエミルは、テネブラエが変化すると聞いて驚いた。
「もちろんです」
「で、でも、せっかく配下にした魔物を餌にしたら……」
マルタは、ウルフやウルフが集めてくれる魔物たちのことを思い浮かべる。敵と戦うのに必要な仲間たちだからだ。
「大丈夫。本当に食べさせはしませんよ。ルアーにするようなものとお考えください」
「彼にお願いしましょう。ぐずぐずしていたらロイドに逃げられてしまってよ」
心配そうなマルタに言い聞かせるように、リフィルが決定を下した。
そうですね、とエミルは頷いて見せたが、変化するテネブラエにリフィルが強い興味を抱いているらしいことはひと目でわかった。

「テネブラエ、頼むよ」
「では、湖面へ参りましょう」
テネブラエはエミルを従え、すーっと凍りついたオアシスへと移動した。
適当な場所に穴を空けると、テネブラエは苦もなく釣竿に姿を変え、エミルの手に収まる。エミルは手持ちのうちいちばん小さい魔物を選んで針につけ、そっと水に糸を垂らした。
（本当に釣れるのかな……）
エミルは半信半疑だったが、いくらもしないうちに強い手ごたえがあった。グググッと引きが来る。
「お、大きいのがかかった！」
エミルはあわてて釣竿を上げようとするが、びくともしない。それどころか、水中に引き込まれてしまいそうだ。
「お、重いよ……」
「私を離してはいけません」
テネブラエが鋭く言った。
「で、でも……」
「頑張って、エミル！」
背後にいたマルタが応援する。



「力を合わせて引き上げるのよ！」
リフィルの号令でジーニアスも加わり、エミルたちは四人がかりでようやく釣竿を上げることができた。
メリメリと氷を砕きながら姿を現したのは、巨大な亀にも似た魔物だった。
「デナイドの好きな餌、アーケロンです。……が、ずいぶん大きいですね」
元の姿に戻ったテネブラエは、感心したようにアーケロンを眺めた。魔物はゆっくりとエミルたちの方へ顔を向ける。
「……なんかこっち睨んでない？」
アーケロンの視線にマルタが気づいた。その瞬間、魔物は唸り声を上げ、太い脚で氷を蹴った。
「来るよ！」
ジーニアスが叫んだ。
ラタトスクモードのエミルが鳳翼旋で翻弄する。
「しびれちゃえ！　ライトニング！」
ジーニアスはけん玉を振り上げ、魔物の上に雷を落とす。
その衝撃で氷に亀裂が走った。
「うわっ!?」
「ジーニアス、危ない！」

よろけた弟を支えるリフィルの陰から、マルタが飛び出した。
「鳳凰震脚っ！」
アーケロンにスピナーで斬りつけてから、氷の亀裂をひょいと飛び越えたマルタは、そのまま魔物に蹴りを入れる。
「もらったぜ――！」
隙だらけのアーケロンは、エミルの一撃を受けて動かなくなった――。

「こ、これを持っていくの？　重いんじゃや……」
エミルは緑の瞳で仲間たちを振り返った。
アーケロンは氷の上にうずくまり、甲羅を微かに上下させている。
「まだ、完全に息の根は止まっていないようね。仲間にしてはどうかしら」
「え⁉　だけど、この後食べさせるんでしょ？」
ジーニアスが言うと、リフィルは首を傾げてみせる。
「あら、隙を作ればいいだけなんだから食べさせなくてもいいんじゃない？」
それを聞いて、テネブラエは「なるほど」と頷いた。
「確かに……。エミル、契約をお願いします」
「や、やってみるけど……。失敗しても怒らないでよ」
自信がなさそうにエミルが呟く。

幸い、左手をかざすと、魔物を中心にした円陣が現れてくれた。契約はうまくいったのだ。

「これでやっと先に進めるね」

「うん。急いでロイドを追いかけなきゃ」

マルタとエミルはほっとしてそう言い合い、オアシスの湖岸へとつるつる滑る氷の上を戻り始める。

背後ではリフィルがエミルにじっと目を凝らしていたが、彼はもちろんそれには気づかなかった。

遺跡に戻ると、デナイドはまだ眠っていた。

「私が奥から誘い出します」

テネブラエが全員に向かって言った。

「奴が背を向けて動き出したら隙間を駆け抜けてください」

「エミル、ジーニアス。転(ころ)ばないでね」

リフィルに名指されたエミルは、

「え!?」

と、驚いた。ジーニアスも、
「何でボクたちにそんなことというの⁉」
と、傷ついた表情になる。
「ふたりとも危なっかしいんですもの」
どうやらリフィルはふたりを同列に見ているらしかった。
「エミルは大丈夫だよね」
マルタがエミルだけをかばうと、ジーニアスは顔を真っ赤にした。
「……ボクだって大丈夫だよっ！」
テネブラエはそのやりとりを横目で窺っていたが、デナイドに視線を戻すと、スッと魔物の体を通り抜け、向こう側に出る。デナイドの横にはアーケロンが残された。
好物の魔物の気配を感じたのだろう、デナイドは体をびくっと震わせると目を覚まし、動き出した。
「よ……よしっ！　行こう！」
誤算が起きたのは、エミルたちが駆け出したときだった。魔物に食べられまいとしたアーケロンが、思いも寄らぬ速さで逃げ出そうとしたのだ。テネブラエが叫ぶ。
「アーケロン！　そちらに逃げてはいけません！」
が、間に合わない。
「きゃっ⁉」

ひとり通路のこちら側に取り残されていたマルタを、アーケロンが跳ね飛ばしてしまう。

「しまった！　アーケロン、そちらに行くなと言ったでしょう！」

テネブラエが再び叫んだ。

（マルタ……！）

「くそったれが！」

エミルがぎりりと歯噛みした。マルタをかばうようにデナイドの前に出る。その手にはすでに剣が握られていた。

「エミル……」

ようやく立ち上がったマルタに、

「早く逃げろ、このドジ！」

エミルは背を向けたまま怒鳴った。

「は……はい！」

マルタが逃げる足音を確認し、エミルは赤く燃える瞳でデナイドを見上げた。

「——やるのか、でくのぼう」

だがそのとき、リフィルの冷静な声が飛ぶ。

「もういいわ、エミル！　このまま奥へ行きましょう！」

「あ……はい！」

スッと元に戻ったエミルはあわてて仲間たちのところへ戻り、そのまま遺跡の奥まで走りこんだ。
「ふー。ここまで来れば大丈夫だよね」
額の汗を拭う仕草(しぐさ)をして、ジーニアスが息をつく。
「それにしてもまさか攻撃してくるとは思わなかったよ」
エミルは魔物が追いかけてこないかどうか、振り返ってみながら言った。
「そうですね。好戦的ではない種族とはいえ、獲物を目の前にしたら変わるということでしょう」
テネブラエが誰にともなく言う。マルタはもじもじしていたが、
「エミル、助けてくれてありがとう……」
と、うれしそうに頬を赤らめた。
「う……ううん。実は何がなんだかよくわかってなかったんだけど、マルタが無事でよかったよ」
そのとき、ジーニアスが口を開いた。
「……ねぇ、エミル。さっきのあれも戦闘中のラタトスクの憑依って奴なの?」
「え？　また変わってた?」
エミルは驚いて聞き返す。
「変わってたなんてもんじゃないよ。豹変！　ラタトスクの力って、なんかすごいんだ

ね」
「う……うん……」
（何がなんだかよくわかってなかった間、豹変してた……ってことか……）
釈然としない気持ちで、エミルは思った。と、テネブラエが遺跡の奥へ鼻先を向ける。
「イグニスの気配を感じます。やはりここにセンチュリオン・コアがあるようです。ロイドに奪われる前に奥へ行きませんか？」

「すごい。奥へ行くほど建物が凍りついちゃってるね」
白い息を吐きながら、マルタが言った。
「ここにあるイグニスのセンチュリオン・コアは氷の属性なの？」
ジーニアスは、ぶるっと身を震わせてテネブラエに訊ねた。
「いいえ、火です」
「こんなに凍りついてるのに、火なの⁉」
驚いた拍子に、ブーツの下で霜が音をたてた。

火の神殿であるこの場所が凍りついているとは、皮肉なことだった。
「暴走の結果がマイナスに作用しているのだと思います。センチュリオンの力が逆転現象を起こしているのでしょう」
「それでこの辺が冷えちゃってるんだね」
エミルはあらためてほとんど白一色になっている通路のあちこちを見回してみる。そのとき、リフィルがつぶやいた。
「……火……」
「どうしたの姉さん」
ジーニアスが顔をあげる。
「確か、マナの守護塔の地下には光のセンチュリオン・コアがあったのよね」
「はい。ロイドの奴が持ってっちゃいましたけど」
マルタの返事を聞き、リフィルは、
「テネブラエ。センチュリオンと精霊に関係はあるの？」
と、訊ねた。
「以前精霊がある組織によって人為的に囚われていた場所と、センチュリオン・コアのある場所が一致しているようだけど」
テネブラエはほんの少し考え、
「いえ、特には……」

と、答える。
「ただ、センチュリオン・コアのある場所はもともとマナに偏り（かたよ）がある場所なのです。センチュリオンたちは己の属性をもってマナの偏りをただします」
「ってことは、精霊がいた場所をたずねればロイドを追いかけなくてもセンチュリオン・コアが見つかるんじゃない？」
ジーニアスが利発そうな瞳を輝かせると、リフィルは微笑んだ。
「ええ、私もそう思うわ」
「ほんとですか!?　だとしたら、ロイドを出し抜けるかも」
マルタが言いかけるのを、リフィルがやんわり遮る。
「それはどうかしら。あの子も精霊のいた場所を知っているわ。あの子がこのことに気づいているとしたら、これでようやく五分五分といったところね」
「……ロイドなんかに負けてたまるか」
憎しみを隠そうともしないエミルに、ジーニアスは思わず顔をしかめた。
「ジーニアス」
弟の様子に気づいたリフィルが、
「あなたの気持ちはわかるけれど、ロイドの疑いを晴らすのはロイド自身にしかできないことよ」
と諭（さと）すと、彼はエミルをちらりと見、それから目を伏せる。

「……わかってる。わかってるけどさ。でも……やっぱり複雑だよ」
大好きな幼馴染への絶対的な信頼が、いま自分を苦しめている。早く真相が知りたい、とジーニアスは思った。

ようやくセンチュリオン・コアが安置されている祭壇のある部屋まで辿(たど)り着(つ)くと、リフィルが両手を広げて叫んだ。
「あれがイグニスのコアか……素晴らしい！　なんという魅惑の輝き！」
凍りついた神殿の中にあって、温かな色を放っているコアは、確かにエミルたちをほっとさせるものではあった。
「おぉ！　うおぅ！　素晴らしい！」
「またた……」
だが、マルタはうんざりした口調(くちょう)でため息をつく。
「またってことは、もう見てるんだね。姉さんの遺跡モード……姉さん、古代文明とか遺跡とかのマニアなんだ」
困り顔のジーニアスが言うと、リフィルがくるりと振り返る。
「マニアではない。研究者だ！」

「……はいはい。それで、遺跡とか見るとああなっちゃうんだよね」
「マルタ！　センチュリオンを孵化させる儀式を見たい。やってくれ！」
リフィルに指され、
「は、はい」
マルタはあわてて祭壇へ近づくと、コアを手に取る。コアはマルタの導きでふわりと浮かび上がると、神秘的な光に包まれて孵化した。
「これでイグニスが目覚めました」
テネブラエが静かに告げる。
「あの者が力を取り戻せば、ラタトスクの騎士であるエミルも新たな力に目覚めるでしょう」
そのとき、祭壇に向かって走りこんでくる足音が響いてきた。
ロイドだった。
彼はエミルたちに気づくと、
「……間に合わなかったか」
と、舌打ちする。
「やっぱり来たな……」
すぐにエミルが身構えるのを、
「待って、エミル！」

マルタが手で制した。そして、階段の上からまっすぐにロイドを見下す。
「ロイド・アーヴィング、答えて。あなたはどうしてセンチュリオン・コアを集めているの？」
「……」
ロイドは答えない。エミルが、
「僕らはマルタのためにも世界のためにもセンチュリオン・コアを集めてラタトスクを目覚めさせなきゃいけない」
と言っても、彼は何の感情も現そうとはしなかった。
「お願い。ルーメンのコアを返して」
焦れたマルタが叫んだ。
「……おまえたちこそイグニスのコアを渡せ」
ロイドが両手で剣を抜き、ゆっくりと構える。今度はエミルも我慢しなかった。
「マルタ！　力ずくでルーメンのコアを奪い取ろう。罪もないパルマコスタの人たちを殺して平然としてる奴に、話なんて通じないよ」
鞘を払うとロイドに突きつけた。一触即発の空気に、ジーニアスが思わず二、三歩前に出る。
「ロイド、違うよね！　ロイドはパルマコスタを襲ったりしてないよね！」
「………」

答えないだけでなく、ロイドはセイジ姉弟を目にしても眉ひとつ動かさないのだった。
「あちこちで噂になってること、ロイドがやったことじゃないよね？」
「…………」
「答えてよ、ロイド！」
「…………」
それまで黙っていたリフィルが静かに訊ねた。
「ロイド。私たちにも言えないことなの？　それとも……噂は真実だとでも言うの？」
すると、ようやくロイドは唇を動かした。
「答える必要はない。それより、センチュリオン・コアを渡せ。渡さないならこちらも力ずくで奪うまでだ」
「ロイド……どうして……」
ジーニアスの声は震えていた。
どこからか魔物の咆哮が聞こえてきたが、かまってなどいられなかった。エミルがラタトスクモードに変わる。
「みんなの仇だ！　死ね！」
さっと踵を返したロイドの背後へと駆け寄る。上段に構えた剣を振り下ろしたが、それはロイドの素早い剣ががっちりと受け止めてしまった。
「……まだまだ甘いな」

エミルはそのまま跳ね飛ばされ、冷たい床（ゆか）を転がった。ロイドは足早に去って行く。
「待って！　待ってよ、ロイド！」
たまらなくなって駆け出したジーニアスの前に、
「うわ!?」
地響きをたてて巨大な魔物が現れた。あのデナイドだった。太い幹から伸びた長い腕を振り上げ、ふたたび咆哮する。
「まずい！　怒りに我（われ）を忘れています！」
テネブラエが叫ぶ。
「ちっ、くるぞ！」
ロイドとの間に邪魔が入ったことに腹を立てながら、エミルは体を起こした。
デナイドの周りを、鳥に似た魔物――ジャブジャブが三体飛び回っている。彼らは大きな嘴（くちばし）から、しきりに火を吹きかけてくるのだった。
「ふん、雑魚（ざこ）からやっちまえ！」
エミルは魔神閃光断（まじんせんこうだん）で手近の一体を浮かして斬り捨てた。
「ボクにもやらせて！　アクアエッジ！」
ジーニアスの魔術が、水の塊（かたまり）を放つ。
「キィーッ！」
「キキィーッ！」

残る二体は鋭い鳴き声を上げながら、ウルフたちの待つ床に叩きつけられた。
そのとき、
ズウゥウゥウン――！
激しい震動がエミルたちの足元を揺らす。デナイドのマグマバーストだった。一面に広がる轟炎がマルタの足元を焼きそうになる。
「きゃっ!?」
彼女はキッと魔物を睨みつけると、
「飛燕流舞っ！」
力任せにスピナーを使った。が、長く伸びた魔物の腕に横から叩かれ、床に転がってしまう。リフィルがすかさずファーストエイドで回復させなかったら、まだ熱く燻っている炎にやられていただろう。
再びデナイドの体が炎を噴いた。ジーニアスは、
「荒れ狂う流れよ――スプラッシュ！」
と、魔物の上に滝のような水を落とす。
「お遊びは終わりだ――」
エミルはここぞとばかりにデナイドに斬りつけた。
「魔王獄炎波――っ!!」
思い切り剣を床に叩きつける。すさまじい衝撃が、魔物の体を揺さぶり、持ち上げる。

デナイドの断末魔の声が響き渡った――。

ようやくデナイドを倒してしまうと、まだ肩で息をしているマルタが言った。
「……あいつ、入り口からずっと私たちを追いかけてきたんだね」
「うん……。ロイドの奴、あいつの声を聞いて逃げ出したんだな。くそっ」
エミルは悔しさを隠せないでいた。
(あのとき僕、まだ戦えた。戦えたのに！)
冷静な眼差しで、リフィルはロイドが消えて行った暗がりを見つめる。
「無駄かもしれないけど、ロイドを追いかけましょう」
「うん……」
ジーニアスはうなだれたまま、それでも頷いてみせる。
(久しぶりにやっと会えたのに……ロイド……どうして……？　ひどいよ)
どうしてももう一度会って話がしたかった。彼はエミルたちについて走り出した。
だが、いくらも進まないうちに、ジーニアスは立ち止まる。
「姉さん、今の！」
「レアバードの音だわ」

リフィルも足を止めると、耳を澄ませた。
エミルはマルタと顔を見合わせ、遠ざかる音を聞いていたが、
「レアバードってロイドが持ってる空を飛ぶ乗り物ですよね」
と、訊ねる。
「ええ。あれは飛び立つ音よ。もう逃げられてしまったでしょうね。私たちもレアバードを返していなければ……」
と、残念そうにリフィルが答える。
「レアバードって、ロイドだけが持ってるものじゃないんですか？」
「ボクらも持ってたんだけど、世界再生の旅が終わってから、持ち主に返したんだ。ロイドはまた借りたみたいだけど……」
ジーニアスがマルタに説明した。マルタはそれを聞くと、やはりロイドの方が一枚上手なのかと落胆してしまう。
「相手が空を飛べるんじゃ、センチュリオン・コアの取り合いは完全にこっちが不利ですよね」
「でも、センチュリオン・コアのある場所が精霊のいた場所と気づいている割にはロイドの動きが鈍いわ」
リフィルが言った。
「多分あの子はこの情報を知らないのよ。その点ではあなたたちのほうが有利よ」

「……あんな奴に負けてたまるか」
と、エミルが拳を握りしめる。
「エミル、待ってよ。ロイドは本当にパルマコスタを襲うような奴じゃ……」
「それもあるけど……違うよ」
彼はジーニアスに目を向けた。
「え？」
「昔の仲間に何も言わないで、友だちを傷つけて……。ジーニアスやリフィルさん、それにコレットだって……。みんないい人だよ」
ロイドへの憎しみで満ちていたはずの瞳には、いつしか淋しそうな色が浮かんでいる。
「こんないい人たちに心配かけて……。僕からしたら、そんな仲間や友だちがいるってだけでうらやましいのに……」
「……ありがとう。ボクたちのこと気遣ってくれて」
ジーニアスはうれしそうに笑ってみせた。エミルが、まわりが見えなくなっているわけではないことに希望を感じたのだった。
（いつかきっと誤解も解けるよ。そうしたらエミルだってロイドを好きになってくれるかもしれない）
「それにしてもロイド……。私たちから目をそらすような子じゃなかったんだけど……」
リフィルは凍りついた遺跡の調度品に目をやりながらつぶやいた。

マルタはリフィルの様子をそっと窺う。
そして、彼女には大空でレアバードを駆るロイドが見えているのかもしれない、と思った。それはきっとかつての教え子、ロイド・アーヴィングの姿なのだろう。
(身近な人が変わってしまうのは……つらいよね……)
マルタはそっとため息を漏らした。

遺跡の出口から外へ出たエミルは、
「雪が、止んでる……」
と、驚いた。手のひらを上に向けてみても、ひとひらの雪も落ちてはこない。
「センチュリオン・コアって精霊並みにすごい力を持ってるんだね」
ジーニアスも空を見上げ、感心したように言う。
「これで少しずつこの辺りの自然も落ち着くかな」
マルタの言葉に、テネブラエは軽く頷いた。
「雪は収まるでしょう。ですが元通りになるには、ラタトスクさまが目覚めない限り、

無理だと思います」
マルタはちょっと考え、
「リフィルさん、聞いてもいいですか？」
と声をかけた。
「何かしら」
「以前、精霊がいた場所を教えて欲しいんです」
「センチュリオン・コアを探すのね」
はい、とマルタは答える。
「異常気象を止めて世界の滅びを防ぐには、センチュリオンたちを孵化させてラタトスクを目覚めさせるしかありません。もともとロイドを追いかけていたのも、コアを見つけるためでしたから」
「……ここから近いのは、セルシウスのいた洞窟ね。フラノールの近くよ」
リフィルはすぐに精霊のいた場所を告げ、
「残りの場所は……そうね、あとで印をつけた地図をあげるわ」
と言ってくれた。
エミルとマルタはまず最初にフラノールへ行くことにする。
「姉さん、ボクらはどうする？　ロイドのこと、このままにしておいていいの？」
ジーニアスは気遣わしげに聞いた。フラノールでコアは見つかるかもしれないが、そ

こにロイドがいるとは限らないからだ。
「……そうね。このままロイドのことを調べましょうか」
「うん。ボク、姉さんについていく」
ジーニアスはほっとして、頷いた。
「なら、港のあるイズールドまではエミルたちと一緒に行きましょう。その後のことは、ついてから考えればいいわ」
エミルたちはさっそくイズールドへ向けて出発することにした。

「隠れてください！　ヴァンガードです」
テネブラエが鋭く注意を促す。
エミルとマルタはあわてて建物の陰に身を隠した。
幸い、リフィルとジーニアスは買い物に行っていて、ここにはいない。
(サドの……アリスと、リヒターさん⁉)
そっと様子を窺ったエミルは、どきりとする。ふたりはエミルたちには気づかず近く

まで歩いてくると、足を止めた。
「神子の輝石はまだ手に入らないのか」
リヒターが訊ねる。
「ホーくんに探させてるけど、ゼロスの方はなかなか隙がないみたいなのよね」
アリスはいつも手にしている鞭をペチペチと鳴らし、
「コレットちゃんの方はもの凄く悪運強いらしくてやっぱり太刀打ちできないみたい」
と、肩をすくめた。
「……ちっ、役に立たない奴らだ」
いまいましそうに、リヒターは舌打ちした。
「ねぇ、神子の輝石なんて何に使うの？　あれって神子が天の機関クルシスから選ばれた証みたいなものなんでしょ」
「……説明してわかるとは思えないな」
ふーん、とアリスは薄く笑う。
「……とっても腹の立つ発言だけど、ま、いいわ。リヒターはいろんな意味で仲間だし」
「おまえはそれを呪っているんじゃないのか？」
リヒターが皮肉をこめて言うと、
「そんなことないわよ。私、使えるものはなんでも使う主義だから。——リヒターは呪ってそう。自分の方じゃなくて、人間の方を」

挑発するようにアリスが返した。
ムッとしたリヒターは、
「怒った♡　図星だ♡」
アリスにからかわれて大股に歩み去る。
「待ちなさいよ、リヒター！」
あわてたアリスもあとを追って行ってしまった。
エミルとマルタはあたりにヴァンガード兵の姿がないことを確かめてから、通りに出た。
「……コレット、襲われてるのかな」
エミルが心配そうに言うと、
「うん。でも今の話だと、うまく切り抜けられてるみたいだね」
マルタは服についた埃(ほこり)をポンポンと払いながら笑って見せた。
(でも、神子の輝石って……一体どういうことだろう)
髪飾りを直しているマルタの指先に目をやりながら、エミルは考えた。

イズールドへは、あと一晩の野宿で到着できそうな距離だった。
「少し休憩にしましょうか」
とうに日は暮れている。リフィルが提案すると、
「そうですね。そういえばおなか空いてきちゃった」
すぐにマルタが賛成した。
「じゃあボク、食事の準備するよ」
手際のいいジーニアスは、もう火を起こす準備を始めている。
「ジーニアス、私も手伝いましょうか」
「あ、私も……」
リフィルとマルタの申し出に、彼はふるふると首を振り、
「……ふたりに手伝われたら、食べられるものも食べられなくなっちゃうよ」
と、はっきりと断る。
「……あら、ジーニアス」
「それってどーゆー意味!?」
当然ふたりはジーニアスに詰め寄ったが、彼は怯まなかった。
「言わせないでよ。傷つけたくないからさ」
ここで承諾してしまうと、あとで苦しむことになる。ジーニアスは、思い出したよ

うにエミルの方に顔を向けた。
「あ、エミル。薪を拾ってきてよ」
「う、うん……」
幸い、薪を拾えそうな林がすぐ近くに見えた。エミルはうす黒い木立に向かって歩き出す。
(勇気あるよなー、ジーニアス。僕だったらとてもあのふたりを相手にあんなこと言えないよ……)
よく燃えそうな薪を選んで拾い歩くうち、いつしか彼は木立の向こう側へ出ていた。
「エミル……」
突然声をかけられ、振り向いたエミルは驚いた。薄闇の中、リヒターが立っていたからだ。
「リヒターさん！」
と、リヒターがハッとなった。
「エミル！　後ろだ！」
「え!?」
キィーッという聞き覚えのある鳴き声が耳元で聞こえた。ジャブジャブだ。旧トリエット跡でも遭遇したことがある。
とっさに剣を抜き、吐きかけてくる炎をよけながら斬り捨てる。

「弱すぎる……」
ふう、と息を吐き、リヒターに向き直ろうとしたそのとき、
「気を抜くな、馬鹿が！」
鋭い声にハッとなる。
「来るぞ！」
「!?」
薄闇に目を凝らすと、こちらに近づいてくるスキゾズの姿が見えた。薪を拾っていたエミルを先ほどから狙っていたのかもしれない。
「うおぉぉぉぉっ！　魔神閃光断(まじんせんこうだん)！」
普段とはまるで違うエミルの動きと力を、リヒターは黙って見つめていた。
「崩蹴脚(ほうしゅうきゃく)！」
「雷神烈光刹(らいじんれっこうさつ)！」
スキゾズ相手に次々技を繰り出し、善戦しているエミルを目(ま)の当(あ)たりにして、
(やはりラタトスクの……)
リヒターが唇を噛んだときだった。
スキゾズのチョークブレスがエミルを襲う。
「うわっ！　しまったっ！」
その瞬間、リヒターは詠唱(えいしょう)を始める。

「歪められし扉、今開かれん――ネガティブゲイト！」
魔物の足元に魔空間が生まれた。
「グゥォォォォ――ッ！」
苦しがるスキゾズの隙を、エミルは見逃さなかった。
魔王獄炎波で幾度も魔物の体を斬り刻みながら、
「うおおおっ！　あと一撃で――沈めぇぇっ‼」
強烈なとどめを刺す。
地響きをたててスキゾズが倒れるのと、エミルの瞳が緑色に戻ったのは、ほとんど同時だった。
「び、びっくりした……」
「……今のがラタトスクの力……とやらか」
まだ息の上がっているエミルを眼鏡の奥から見つめながら、リヒターが淡々と言った。
「あ……は、はい……」
そのとき、キーキーという小さな鳴き声が近づいてきた。エミルの腿あたりまでの大きさしかないが、たった今倒したばかりの魔物と同じ姿をしている。リヒターは素早く斧を振り上げかけた。
「さっきの奴の仔供か……」
「ま、待ってください！」

エミルはあわててリヒターを止め、スキゾズの仔をかばうように立ちふさがった。
「――なんだ」
「別に襲ってこないなら、殺さなくてもいいじゃないですか」
親子連れを刺激してしまったのは自分の方かもしれない、と彼は思う。
「……」
「お願いします！」
「……甘い奴め」
リヒターは斧と剣を収めた。ほっとしたエミルは、リヒターの背中に向かって必死で訴える。
「リヒターさん！　ラタトスクは魔王なんかじゃありません。マルタとテネブラエの話を聞いてください。そしたらきっと……」
「ラタトスクは……俺の敵だ」
背を向けたまま、リヒターは冷たく答える。
「そんな……！　ど、どうして……う……ぅ……」
突然、エミルは頭を抱えて苦しみだした。
「……な、何？　一体これは……」
頭の中に閃くイメージが、彼の体を貫いてゆく。いつか見たのと同じ、リヒターに殺される記憶だった。武器を手にしたリヒターが、恐ろしい形相で迫ってくる――。

「エミル!?」
様子がおかしいのに気づいて、リヒターが振り返った。
「どうした？」
「……わ……わからないんです。この間から、変な記憶が……頭の中に……」
頭を抱えて蹲ったまま、エミルはやっとそれだけ告げた。
「変な記憶だと？」
「リヒターさんがボクのこと殺そうとしたり……それから……うぅ……」
「もういい。喋るな……」
リヒターはしゃがみ込み、何事かじっと考えながら、エミルの背中をさすってやる。
「……う……少し……治まってきました」
その声にハッと手を離して立ち上がったリヒターは、
「……ふん。おまえは見るからにひ弱そうだからな。さっさとマルタのところに戻って休め」
と、再びエミルに背を向ける。
「今日のところはおまえたちを見逃してやる」
ようやく体を起こしたエミルは、不思議そうに訊ねた。
「リヒターさんは、どうして僕に優しくしてくれるんですか？」
「優しくした覚えはないな。俺の気が変わる前に早く行け」

「……は、はい……」
それと、とリヒターはつけ加えた。
「記憶のことは気にするな。そう――夢でも見たんだろう。殺される夢は縁起がいいらしいしな」
「リヒターさん……」
(僕の気が楽になるように、こんなこと言ってくれるんだ――)
エミルはうれしかった。だが、振り返ったリヒターの表情には、優しさのかけらも見えない。
「――さっさと行け！」
「は、はい！」
あわてて木立の方へ駆け戻るエミルは、リヒターの大きな手の温もりがまだ背中に残っているような気がしていた。

「遅かったね、エミル」
心配顔のマルタが、エミルを迎えてくれた。あたりにはいい匂いが漂っている。
「う……うん。ちょっと魔物に襲われて……」

何故だろう、リヒターに会ったことは言わない方がいい気がした。
「あら、怪我はなくて?」
リフィルが気遣う。
「は、はい。心配かけてごめんなさい」
「で、薪は?」
ジーニアスが「早く」と手を出した。手近で寄せ集めた薪は、今にも燃え尽きそうなのだ。
あ、とエミルが声をあげた。
「……ご、ごめんなさい……」
「もうっ。生煮え(なまに)になっちゃうよ!」
ジーニアスに怒られ、エミルは放り出した薪を拾い集めに、また走ることになった。

8

港町イズールドに入ると、木造の小さな漁師小屋が目についた。波の音は狭い路地にも響いてくる。
ジーニアスがふと足を止めた。
「あれ……何か匂わない？　ちょっと懐かしい匂いなんだけど……」
それを聞いて、エミルも大きく息を吸い込んでみる。
「……ホントだ。匂うね。魚でも焼いてるのかな」
「イズールドは漁業が盛んですものね」
アカフグもちは有名よ、とリフィルがにっこりした。
「……けど、それにしては焦げ臭くない？」
「ええ……。魚を焼くというより焦がしているというか……」
マルタとテネブラエが鼻をくんくんさせながら言い合っていると、ジーニアスがぱちんと手を打った。
「そうか！　姉さんの料理の匂いに似てるんだ！」

「ジーニアス！　どういう意味!?」
少年は、姉にキッと睨(にら)まれる。
「要するにリフィルさんの料理が下手(へた)だという意味では？」
「何ですって！」
正直に説明したテネブラエにも被害が及びそうになり、エミルはあわてて間に入った。
「そ、そんなことより匂いの元を探しましょう！」
あたりを見回すと、船着場の近くに立ち尽くす男の姿が目に入った。漁師なのだろう、がっちりした体躯(たいく)だ。
「あれは……」
エミルが首を傾げると、
「何かあったのかな。匂いの元は、あの箱みたいだけど……」
と、マルタが男の足元を指さした。そこにはほとんど燃え尽きてしまったらしい木箱の残骸(ざんがい)があった。リフィルは、
「ちょっとよろしくて？　何かあったのかしら」
と、訊ねる。男はエミルたち全員にちらりと視線を走らせ、
「そこに置いといたカマボコグミが燃やされちまったんだよ」
いまいましそうに言う。
「カマボコグミか！　それで魚の匂いがしたんだ！」

謎が解け、エミルはすっきりした顔で言った。
「――燃やされたと言ったわね。どういうことなのかしら」
放火だよ、と漁師の男は吐き捨てる。
「この村にタチの悪い放火魔がやってきてな。この間ようやく捕まえたんだが……」
「捕まえたなら犯人は別にいるんじゃないの？」
ジーニアスが言うと、
「いや。あいつ、きっと脱獄したんだ」
男はそう決め付けている。
「どうして同一犯だと思うんですか？」
マルタが訊ねた。
「奴が放火すると、火の手が上がるときに必ずまぶしい光が現れるんだ。このカマボコグミが燃やされたときもそうさ」
男は自分も確かに不思議な光を見たことを説明し、
「やっぱり急ごしらえの牢屋じゃ、あの大男は閉じ込めておけなかったんだ」
と、悔しそうに眉をしかめた。
「大変だわ！　船に乗る前に脱獄した放火魔とやらを捕まえましょう！」
さっさと町の中へ入って行こうとするリフィルに、
「それはいいけど……姉さんらしくないね」

ジーニアスが疑い深そうな目を向ける。
「いつもなら『私たちの旅の目的はセンチュリオン・コアのはずよ』って関わるのを諌めるくせに」
「……べ、別にいいじゃない。そんなに急がなくても……」
リフィルは何故か言い淀んだ。
「そうはいかないでしょ。僕たちはまだいいけど、エミルたちはロイドより先にセンチュリオン・コアを見つけなきゃいけないんだから。せめて港で船の出る時間を聞いてからのほうがいいんじゃない？」
「……港……」
次第に遠い目になってゆくリフィルに、
「あ、そうか。姉さん、かなづち……」
ジーニアスは言いかけたが、
「──わかりました！　港に行くわよ！」
と、遮られた。
(そうか。リフィルさん、泳げないから海が怖いんだ……)
頭のいい人にだって弱点はあるんだな、とエミルはなんとなくほっとする思いだった。
ところが、いざ港に行ってみると、船は出ないという。
「えっ、どうしてですか？」

船の整備をしていた船員にエミルが訊ねると、
「さっきそこでまた放火事件があっただろ。きっと例の放火魔が逃げ出したんだ。いま船を出したら、乗客に紛れて逃げられちまうかもしれないからな」
と、答えた。
「そんなぁ。先を急ぐ人はどうするの？」
それでもジーニアスが未練がましく船を見ていると、船員は目を細め、エミルたちを見渡した。
「……怪しいな。ボヤ騒ぎの後で急いで船に乗りたいなんて、まさかおまえたちが放火魔なんじゃゃ……」
そのとたん、エミルが赤い瞳をカッと見開いた。
「……なんだと？　もう一度言ってみろ、この節穴野郎！」
「な、なんだよ……。ち、違うって言うなら……」
「違うなら……なんだってんだ!?」
エミルは船員の首を思い切り締め上げる。強い力に、革のグローブが音を立てた。
「……ぐぅ……く……苦し……」
「エミル！　やめて！」
マルタが叫ぶ。同時にエミルは元に戻った。
「……あ……」

あわてて男の喉から手を離す。おかげで尻もちをついた船員は、苦しそうにげほげほと咳き込んでいる。ジーニアスは半ば呆(あき)れ、半ば怒ったように肩をすくめた。
「エミル！　どうしてこんなところでラタトスクモードになっちゃうのさ。いまのはよくないよ。謝らなきゃ」
「……あ、うん。そ、そうだよね。ごめんなさいっ！」
エミルは恐縮し、まだ喉をさすっている男に向かってぺこぺこと頭を下げた。
「……あ……ああ……」
その態度のあまりの変わりように、彼は文句を言う気にもなれないようだった。
リフィルは黙ってエミルを見つめていたが、エミルはそれに気づかない。
「……よ、よーし。気を取り直して放火犯を捜そうよ！　そしたらきっと船も出るよ」
と、マルタがその場の空気を変えようと明るい声をあげた。ジーニアスがすぐに同意する。
「そうだね。とりあえず牢屋に行って何か手がかりがないか、調べてみよう」
「……う、うん」
魔物と戦っているわけでもないのに、自分でもわからないうちにラタトスクモードに切り替わってしまう――。
〝僕……、どうなっちゃってるんだろう……〟
エミルは、漠然(ばくぜん)とした不安が胸に広がってゆくのを感じていた。

放火犯が収容されていたという牢屋は、崖をくり抜いて造られていた。

両脇には干物(ひもの)や海産物を売る店が並んでいる。頑丈な鉄格子さえなかったら、誰も牢屋とは思わないに違いない。

「あの、脱獄した放火魔のことお聞きしたいんですけど」

エミルは牢屋の前に立っている番人に歩み寄った。

「はぁ?　放火魔が脱獄した?」

番人はぽかんとし、それから牢屋の中を指さして見せた。

「バカ言うなよ。見てみろ、奥にいるから」

エミルが覗き込むと、薄暗がりの隅に確かに人影がある。

「あ、いる……」

「どうなってる訳?」

マルタが首をかしげると、ジーニアスが、

「放火魔がここにいるってことは、さっきのボヤは別の犯人の仕業(しわざ)ってことになるよね」

と、事もなげに言った。
「犯人と話をさせてもらえるかしら」
リフィルが頼むと、番人は、
「……気をつけろよ」
と、あっさり許可してくれた。

番人が放火犯を呼ぶ。重たい鎖の音をさせながら、うずくまっていた男が立ち上がる。
そして、ゆっくりと鉄格子のところまで歩いてきた。
その瞬間、リフィルとジーニアスが息を飲んだ。
「リーガル⁉」
驚きの声をあげるふたりに、放火犯の方も目を見張った。
「リフィル……ジーニアス……なぜここに？」
手錠をかけられ、鎖でつながれているのは、リーガル・ブライアンだった。
「それはこっちのセリフなんだけど」
ため息まじりにジーニアスが言う。
「……確かに。恥ずかしい姿を見られてしまった」

「リフィルさんたちのお知り合いなんですか？」
さっぱり訳のわからないエミルが訊ねると、
「ええ、世界再生の旅の仲間で、リーガル・ブライアンよ」
「レザレノ・カンパニーの会長だよ」
ふたりはそう説明した。次に驚いたのはマルタだった。
「レザレノって、あの大企業の!?　そんな人が放火魔だなんて……」
「ねえ、リーガル。どういうことなの？」
意外な展開にジーニアスが説明を求めたが、
「それが……私にも、よくわからないのだ」
当のリーガルは歯切れが悪い。
「この村へは仕事で来たのだが、偶然、ロイドを見かけたというグミ職人のベルクという男に会ってな。彼から話を聞いていたとき、突然謎の光に包まれて、私はそのまま気を失ってしまったのだ」
光、とジーニアスが呟いた。
「気がついたときには建物が燃えていて、ベルクも気絶していた。それで彼を連れて外に逃げたところ……」
「連続放火魔として捕まってしまった――という訳ね」
リフィルもため息まじりに頷いた。

「……その通りだ。しかし私はやっていない」
「そりゃ、リーガルがそんなことするとは思ってないよ」
　当たり前でしょ、とジーニアスが苦笑する。
「あの、さっきの火事のときにも覚えはないんですよね？」
「何、また火事が起きたのか！」
　マルタの問いに、リーガルは片眉を上げた。
「僕たち、その犯人を捜しているんです」
　リーガルは、犯人捜しをしているというエミルに好感を持ったようだった。
「放火はもっとも卑劣（ひれつ）な犯罪のひとつだ。ここから出ることさえできれば、私も共に真犯人を捜すのだが……」
　と、残念そうに言う。マルタが重ねて質問した。
「あなたが会ってたっていうベルクさんは、無実の証言とかしてくれなかったんですか？」
「それが、意識が戻らないらしい。火事で煙を吸い込んだのかもしれぬな」
　エミルはちょっと考えていたが、
「ねぇ、マルタ。そのベルクさんって、治癒術で何とかならないのかな？」
　と、訊ねる。
「うーん。実際に見てみないと何とも……」

「なら、今すぐ行こうよ。その人が目を覚ませば、リーガルさんもきっとここから出られるよ」
前向きなエミルに、リフィルは微笑んだ。
「そうね。そうしましょう」
「は、はい！」
エミルが再びリーガルに目を向けると、
「ベルクは自宅で療養中だと聞いている。すまないが、頼む」
と、目を伏せた。

ベルクというグミ職人の家はすぐに見つかった。ベルクは仕事着であるエプロン姿のままベッドに寝かされており、昏々（こんこん）と眠っているように見える。付き添いは、近所の若者がひとりきり。家族のいないベルクのために、友人たちが交替で看病に来ているのだという。
「リフィルさん、どうですか？」
エミルが訊ねると、ベルクの体を調べていたリフィルは、
「……この模様……まさか、ヒッカリカエルの毒じゃ……」

と、呟(つぶや)いた。エミルたちが覗き込むと、なるほど、露出している肌に特徴的な模様が浮かび上がっているのが見てとれた。

「……ヒッカリカエル……」

テネブラエはその名を繰り返し、

「ああ。人間はアレをそう呼んでいるのですね。おかしな名前をつけるものだ」

と、薄く笑う。

エミルたちがいっせいに顔を向けると、

「いえ。これはあなたたちがヒッカリカエルと呼んでいる魔物、ノストロビアの毒に冒されています」

と、説明する。

「ノストロビア？　ヒッカリカエル？」

マルタは首を傾げた。どちらも聞いたことのない名前だ。

「ノストロビアです。ヒッカリカエルなどという名前は、あなた方人間が勝手につけている名前ですよ」

真面目(まじめ)なテネブラエはそう前置きしてから、魔物について説明した。

「彼らは高エネルギーを体内に吸収すると発光発熱して、皮膚に触れた生物を昏睡状態(こんすいじょうたい)にします」

「発光して発熱する……！　じゃあもしかしたら、この辺りを荒らしてる放火魔って！」

「そっか！　ヒッカリカエルのせいかも！」
　エミルとマルタが顔を見合わせると、
「ノストロビアです」
　やや棘(とげ)のある口調(くちょう)で、テネブラエが再び訂正する。
「確か、ヒッカリカエルはフラノール地方にしか生息(せいそく)しない特殊な生物だよね」
「ノストロビアです！」
　今度はジーニアスに向かって、テネブラエが語気を強めた。
「ここにはフラノールとの定期便もあるわ。積荷に紛れて上陸した後、この異常気象で繁殖したのかもしれない」
「この人がヒッカリカエルの毒で眠ってるなら、解毒(げどく)すれば、目を覚ますってことだよね？」
　とうとうテネブラエはリフィルとジーニアスに向かって声を張った。
「ノ・ス・ト・ロ・ビ・ア！」
「残念だけど、ヒッカリカエルの毒は無理ね。毒というより、ウイルス感染(かんせん)のようなものだから」
　まったく動じないリフィルにテネブラエは、唇をひくつかせながら言う。
「……ローズマリーならばヒッカリカエルの毒を解毒できると思いますが……」
「……テネブラエ。諦(あきら)めたんだね」

ふっ、とエミルが微かに笑う。テネブラエは、
「……もうほっといて下さい」
ぷいと顔をそむけ、姿を消してしまった。
解毒剤（ローズマリー）の生（は）えている場所について、マルタには心当たりがなかった。
「ローズマリーはどこにあるんだろう」
「カンベルト洞窟一帯に自生していたそうよ。でも最近の異常気象で枯れてしまったと聞いているわ」
姉の言葉に、ジーニアスが焦れる。
「そんなぁ！　じゃあどうするの」
すると驚いたことに、リフィルが急に口調を変えたのだった。
「火事の原因はわかったのだから、村の人に説明をして船を出してもらいましょう」
「え!?　でもこの人は……。それにリーガルさんだってあのままには……」
エミルがあわてても、リフィルはただ冷たい口調で告げるだけだ。
「……残念だけれど、今はセンチュリオン・コアの入手を急ぐべきではなくて?」
「リフィルさん！　どうして急にそんなことを……」
マルタも、彼女がリーガルを見捨てて行くと言い出したことに驚いた。
(世界再生の旅の仲間だっていうのに、なんでこんなに冷たいの？)
「仕方ないわ。私たちにできることは終わったのよ」

「だけど……目の前の人が苦しんでるのをほっとくなんて……」
納得のいかないエミルを、リフィルは凝視する。
「なら、どうするの？　この間にもロイドはセンチュリオン・コアを奪っているかもしれない。彼がもしもセンチュリオン・コアを悪用しようとしていたら？」
「ね、姉さん……」
リフィルとエミルを交互に見比べながら、ジーニアスが呟く。そのとき、マルタが叫んだ。
「……あなたは！　ロイドはあなたの仲間で、教え子でしょう？」
「私は可能性の話をしているのよ」
リフィルは腕組みをし、エミルから視線をそらさない。
「僕は……豚じゃない……」
やがて、エミルの唇が動いた
「僕はこの人を助けたいんです！」
「だから、どうやって？　手段も力もないくせに、無責任なことを言わないで」
その瞬間、エミルがラタトスクモードに変わる。
「……探せばいいだろ！　カンベルト洞窟とやらに行って！　あんただって、ローズマリーが全部枯れたのを確認した訳じゃないんだろ！」
「でもセンチュリオン・コアはどうするの？」

食い下がるリフィルを、エミルはぐっと睨みつけた。
「くどい！　センチュリオン・コアを探してるのは俺たちだ！　あんたに言われる筋合いはない！」
「……わかったわ。なら、カンベルト洞窟へ行きましょう」
あっさりと、リフィルが考えを翻す。
「リ……フィルさん……？」
元に戻ったエミルは、拍子抜けしてしまった。
「ごめんなさいね。今の会話は気にしないで、さ、行きましょう」
リフィルはそのままベルクの家からさっさと出て行く。
「どうなってるの、リフィルさん……」
マルタが肩をすくめる。ジーニアスは姉が出て行った扉をじっと見つめながら、
「……姉さん、まるでわざとエミルを挑発したみたいだった……」
と、小さく言った。
「わざと……？　そんなことしてなんの意味があるんだろ……」
エミルは、挑発されたことに気づきもしなかったのだ。
「……うん……。変な姉さん……」
あとでちゃんと聞いてみよう、とジーニアスは思った。

カンベルト洞窟の内部は、思ったより明るかった。ところどころ日光の差す場所もあり、下草や苔でびっしりと地面は覆い尽くされている。

「この辺りには生えていないようね。奥へ行きましょう」

ローズマリーはやはり見つからなかった。

「リフィルさん、あの……」

そのとき、思い切ったようにエミルが話しかけた。ジーニアスには何の話かすぐピンときた。

「何かしら」

「姉さん、さっきわざとエミルを怒らせたでしょ。その話だよ」

真相を知りたくてうずうずしていたジーニアスが口をはさんだ。

「どうしてあんなことを……」

マルタもリフィルを振り返った。

「あら、少なくともさっさと旅を進めましょうというのは本音だったわよ」

「姉さん！」

「ふふ。エミル、あなたは嫌がるかもしれないけれど、さっきのあなた、ロイドと同じことを言っていたわ」

リフィルが笑うと、

「え？」

エミルはロイドの名が出たことに驚く。

「目の前の人間も助けられなくて、世界再生なんてやれるかよ……ってね」

「……ロイドが……」

(ロイドが、僕と同じことを……!?)

一体どういうことなのだろう。さらにリフィルに訊ねようとしたとき、

「さ、行きましょう」

彼女は洞窟の奥に向かって行ってしまった。

「……って、結局はぐらかされちゃった感じ？」

「そうだね……」

マルタとエミルは仕方なくあとについて歩き出した。

しばらく行くと、水の流れる音が聞こえてきた。

「さ……さむ……」

ジーニアスがブルッと身震いする。

「ホントだ……、水が流れてるからかな……。ひ、冷えるね……」

エミルも、急激に気温が下がったように感じる。
マルタはわざわざ水流をのぞきに行き、
「でも凍ってないね。水の温度はそこまで低くないのかな」
と、振り返る。
「そのようね」
リフィルが頷いたとき、テネブラエが現れ、揶揄するように言った。
「しかし暑いだの寒いだの、人間は不便ですねぇ」
「デリケートなの！　テネブラエみたいに鈍感じゃないんだから！」
マルタに鈍感と言われ、彼は腹を立てる。
「し、失敬な！　私にも感覚くらいあります！」
「どんな感覚？」
エミルが真顔で聞いた。
「暗いとか、より暗いとか、もっと暗いとか……」
プッ、とジーニアスが吹き出した。
「……闇のセンチュリオンだからってそりゃないよ」
笑い声をあげていると、少し体が温かくなったようだった。ジーニアスは、以前もそうだったなと思い出す。ロイドといたときはしょっちゅうバカな話をして笑っていたものだ。

(姉さんの真意はわからないけど……とにかくいまは頑張って目の前のことをやろう。そうすれば少しでも早くまたロイドに会えるもんね……)
ジーニアスはあちらこちらで緑の葉をつけているハーブを、再び丁寧(ていねい)に調べ始めた。

「ハーブはたくさんあるみたいだけど、ローズマリーはなさそうだね……」
もうどれくらい歩いているだろう。エミルは、疲れてため息をつく。細長い葉が特徴だとリフィルに教えられたが、これだけ探してもそれらしい草は生えていない。
「元気出して、エミル！　もっと奥に行けば、きっとあるよ」
マルタが握りしめた両の拳を振って励ました。すると、疲れきったエミルの唇に微笑みが浮かぶ。
「……うん。ごめん、弱気になって。最後まで諦めちゃダメだよね」
「エミル……」
マルタはその表情にほんの少しの間、見とれてしまう。
「何？」
「う、ううん。なんかエミル、少しずつ変わってきたね」
マルタはあらためてエミルの顔を覗き込む。

「そうかな？」
「うん。うまく言えないけど……いい感じだと思うよ」
「あ、ありがとう」
照れるエミルとマルタを横目で見ながら、
「……あーあ。ごちそうさま」
ジーニアスが両手を広げて見せると、
「そ、そんなんじゃないよっ！　ね、エミル！」
マルタがあわてて抗議した。
「……あはは……」
〝そんなんじゃないって言い切られちゃうのも淋しいな。自分が悪いんだけど……〟
エミルはただ笑ってみせるしかなかった。

やがて、彼らは洞窟をすっかり歩ききってしまった。
「ここで行き止まりみたいだね……」
洞窟のいちばん奥の丘に突き当たり、マルタが残念そうに言う。丘の向こうには水場があるだけだ。ここまでは日光も届かないために、あたりは薄暗い。

「それらしい草なんてないよ……」
ジーニアスは植物の一本一本に目を凝らしながら、首を振った。
「この辺りにもないとなると絶望的ね」
リフィルのため息を聞き、エミルはがっくりと肩を落とした。
「……僕、みんなに無駄なことをさせちゃったのかな」
「考古学ではね、エミル。仮説に基づいて調査をし、何度も何度も間違えては少しずつ真実に近づいて行くの。ようやく見つけた答えですら真実でないことだってあるわ」
「リフィルさん……」
エミルは顔を上げ、リフィルを見た。
「あなたは自分で言ったのよ。確かめてもいないことを断定するなって。それは正しいわ。どんな小さなきっかけでも、可能性がある限り追求しなさい」
彼女はエミルを責めるどころか、認めて励ましているのだった。マルタも言った。
「リフィルさんの言う通りだよ。それに、今回見つからなかったとしても私はエミルの意見に賛成して来てるんだから、無駄じゃないの。わかった？」
「あ、ありがとう……」
（間違っても大丈夫……ってことかな）
エミルはうれしかった。最近ではもう頻繁（ひんぱん）に思い出すことはないが、間違っていなくても叔父と叔母に怒られていたあのルインのひどい生活に比べれば、なんと素晴らしい

ことだろう。

「お礼なんていいから、もうちょっと探してみよう！」

マルタが元気にピョンと飛び上がり、腕を振り上げる。

「うん。もう少し、粘ってみる」

ふたりの様子を見ていたジーニアスも笑顔になった。

「うん。あきらめが悪いのって、ボクも嫌いじゃない。とにかく片っ端から調べてみようよ」

エミルたちは改めてローズマリーを探し始めた。

どれくらい集中していただろう。エミルはふと、体を起こした。屈めっきりだった腰が痛い、と思ったときだった。なだらかな丘の上に生えている、一本のハーブが目に入った。シダとキノコの間にある、すんなりした立ち姿、細長く尖った葉——。

「……あ、あれ！　あれは違うかな？」

「……あれは！」

エミルの指さす先に目をやったリフィルが、思わず声をあげる。

「ローズマリーです。間違いありません」

テネブラエもハーブを確認したが、残念そうに続けた。

「しかし、少し枯れかかっていますね……。このままでは少し解毒効果が弱いかもしれません」

確かにローズマリーの葉は黄色っぽく変色してしまっている。
「ここは日光も当たらないし、植物にとっては厳しい環境ね」
リフィルが腕組みをした。
「日光か……」
エミルはソーサラーリングで光を当ててみることを思いついた。
ローズマリーに狙いを定める。放った光がローズマリーに届いたと思われた、そのとき。
(やった！　命中したぞ！)
しかし、前方に目を凝らしていたマルタが、戸惑いながら告げる。
「……エミル。なんかローズマリーじゃないものが大きくなってない？」
ローズマリーの傍らで、キノコのカサのようなものがむくむくと蠢(うごめ)いている。
「う、うん……。ど、どうしよう……」
それは次第に大きさを増しながら、丘の向こう側から姿を現した。
「いけません！　あれはジョンドウ！　魔物です！」
テネブラエが叫んだ。同時に、巨大キノコの魔物が丘の上からどーんと飛び降りてくる。周囲にいたらしい、やはりキノコに似た小さな魔物たちも一緒だった。
ローズマリーにばかり気をとられていたら、危ないところだったろう。エミルたちは手分けして、ジョンドウたちを倒した。

「……びっくりした」
ジーニアスはまだドキドキしているらしい。胸に手を当てている弟を見て、リフィルが言った。
「ローズマリーに与える栄養がジョンドウにも行ってしまったのね……」
そのとき、マルタが叫んだ。
「あ、でもローズマリーが元気になってる！　すごいよ、エミル！」
エミルたちはハッと丘の上に目をやった。枯れかかっていたローズマリーはいま、瑞々(みずみず)しい緑の葉をつけ、輝いて見えた。
「ええ、完璧です」
テネブラエも感激の声をあげる。
「これで、あの人もリーガルさんも助けられるんだ……」
淡い色の小さな花さえ咲かせているローズマリーを手にして、エミルは胸が震えるようだった。
「やったね、エミル。粘り勝ちだよ」
「あきらめが悪くてよかったね、エミル」
ジーニアスとマルタが駆け寄ってくる。
「ほ、ほめられてる気がしないんだけど……」
マルタの言葉に困ってみせるエミルの周りに、明るい笑い声が響いた。

ローズマリーの絞り汁を、慎重にベルクの唇に垂らしてやる。すると、男の肌に浮き出ていたあの模様がみるみる消えて行った。
「う、ううっ……」
ベルクは小さく呻くと、目を開いた。
「やったね、エミル！」
マルタは、ローズマリーを手にしているエミルに笑いかけた。
起き上がったベルクは、
「……あ、あんたたちは……？」
不思議そうにエミルたちを見回している。事情を説明すると、
「……そんなことになってたのか、いやぁ……とにかく助けてくれてありがとう」
と、彼はしみじみ礼を言った。
「あの、リーガルさんを助けてあげたいんですけど……」
「もちろんだ。よし、ひとっ走り牢番のトコへ行ってくるよ！」

マルタの言葉に、ベルクは家を出ていこうとする。あわててエミルが呼び止めた。
「あ、ちょっ、ちょっと待って下さい！　あの、犯人はやっぱりあのヒッカリ……」
「犯人は光って熱くなる変なカエルだ。あいつが俺の自信作カマボコグミを食い散らかしやがってな。そしたら突然光り出して、周りの木箱にボッと火がついたって訳よ。ま、詳しい話はあとでしてやるよ」
「あっ……」
エミルが再び声をあげたときには、もうベルクの姿はなかった。
「まあいいんじゃない？　元気になったみたいだし」
マルタが肩をすくめる。
「そ、そうだね……」
元気すぎるみたいだけど、とエミルは思った。

ベルクの後を追って牢屋へ行ってみると、果たしてリーガルはすでに釈放されていた。
ベルクが事情を説明したらしい。
「……世話をかけたな。すまぬ」
囚人服姿のリーガルは、手錠をかけられたままでエミルたちに一礼する。

（この人、昔の仲間を信頼して待ってたんだな……）
きっとロイドのことも信じてるんだろうな、とエミルは思う。
牢の番人は、
「疑って悪かったよ。いま手錠を……」
と、鍵を服の隠しから取り出そうとする。
「……って、アレ？」
「どうしたんですか？」
エミルが訊ねる。
「鍵がないぞ？　どっかで落としたのかな⁉」
「ちょっと！　冗談は顔だけにしてよね」
マルタが言うと
「……どういう意味だ」
男はムッとした。
「ロイドがいれば、鍵なんて簡単に開けてくれるのに……」
ジーニアスが手先の器用なロイドを思い出して悔しがっていると、
「――器物破損で再逮捕されないといいのだが」
リーガルは手首を交差させ、ほんの少し力を加える。すると、手錠はあっさり壊れて外れてしまった。

「このメーカーの手錠はあまり丈夫ではないようだ」
彼は番人に向かって言う。
「次は、我がレザレノグループ製のものを使ってみてくれぬか？　サンプルを送らせよう」
「は、はい……！」
番人は気圧されて何度も頷いた。
「すまないが着替えたい。先に宿へ戻ってかまわないか」
「その方がいいわね。私もまたあなたの囚人服姿を見るとは思わなかったから」
皮肉ではなくリフィルが言うと、リーガルも頷いた。
「……まったく、情けないものだ。皆には改めて礼をしなければならぬな。とにかく、感謝している」
リーガルが足早に宿へ戻って行くと、ベルクがやって来た。エミルたちは先ほどの話を詳しくしてもらうことにした。
「俺とリーガルさんが話をしてると、いきなり目の前に光の塊が現れたんだ」
リーガルを待つ宿の前で、ベルクは話し始めた。

「それがヒッカリカエルだったんですか？」
エミルが訊ねる。
「ああ、光るカエルだった。とにかくすっげえまぶしくてさ、リーガルさんはすぐに気を失っちまった。オレはサングラスをしてたからなんとか大丈夫だったんだけど……」
「……現れたときから光っていた？　そんなバカな」
と、リフィルが信じられないという表情になる。
「嘘はついてないぞ。で、カエルがカマボコグミを食い始めて、突然周りが火を噴いたんだ。消そうと思ってカエルを手で払ったら、その瞬間に気分が悪くなっちまって……」
嫌な記憶が甦ったのだろう、ベルクは顔をしかめた。
「殴ったときにヒッカリカエルの毒に触れちゃったわけか」
なるほどね、とマルタが頷くと、
「あ、あれって触っただけで毒にやられちまうのか。これからは気をつけないとな」
彼は神妙な面持ちになってもう一度エミルたちに礼を言うと、家に戻って行った。
やがて、着替えを済ませたリーガルが宿から出てきた。
「一時はどうなることかと思ったが本当に助かった。ありがとう」
公爵然とした格好の彼は改めて礼を言い、それから、
「しかしまさかこんなところでおまえたちと再会するとは思わなかった。やはりロイドを追ってきたのか？」

と、リフィルとジーニアスに訊ねた。
「ロイドの行方を知ってるんですか？」
エミルが急きこんで訊ねると、
「キミは一体……」
リーガルはエミルとリフィルを交互に見た。
「そうね。色々面倒なことになっているの。簡単に事情を説明しておきましょうか。テネブちゃん、あなたも出てきて」
「テネブラエ、です」
訂正しながら現れたセンチュリオンに、
「！」
リーガルは一瞬目を瞠る。が、すぐに話を聞かせてくれるようリフィルに促した。

「……信じられぬ。あのロイドが我らに隠し事をするとは」
ひと通りの事情を聞いたリーガルは唸るように言い、
「それにラタトスクにセンチュリオン・コア……か。精霊や天使といい、我らはそういうものに浅からぬ縁があるのかもしれぬな」
と、ため息をついた。

今度はマルタに訊ねられて、リーガルは、
「ベルクから聞いた話では、フラノールに向かったらしい。それもごく最近のことだそうだ」
と教えてくれた。
「ホント!? 姉さん、僕らも急いでフラノールに……」
「……そうね。まだ追いつけるならもう一度話をしてみるのもいいかもしれないわ」
ジーニアスとリフィルのやりとりを聞いていたリーガルは、
「……少しいいだろうか」
と、礼儀正しく話に加わった。
「私もロイドのことは気になっている。皆の旅に、私も加えてはもらえぬか？」
「そりゃボクと姉さんはかまわないけど……」
「エミルとマルタは？」
リフィルがふたりに顔を向ける。
「私もかまいません」
「……えっと、僕ら頼りないですけど、それでもよければ。テネブラエも、いいよね」
最後にエミルがテネブラエに確認した。
「私はマルタさまとエミルに従います」

テネブラエが恭しい動作で返答すると、リーガルはやっとほっとした表情になる。
「ありがとう。我が片翼の名にかけて裏切らぬと誓おう」

港に戻るまで、エミルは口をきかなかった。ときおり何か話したそうに顔をあげるが、結局またうつむいてしまう。
船着場では、船員が大きな声で出航を知らせていた。
「フラノール行き、まもなく出るよ！」
そのときになってようやくマルタがエミルに訊ねた。
「……エミル、どうしたの？　さっきから暗い顔してるけど」
「……う……うん……あの……」
船に乗り込もうとしていた仲間たちも戻って来た。
「もうすぐ船が出ちゃうよ」
ジーニアスは気が気でない様子だ。
「だから……その……」
「男なら、はっきり言う！」
とうとうマルタが焦れた。エミルはびくっとして、みんなの注目のなか、顔をあげた。

「う、うん……。……僕、火事のことが気になるんです。ロイドを捜してる間にも、きっとまた、ヒッカリカエルが出ますよね？　……ってことは、火事も続くってことですよね？」

「……ええ、確かにその通りよ」

リフィルは頷き、

「でもね、ヒッカリカエルはよほどのことがないと、火を出すほどの熱を発したりしないのよ」

と、説明する。

「この村ではボヤ騒ぎが続いてます。よほどのことが起きてるんですよね」

エミルが食い下がると、宙に浮かんでいたテネブラエはほんの少し首をひねった。

「センチュリオン・コアの暴走による影響ではないでしょうか。ヒッカリカエルは光属性の魔物です。光のセンチュリオン・コアは――」

「そうか。ルーメンのコアはロイドが持ってるんだ」

マルタがハッとする。

「その通りです。ですから、事態の収束にはロイドを見つけ、ルーメンのコアを孵化させるしかありません」

「ならば急いでロイドを追いかけねばならぬな」

リーガルが出航間近の船の様子を気にしたが、エミルは頑なに首を振った。

「でも、このまま何もせずに行くのは心配なんです――リフィルさんも言ってくれましたよね。可能性がある限り追求しなさいって」
「つまり、ヒッカリカエルの発熱を抑える手段を探したいというのね」
ようやくエミルの言わんとしている全てを理解したリフィルは、
「村の人には事情は説明してあるから、しばらくはこのままでも大丈夫だと思うけれど……」
と、顎に指をあてて考え込む。
「ふむ。では、こうしよう」
すばやく状況を整理したリーガルが提案する。
「リフィルとジーニアスは出発してくれ。先行してロイドのことを調べてもらいたい。その代わり、ヒッカリカエルの件は私たちが責任を持って処理する」
「……そうね。それがいいかもしれないわ」
リフィルは納得したようだった。むろんエミルたちにも異存はない。
「フラノール行き、出るよ！」
船に乗り込んだ船員が声を張る。
「それじゃあ、エミル、マルタ、それにテネブちゃん。くれぐれも気をつけてね」
「……できれば、次にお会いするときはテネブラエとお呼びください」
テネブラエは未練（みれん）がましくリフィルに頼み込んだ。

エミルは自分の意見を尊重してもらったことに喜びを感じながら、
「リフィルさん、ありがとうございました。ジーニアス、またね！」
と、軽く手を振る。
「うん、まかせといて。それじゃあ！」
ジーニアスも手を振り返した。そして背を向けたとたん、
「あ、そうだわ」
振り返ったリフィルにぶつかりそうになる。
「リーガル、これをあなたに渡しておくわね」
彼女は白い封筒をリーガルに手渡した。
「これは？」
「ふふ、そうね。ラブレターみたいなものかしら」
微笑むリフィルに、
「ね、ね、ねねねねね姉さん……!?」
ジーニアスがのけぞる。
「すごい♡　積極的……♡　私も見習わなきゃ」
マルタも大興奮してエミルにちらちらと視線を走らせた。が、当のリフィルは少しも恥ずかしがりはしない。
「後でひとりで見てちょうだい。他の誰にも見せては駄目よ」

「……あなたのように美しい方から、このようなものをいただけるとは思わなかった。確かにお預かりしよう」
ふたりがそっと頷き合うのを見て、ジーニアスは本格的に混乱してしまったようだった。
「う……うそ……。リーガルが……リーガルがボクのお義兄さんに……？　そんな……」
彼はリフィルに襟首を掴まれると、そのまま船まで引きずられていった。

フラノール行きの船が出てしまうと、リーガルはエミルたちを振り返った。
「とりあえずこの村で放火事件が起きた場所を全てまわってみよう」
「は、はい！」
エミルを従えて堂々と歩いてゆくリーガルの後姿に、マルタは我知らずため息をつく。
(ラブレターをもらったのに、あの落ち着きよう……。大人だなぁ。私もいつかエミルに……告白……)
「きゃっ」
彼女は自分の想像に赤くなり、あわててふたりの後を追いかけ出した。
リーガルが調べたところでは、これまでに放火された場所は四か所だという。最初に

行ってみたのは、水辺に建つ民家だった。
「ホウカマカエルのせいで、ここに隠してあったお宝が燃えちゃったよ！　オヤツのカマボコグミ……全部食べずに残しておいたのに」
家の中から出てきた男の子は、植木鉢の隣を指さして頬を膨らませた。
次は海産物を扱う店の主人だった。
「ここに置いてあった商品が全部燃やされたんだよね。まったく大損こいたよ」
男は当時のことを訊ねるエミルたちに、怒りが甦ったらしい。燃やされた箱が置いてあったあたりをバンバン叩いてみせた。
「何が入ってたんですか？」
「色々だよ、色々。ボトルとかグミとか……、カマボコグミも入荷してたんだけどなあ」
と、悔しそうに言った。
三番目は、小型船の若い船員だった。
「船に積もうとした荷物が燃やされたんですよ」
魚の入った木箱が重ねておいてある船着場で、彼はそう説明した。
「中身は？」
「アップルにオレンジにカマボコ。各種グミです」
エミルにそう答え、船員は渋い顔になる。
「まあ、保険金が下りるからいいんですが、レザレノ保険はケチなんですよねえ……」

その瞬間、リーガルの顔色が変わった。
「……こ、これはすまぬ。社の者に伝えておこう」
「え？　そちらレザレノ保険の方？」
船員はギョッとし、今度はいきなりレザレノを誉めだした。
「い、いやぁ、いい保険会社さんですよレザレノさんは！　一〇八歳まで入れる保険！　あれなんてもう最高！」
そんな保険があるんだ、とエミルはマルタと顔を見合わせる。
そして最後の被害者が、カマボコグミとそのレシピを燃やされたベルクだった。

「これで全部の現場を見たことになるな」
リーガルたちはひと気のない海岸に出て、考えをまとめてみることにした。
「しかし、どこもヒッカリカエルが出現するような場所ではありません」
テネブラエが困った声で言う。
「何か共通点とかないのかな」
マルタが首をひねった。エミルは四人の話をもう一度思い出してみていたが、
「グミ……グミだ！」

と、叫んだ。
「グミ？」
マルタとリーガルが同時に聞き返す。エミルは大きく頷いた。
「すべての現場に共通してあったもの。それはカマボコグミです！」
「そんなバカな！　ヒッカリカエルがグミ好きだなんて聞いたことがありません！」
すぐにテネブラエが否定したが、マルタは、
「だけど確かにカマボコグミのあった場所でボヤ騒ぎが起きてるよ」
と言い返す。
「私はセンチュリオンです！　魔物のことは熟知しています！」
「それはそうかもだけど……」
なおも不服顔のテネブラエに、エミルがラタトスクモードに変化した。
「いい加減にしろ！　テネブラエ！　てめぇは闇のセンチュリオンだろ！　光属性のヒッカリカエルの何がわかるってんだ！」
さすがのテネブラエもたじたじとなりながら、それでもまだ自説を捨てることができない。
「で、ですが……」
「うるせぇっ！　じゃあ試してみようじゃねぇか。行くぞ！」
「い、行くって、どこへ？」

マルタがあわてて聞く。
「決まってんだろ。ベルクの奴からカマボコグミを取り上げるんだよ。そいつでカエルをおびき寄せるんだ」
さっさと町へ戻り始めるエミルのあとを、マルタとテネブラエが追う。ひとり砂浜に残ったリーガルは、
「……これがリフィルの言っていたラタトスクモードか。ふむ、しばらく様子を見させてもらおう」
と、つぶやいた。

自分の家で寛（くつろ）いでいたベルクは、すごい勢いで部屋に入って来たエミルの話を聞いて驚いた。
「何？　カマボコグミがヒッカリカエルを呼ぶ？　そんなバカな……」
「うるせぇっ！　実験してみりゃわかるだろうが！　さっさとカマボコグミをよこせ」
あまりに横暴な態度に、ベルクは鼻白んだ。
「な、なんだよ。おまえ、人が変わったみたいに……」
「すまない。彼は今少し気が立っているのだ」

さりげなくリーガルが間に入った。
「ま、まあいいけどよ。ただカマボコグミの在庫は全部燃えちまったよ」
「なら作ってください！」
マルタが頼み込む。
「だったら材料を持ってきてくれよ」
「材料？　何を使うのだ？」
リーガルが訊ねた。
「ジェリーフィッシュがないんだよ。トリエットで釣ってこないと」
ベルクは言い、
「いっとくが、俺はとりに行かないぞ。しばらく休むつもりだったんだから」
と、付け加えた。
「……だそうだ。どうする？」
リーガルが聞くと同時に、エミルが返事をする。
「もちろん取りに行きます！」
その瞳が緑色に戻っているのに、リーガルは気づいた。
「なら、こいつを持っていきな。ジェリーフィッシュは、このエサにしか反応しないんだ」
ベルクはエミルたちにジェリーフィッシュ用のエサを持たせてくれた。

トリエットのオアシスまで来ると、
「釣りか……久しぶりだな」
リーガルがしみじみと言う。
僕はついこの間、魔物を釣ったけどね、とエミルは思った。
「リーガルさん、釣りをするんですか？」
マルタが訊ねる。
「ああ。時々クルーザーでカジキマグロを釣りにいく」
「さすがレザレノの会長！　すご～い！」
感激のあまり氷の上で飛び上がるマルタを、エミルはちらりと見る。
「……マルタはリーガルさんみたいにお金持ちの人がいいの？」
「何が？」
きょとんとするマルタに、エミルはもう口を開かない。するとテネブラエが、
「さあ、エミル。くだらない嫉妬心(しっとしん)はともかく、さっさとジェリーフィッシュを釣りま

しょう」
と、促した。
「ち、違うよ！　そんなんじゃ……」
「……え？」
マルタが首を傾げる。
「生まれて初めてちやほやしてくれた女性が、他の男性をほめるのが悔しい気持ちはお察ししますが……」
「ち、違うよっ！　そ、そんなんじゃなくてっ！」
エミルはテネブラエを手で押さえる仕草をし、
「エミル……もしかして私のこと……」
今度は頬を染めているマルタに向かってぶんぶんと首を振る。
「ち、違うよ！　そんなこと言ってないよ！　それより、頼むよテネブラエ！」
「はいはい。わかりました」
くっくっと笑いながら、テネブラエは釣竿に変身した。
エミルが釣り糸を垂らすと、ほどなく専用エサのおかげで強い引きがくる。エミルはタイミングを見計らい、ジェリーフィッシュを釣り上げた。
「見事だ、エミル」
「あ、ありがとうございます」

氷の上にぐにゃりと置かれたジェリーフィッシュは、かなりの大物だった。エミルがリーガルと一緒にベルクの家まで持ち運びやすいように獲物を網に入れていると、
「……ね、ねぇ、エミル。さっきのことだけど……」
マルタが話しかけてきた。
「な、何でもないよ！　ホント、何でもないから！」
エミルはどきりとして、思い切りひらひらと手を振ってしまう。
「……そこまで否定されると傷つくんだけど」
「……う……ご、ごめん……」
（なんでこうなっちゃうんだろうな……）
悲しげなマルタを見ながら、エミルは自分もなんだか悲しくなってしまうのだった。

「おう、あんたたち。ジェリーフィッシュはとれたかい？」
ベルクの家には、何人かの弟子たちが来ており、火を熾（おこ）しているところだった。
「はい、これですよね」
「ん？　機嫌は直ったみたいだな」
エミルが差し出したジェリーフィッシュを受け取りながら、ベルクはそう言って笑う。

「え？」

「いや、おまえさん、この前はえらく乱暴だったから……」

「あ……す、すみません……」

エミルは頭を掻きかき、恐縮してみせた。

やはり記憶がないのか、とそれを目にしたリーガルは思う。

「いや、気にしちゃいないさ。それよりカマボコグミだろ。すぐ作ってやるよ」

ベルクは言い、火が入った竈(かまど)をエミルたちに示した。

「しかし、ここで火の手が上がると危険だ。出来上がり次第、港に持ってきてくれないか」

リーガルが頼むと、

「わかった。じゃあ、あんたたちは先に行っててくれ」

と、ベルクはエミルたちを送り出す。

「それにしても本当にカマボコグミなんかでカエルの奴が出てくるのかねぇ……」

まだ半信半疑なのだろう。ベルクは網の中のジェリーフィッシュを見つめながらつぶやいた。

波の音を聞きながら、エミルは油断なく船着場を見回した。
魔物の姿はない。もちろんあったら困るのだが、彼の懸念は、ヒッカリカエルがカマボコグミに反応しなかったらどうしようということだった。
(僕のせいでみんなを巻き込んじゃったし……)
が、いつまでも考えている時間はなかった。
荷車のゴロゴロという音が響いてくる。
「できたぜ、カマボコグミ！」
車を引いているのは、ベルクだった。
荷車には、表面に食紅を使ったカマボコグミが山盛りに積まれている。紅白の色合いが美しい。
「ほう、これは美味そうだ」
湯気をたてているできたてのグミに、リーガルも思わず頰を緩めたほどだった。
「さあ、見せてもらおうか。カマボコグミがヒッカリカエルを呼んでるって証拠を」
自慢のグミを叩き、ベルクが言う。
「あれは……！」
光の塊が現れたのは、彼が荷車から離れた直後のことだった。
「……光を直接見ないで下さい！　気絶しちゃいますから！」
エミルが叫ぶ。ほどなく光は消え、あとには巨大なカエルの魔物、ノストロピアが現

れた。ノストロビアは荷車のグミをばくばく食べている。
「で、出た!?」
ベルクが魔物との再会に、腰を抜かさんばかりに驚く。
すでに火の手が上がり、香ばしい匂いがあたりに漂い始めていた。
「ず、ずいぶん大きいね」
「なんか異常発達してるのかも……」
あっけにとられるエミルとマルタを、ノストロビアの飛び出した目がいつの間にか睨みつけている。ベルクは悲鳴をあげながら、桟橋を町の方へ逃げ出した。
「詮索は後だ。来るぞ！」
リーガルが叫びざま、襲ってきたノストロビアに回転蹴りを食らわせる。魔物はバランスを崩しかけたが、前脚をついて体勢を立て直してしまう。
「うわわっ、こいつ、腕がビヨ～ンって伸びるよ！」
マルタが気持ち悪そうな顔で、スピナーを構える。
「烈風燕波（れっぷうえんは）っ！」
マルタが放った気が、魔物を後ろへ吹き飛ばす。
「よーし、こっちだ！」
背後に回っていたエミルは、
「魔神閃光断（まじんせんこうだん）！」



剣を斜め上に払い、魔物を宙に浮かせてしまう。しかし身軽な魔物はそのままくるりと回転すると、エミルの衝撃波をよけながら後ろへジャンプした。
「くそっ！」
目の前に着地したノストロビアに、今度は砕覇双撃衝(さいはそうげきしょう)の突きを繰り出し、間髪をいれずに幾度も斬りつけると、
「ケロロォォ……ン」
断末魔の声をあげ、ようやく魔物は動かなくなる。最後はシュルシュルと小さくなって、消滅した。
おそるおそる戻って来たベルクが、焦(こ)げている荷車を目の当たりにして、
「お、お、驚いたなー。本当にカマボコグミが原因だったとは」
はあっ、と大きな息をついた。
「いや、もしかしたらグミそのものに惹(ひ)かれている可能性もある。できることなら、しばらくの間この村でグミを取り扱うのはやめた方がいいだろう」
リーガルが冷静に助言すると、
「そうだな。村のみんなと検討してみるよ」
ベルクは素直に頷いた。
「それにしてもいろいろと迷惑をかけちまったな。とにかくありがとうよ」
彼は半焼した荷車を、「これ、直せるかなぁ」とぶつぶつ言いながら、なんとか引っ

ぱって町へ戻って行った。

「すみません、エミル。あなたが正しかったようです」
姿を現したテネブラエが詫びた。
「ノストロ……いえ、ヒッカリカエルがカマボコグミに惹かれているとは……」
「ううん。僕こそ酷い言い方しちゃって、ごめん」
「エミル……」
大人の態度のエミルに、テネブラエは少なからず感激した様子だった。
「これでヒッカリカエルの火災は収まりそうだ。そろそろ我らもフラノールへ向かってはどうだろうか」
リーガルが、フラノール行きの船着場に目をやる。幸い、停泊している船は出航の準備をしているようだった。
ロイドはもちろんのこと、先に行ったリフィルたちも気になる。
エミルたちは急いでフラノールへ移動することにした。

9

フラノール行きの船に揺られながら、エミルは薄暗い空と海をぼんやり眺めていた。
(今ごろジーニアス、どうしてるかな……)
手を振りあって別れてから、たいして時間がたったわけではない。それでもフラノールに着いたらなるべく早く会いたいと思う。会えばきっと楽しい話もできるだろう。
(友達、だから……?)
エミルは自分もずいぶん変わったものだと、あらためて驚かずにはいられなかった。
友達だよ、と言葉に出して確認しなくても、以前のように不安にならないのだ。
(これも、リヒターさんのおかげかな。勇気は夢を叶える魔法——)
今の自分を見て、リヒターはなんと言ってくれるだろうか、とエミルは考えた。

フラノールの港につくと、冷えた空気がエミルたちを迎えた。リーガルによると、そ

れでも以前より寒くなくなったらしい。
が、街には、エミルたちの心が凍りつくような事態が待っていた。
「これは……！」
リーガルが絶句する。
街の入り口をくぐるなり、立ち昇る黒煙が見えた。火の手があがっていないところでも民家や街灯が破壊され、瓦礫と化している。さらに、街の人々が変わり果てた姿でそこかしこに転がっているのだった。
「だ、大丈夫ですか！」
エミルは、すぐ近くで微かな呻き声をあげている男に駆け寄り、抱き起こした。
「……ロイド……が……」
「……ロイドだと!?」
リーガルが眉をぴくりと動かした。
「ロイドに……ロイド・アーヴィングにやられたんですか!?」
エミルは男の耳元で訊ねる。
「……そう……だ……。ロイ……ドが……街を襲って……」
男の言葉はそこで途切れた。
「しっかり！　しっかりして！」
エミルが男を呼び続ける。脈を調べたリーガルはしかし、

「……亡くなったようだ」
と、首を振った。
「……ひ、ひどい……」
口元を押さえるマルタの目に、涙が滲んでいる。
「しかし……何が起きたというのだ……」
リーガルは呆然と呟いた。

エミルたちは、街の様子を見て歩くことにした。想像以上の惨状に、リーガルが足を止めたのは街はずれだった。
「本当にロイドが……こんなことを……？　信じられぬ」
「だけど現に街の人も言ってたじゃないですか！　ロイドの仕業だって！」
この期に及んでロイドをかばうリーガルに、エミルはつい声を荒らげてしまう。
「……それはそうなのだが……」
煮え切らないもの言いに、エミルの瞳が赤く変わる。
「いい加減にしろ！　あいつはパルマコスタでもルインでも同じ事をしたんだぞ！」
そのとき、焼け残った建物の横から人影が歩み出た。ロイドだった。彼はすぐエミル

たちに気づいたが、リーガルが目を上げたのは一瞬後だった。ロイドは構わずその場から立ち去ろうとする。
「待て、ロイド！」
その声にエミルとマルタが驚いて振り返り、「あっ」と声をあげた。
「教えてくれ、ロイド。本当におまえがこの惨事を引き起こしたのか？」
立ち止まったロイドは、だが答えない。
「私には信じられぬ。おまえはこのような残虐（ざんぎゃく）な行為をいちばん憎んでいたのではなかったか！　答えてくれ、ロイド……！」
「——先を急ぐ」
ロイドは短く言うと、そのまま足早に歩き出した。
「てめえっ！」
ラタトスクモードのエミルが背後から襲いかかる。が、振り下ろした剣はまたしてもロイドのそれにがっちりと止められてしまう。
「……腕を上げたな」
「な、何……！」
からかわれているのかと、エミルはカッとなる。
「……ますますのんびりできなくなったよ」
ロイドは言い、いきなりその場からジャンプすると、通りの向こう側の建物の陰へと

消えた。
「待ちやがれ！」
あわてて追いかけようとしたエミルの耳に、聞き覚えのあるレアバードの飛び立つ音が流れ込んでくる。
「……なるほど。あれが今のロイド、か」
リーガルが静かに言った。
「そうです。あいつはいつだってあんな風……！　どうしてこんなひどいことを続けられるの！」
マルタは怒りのこもった瞳で、めちゃくちゃになった街を見渡す。
「……リーガルさんよ、あんたはこれからどうする？」
挑むような口調で、エミルがリーガルを見上げた。
「俺たちはあいつを討つ。それでも一緒にくるかい？」
「私の記憶が正しければ、キミたちの目的はセンチュリオン・コアを手に入れることではなかったか？」
リーガルはあくまで冷静だった。
「同じことだろ」
「違うな。少なくとも優先するべきなのはセンチュリオン・コアだろう」
でも、とマルタが口を開いた。

「戦うことになったとき、リーガルさんはロイドと戦えるんですか」
「――時にそれが必要であれば」
リーガルは、慎重に言葉を選んでいるようだった。ふっとエミルが元に戻る。リーガルは続けた。
「確かにあれは、私の知っているロイドではない。彼を変えた原因を知りたい。そして救ってやりたい。かつてロイドが私を救ってくれたようにな」
彼は顔をあげ、エミルとマルタを等分に見た。
「ふたりとも、不快かも知れぬがしばし共に旅を続けさせてくれ」
「……僕は……リーガルさんを信頼しています。あなたは僕みたいな子供もひとりの人間として扱ってくれる。そんな人、今までほとんどいなかったから……」
「私も不快なんてことないです。これからもよろしくお願いします」
エミルとマルタの言葉に、
「……ありがとう」
リーガルは礼儀正しく感謝の気持ちを表した。
「ではこの後はどうしますか？　ロイドを追いますか？」
テネブラエが訊ねる。マルタは「ううん」と首を振った。
「リーガルさんも言ってたけど、優先することはそれじゃなくてセンチュリオン・コアだよ」

「うん……。確かこの辺だとセルシウスのいたところにセンチュリオン・コアがあるんだよね」
エミルが言うと、リーガルは軽く頷いてみせた。
「ふむ。それなら私が案内できよう。しかしその前に、この街の人々を助けたいと思うのだが……」
それを聞いたとたん、ふたりの顔がパッと輝いた。
「はい！　僕もそれを言おうと思ってました」
「私も！　ふふ、なんかエミルに影響されてきちゃった。困ってる人たちは、助けないとね」
エミルとマルタは顔を見合わせ、うれしそうに笑う。
「では、しばらく別行動をとろう。その方が効率がいい。落ち着いたら、再びここで落ち合おう」
「はい！　エミルは教会をお願いね！」
私はこっち、とマルタは反対方向へ駆け出した。

教会の礼拝堂は、幸い無事に残っていた。きっと怪我人（けがにん）や火事で焼け出された人たち

が集まっているのだろうと想像しながら、エミルは扉を開ける。とたんに鼻を突く強烈な臭いにくらっとなった。
（……うわ……何だろう、この臭い……）
予想に反して、礼拝堂にひと気はなかった。ただひとり、若い男がこちらに背を向けてひざまずき、祈っているだけだ。ロイドの襲撃で不幸な目に遭った人かもしれない、とエミルは思う。
「……ちゃんが、オレを振り返ってくれますように」
（あ……臭いの元、この人だ……）
エミルは気持ちが悪くなってくるのを必死に抑えながら、そっと男に近づいた。
「でもって、オレのことを好きだっていってくれて、手とか握ってくれて、チューとかしてくれたりして、もうあなたなしでは生きていけないから結婚してください、デクスくん大好きとか何とか言ってくれちゃったりしますように」
「……」
なんなんだこの人、とエミルは呆れてしまう。
やがて祈り終わったデクスという若者は立ち上がり、くるりと振り向いたところでエミルに気がついた。
「ん？　なんだ少年よ」
「え……い、いえ……」

紫色の髪を持った若者には、エミルの言葉など聞こえないらしい。やけに時間のかかるオーバーアクションでエミルを指さすと、
「ま、まさか！」
と、芝居がかった声で驚いてみせる。
「な、なんですか……」
今度は反対の手でエミルを指し、
「おまえもオレが好きになったのか⁉」
と、ポーズを決める。
「はあ⁉」
エミルがただあっけにとられていると、彼は額に手を当てて俯いた。
「そうか……。通信販売で買った魅惑の香水『メロメロコウ』は男女問わず効果があるんだな！」
「いえ……あの僕……」
「うん。少年よ、きみの気持ちはよく分かった。しかしオレには心に決めた人がいるのだ」
くねくねくねくね、若者は身を捩ってエミルに訴える。
「だがせっかくこうして出会ったんだ。オレのかぐわしき香り『メロメロコウ』をきみにも分けてあげよう」

彼はエミルの手に香水の小瓶を押し付けると、
「じゃ、またな！」
カッコをつけながら礼拝堂を出て行った。
「な……なんだったんだろう。いまの人……」
エミルが呆然としていると、バンと扉が開いた。フラノールの住人らしい中年の男だった。煤だらけになった服には、ところどころ血まで滲んでいる。
「おい、そこの若いの！　手が空いているなら怪我人の搬送を手伝ってくれ！」
緊迫した街の空気がエミルを再び包む。
「は、はい！」
夢から醒めた気分で、彼は走り出した。

エミルたち三人がそれぞれ街の人たちを助け、ようやく再会したときには、火事はすっかり収まっていた。怪我をした人々も適切な治療を受け、快方に向かっているという。
「街も落ち着いてきたようだな」
あたりを見回すリーガルは、驚いたことに囚人服姿だった。上に着ていた服は、寒さを訴える怪我人に惜しげもなく与えてしまったらしい。

「そうですね。良かった……って言っていいのかわからないですけど……」
マルタは少し疲れの残る表情で、目を伏せた。
「ところでリフィルたちに会わなかったか？」
リーガルがエミルに訊ねる。
「いえ……」
「そうか……」
「心配ですね。先行してここに来ているはずなのに」
エミルも、リフィルとジーニアスのことは気になっていたのだった。少なくとも怪我人の中にふたりの姿はなかった。
「巻き込まれてないといいけど……」
表情を曇らせるマルタを、テネブラエはちらりと見上げたが、
「心配しても始まりません。そろそろセンチュリオン・コアを取りに行きませんか」
と、先を急ぎたそうにする。
「テネブラエって案外冷たいね」
エミルに言われると、
「……心外です……」
三人が街のために働いている間ずっと待たされていたテネブラエは、ムッとして呟いた。

次に目指すセンチュリオン・コアは、かつてセルシウスがいた氷の神殿にあると思われた。神殿へは、リーガルが道案内を引き受けてくれた。
「驚いたな……。フラノールの街もずいぶん暖かかったが、ここも氷が溶けている……」
すでに神殿前の地面の大半を緑の草が覆いつくしている様子に、リーガルは驚きを隠せない様子だった。
「本当はもっと寒いところなんですか？」
「うむ……。この辺りも一面雪と氷に覆われていた」
彼がエミルに答えた、そのときだった。
「……驚いたわ。これはセルシウスの涙……かしら」
先の方で、誰かの声が聞こえた。マルタがハッとする。
「あの声、リフィルさんじゃない!?」
エミルたちが声のする方を見やると、巨大な氷の前に立っているリフィルとジーニアスが目に入った。
「みんな！」
エミルたちに気づいたジーニアスが歓声を上げる。

「無事だったか！」
駆け寄るリーガルに、リフィルは怪訝そうに訊ねた。
「無事……？　何かあったの？」
「大変なんです、実は……！」
マルタは、リフィルたちが街にいなかったことに内心ほっとしながらも、目の当たりにした惨状について説明した。
「……そんな……フラノールが……！」
話を聞き終わったジーニアスは、顔を強張らせた。が、リフィルは首を傾げている。
「……おかしいわね。フラノールは別に反マーテル教の街ではないわ」
「姉さん、そういう問題？」
「ええ、そういう問題よ。何故、ロイドはフラノールを襲ったの？」
その場にいる全員への問いかけだった。
「それは……とにかく人を殺したかったから……」
エミルが答える。が、すぐにリーガルに否定された。
「いや、それは合理的ではないな。前におまえたちはロイドと戦ったが殺されなかった」
「……そうか……。今まで襲われたのは反マーテル教だったり、その疑いがあるってことだったっけ……」
マルタは考え込んでしまう。確かにロイドがフラノールを襲った理由は見つからない。

「……そういえば、ふたりは何故ここに来たのだ？」
思い出したようにリーガルが訊ねると、
「あ、そうだった」
と、ジーニアスが急に慌て出した。
「こっちも大変なんだ！　実はセンチュリオン・コアを見に来たんだけど……」
「まさか、ロイドに取られてたんですか？」
エミルが急きこんで訊ねると、ジーニアスは「ううん」と首を振る。
「ロイドじゃなくて、フラノールのアクセサリー屋さんが持ってっちゃったんだ」
「ええっ!?」
思いがけない言葉に、マルタが驚いた。
「ちょうど私たちがここに来たときにアクセサリー屋の主人と会ったの。彼はセンチュリオン・コアを持っていたわ。返して欲しいと言ったんだけど、そんな貴重な品なら転売できるから駄目だって……」
リフィルはそのときのことを思い出したのだろう、ため息をつく。
「……まずいですね。危険です」
テネブラエの口調は真剣だった。エミルはコレットがセンチュリオン・コアを触ったときのことを思い出した。
「そうだ。確か普通の人がコアを持ってると心が壊れちゃうって……」

「ええ。性質が凶暴かつ残忍になります。大抵は、破壊衝動に突き動かされて暴れたりするようです」
ふむ、とリーガルは頷いた。
「それが本当なら、ロイドのフラノール襲撃に説明がつくのではないか」
「ロイドがセンチュリオン・コアの影響で暴走している……？」
リフィルはその可能性について考えを巡らせているようだった。
(もしリーガルさんの言うとおりだったら……、あのときのコレットの心配が当たってしまったってことになるよな……)
それが本当のことならコレットはどれだけ悲しむだろう、とエミルは胸が痛くなる。
そして、ロイドの心配をしているのは彼女だけではないのだった。
「大変だよ！　ロイドを追いかけなきゃ！　ロイドは、レアバードでどっちに行ったの？」
ジーニアスが必死の表情で訊ねてくる。
「……えっと、確か北の方だよ」
エミルがレアバードの音が消えて行った方角を思い出しながら伝えると、
「ここからさらに北……。ならメルトキオ方面かしら……」
リフィルが呟いた。
そのとき、冷静に状況を整理したリーガルが言った。

「ロイドの追跡はふたりに任せよう。私はエミルたちとセンチュリオン・コアを追う」
「いいんですか？」
マルタが聞くと、
「共に行かせてくれと頼んだのは私だからな」
と、リーガルは微かに微笑んだ。
「じゃありフィルさんたちとはここでお別れですね……」
エミルは、少しばかり淋しさを感じている自分に気づいた。もしかしたら〝仲間〟に対する感情とはこういうものなのかもしれない、と漠然と思う。
「そっちはセンチュリオン・コアを、ボクらはロイドを追いかける」
「状況的には再会する可能性が高いわね。その時まで、お互い無事で」
ジーニアスとリフィルに、
「はい！」
エミルは大きな声で応えた。
「それじゃあ、私たちはこれで……」
足早に神殿から出て行こうとするリフィルを、
「そうだ、リフィル。手紙の件だが……」
と、リーガルが呼び止めた。
「しかと了解した」

ジーニアスの目が丸くなる。
「それって……おつきあいするってこと……？」
リフィルは答えず、「……お願いね」とリーガルを意味ありげに見た。
「さ、ジーニアス、行くわよ」
「そ、そんなぁ……」
再び襟首を掴まれ、引きずられていくジーニアスを、エミルはただ見守るしかなかった。が、マルタはまたひどく興奮していた。
「なんか、大人の恋愛ですね！　ドキドキしちゃう！」
「い、いや……」
リーガルは曖昧な返事をし、
「それよりも街でアクセサリー屋を探そう。行くぞ」
と、表情を引き締め、大股にその場から歩み去った。
「えへへへへ、リーガルさん照れてる！」
マルタは笑い、
「エーミル♡」
と、エミルの顔を覗き込む。
「私もエミルとなら『しかと了解』しちゃうけど？」
「……」

エミルの沈黙に、マルタはハッとする。
「……ってそうだ。こういうのダメなんだった。ご、ごめんね、エミル」
「……う、ううん」
あわてて首を振りながら、エミルは無理に笑ってみせた。
(……なんだろう、この違和感……。リーガルさんとリフィルさん、ラブレターとかおつきあいとか、そんな感じじゃない気がするんだけど……でも……よくわからないや)

フラノールの街のアクセサリー屋は、すぐに見つかった。以前訪ねたことがあるというリーガルが場所を覚えていたからだ。
三人が店に入って行くと、眼鏡(めがね)をかけた老人がひとりで店番をしていた。
「……ん？　何か用かの」
ふだんから女性客が多いのだろう、老人はマルタに向かって訊ねた。
「すみません。こちらのご主人が、不思議な宝石を持って帰ったと聞いてきたんですが……」
老人はほんの少し宙を睨んで考えていたが、
「ああ……あれなら買い手がつかなかったとかで、せがれが元あった場所へ戻しに行っ

たよ」
　と、教えてくれた。
「あ～、入れ違いになっちゃったんだ」
「すぐ追いかけよう！」
　がっかりしたエミルとマルタが店を出て行こうとすると、リーガルがおもむろに老人に声をかけた。
「……失礼。以前の店主の方は？」
「……はて？　何か勘違いをなさっていませんかの」
　老人はもうずっとここで商売をしていると言う。
「そうですか……」
「リーガルさん、行きましょう」
　マルタに急かされ、
「……ああ、そうだな」
　リーガルは釈然としない表情のまま、店をあとにした。

氷の神殿まで戻り、リフィルとジーニアスに再会したあたりまで歩くと、
「先ほどリフィルがセルシウスの涙がどうとか言っていたな」
と、リーガルが思い出して言った。
「セルシウスの涙って、聞いたことあります。確か、珍しい氷の花じゃなかったでしたっけ」
マルタが言うと、
「そうだ。周囲のものを凍らせる力がある」
と、リーガルは目の前にある氷の塊に目をやった。
「まさか……これがそうなんですか？」
とても花などという可愛い代物ではない。どう見ても巨大な氷の樹木だ。エミルは思わず太い根に見える部分に手を伸ばし、
「痛っ！」
と、声をあげる。すぐに引っ込めたにもかかわらず、氷に触れた指には鋭い痛みが残っていた。
「大丈夫か!?」
リーガルが気遣った。
「は、はい……」

「ダメだよ、エミル。セルシウスの涙は、冷たくて素手で触ると凍傷になっちゃうんだって」
マルタが軽く唇を尖らせる。
「そ、そんなぁ！　先に言ってよ！」
エミルはあわてて指をもう一方の手でごしごしと擦った。
「でも……セルシウスの涙って、両手でも包めるくらいの大きさだと聞いてましたけど……」
マルタが不思議そうに言う。
「どう見ても両手じゃつかめないよ……」
無理無理、とエミルは苦笑した。
「センチュリオン・コアの暴走で環境変化が起きたために、異常発達したのではないでしょうか」
テネブラエは言い、
「ところで……ここにはグラキエスのコアがあるはずですよね」
と、確認する。
「アクセサリー屋さんが戻してくれてればね」
と、マルタが言った。
「……私の感覚が狂ってきたのでしょうか。何故かソルムのコアがあるような……」

「ソルムって、地のセンチュリオンでしょ？　おかしくない？　ここ、氷の神殿だよ」
「……そうですね。気のせいかもしれません」
テネブラエはマルタに向かって頷き、それからまた首を捻った。

神殿の内部に足を踏み入れたとたん、冷気が三人の体を包み込んだ。
「中にはまだ氷が残ってますね……」
エミルは、荒涼とした光景に身震いする。マルタも思わず身を縮め、
「ホントだ。ちょっと寒い……。以前はここにセルシウスがいたんですよね」
と、リーガルに言った。
「いた……というより、囚われていたという方が正しいのかもしれぬな」
「そうなんですか。でもどうして……」
エミルの声が白い息に変わる。
「……この世界をふたつに分けるためだったらしい。今ではもう関係なくなってしまったが」

「……そうですよね……。ふたつに……分けられていたんですよ……ね……」

（……え……あれ……？）

エミルの内に何かが浮かび、するりと逃げてゆく。その感覚に彼は何ともいえない気分の悪さを覚えた。

「どうしたのエミル？　なんか苦しそうだよ」

「……う、ううん。何でもない。何か思い出した気がしたんだけど……」

あわてて背筋をぴんと伸ばしてみせるエミルに、

「思い出した？　センチュリオン・コア関係のことだろうか」

リーガルが興味深そうに訊ねた。が、エミルはもう何も覚えてはいなかった。

「……何だったんだろう。でも重要なことならきっとまた思い出しますよ」

自分に言い聞かせるように頷くエミルを、テネブラエが背後からじっと見つめていた。

「こんなところにもセルシウスの涙が伸びてる」

特徴のある氷の塊を神殿の最奥部に見つけたマルタが、リーガルたちに示した。

ここまで来る間には、かなり頻繁にセルシウスの涙が見られた。それは通路を横断していたり、壁に添って蔓のように伸びていたり、ときには凍った滝のように天井からぶ

ら下がったりしていた。
「これは……氷の神殿全体を包んでいるのかもしれぬな」
リーガルが腕組みをして言った。
「リーガルさんは以前もここに来ているんですよね。ロイドと……」
「ロイドか……」
リーガルは白い息をほうっと吐くと、
「一体、何故ロイドは我らに何も言ってくれないのだろうな。やはりセンチュリオン・コアの暴走に心を狂わされているのか……」
と、セルシウスの涙をじっと見つめる。こんなにも仲間の心を傷つけているロイドに、エミルはだんだん腹が立ってきた。
「僕がロイドだったら、こんなに自分を心配してくれる人たちを傷つけたりしないのに……。こんなに信頼してくれる仲間がいるのに、ロイドはひどいよ……」
悔しそうに両の拳を握りしめるエミルを気遣いながら、マルタはそっと祭壇に近づいた。エミルもハッと顔を上げると、大切な目的を思い出したように、マルタの後に続く。
「あれ？　グラキエスのコアがない……」
祭壇の上に戻され、浮かんでいるはずのコアが見当たらない。
「おかしいな……。アクセサリー屋さん、まだ来てないのかな」
どこかで追い越しちゃったかな、とマルタが首を傾げたときだった。

ドーンという衝撃があたりに走った。
「皆さん！　気をつけてください！　何かが来ます！」
テネブラエが叫ぶ。同時に現れたのは雪男に似た巨大な魔物だった。毛皮がキラキラしているのは氷をまとっているためだろう。
「な、何！　あいつ！」
血走（ちばし）った目で睨まれて、マルタは思わず後ずさる。
「ホーンティングです！　外の環境変化についていけずにここへ逃げ込んだのでしょう。異様に気が立っている！」
エミルとリーガルがホーンティングに対峙（たいじ）しようとした瞬間、背後にもう一体、別のホーンティングが現れた。二体とも牙を剝（む）き、だらだらと涎（よだれ）を垂らしている。
「くっ、挟まれたかっ！」
リーガルが唇を嚙み、拳を構えて魔物との距離を測る。
「恐らく誤って祭壇の間に閉じ込められたのでしょう。飢餓状態です！」
テネブラエの言葉に、エミルは足がすくんだ。
「うわぁっ！　き、来たっ⁉」
(は、腹ペコの魔物なんて、怖すぎるよ……！)
だがその瞬間、エミルはラタトスクモードに変化した。
テネブラエが召喚（しょうかん）した魔物たちが、後から現れたホーンティングに飛びかかってゆく。

エミルは初めの一体に集中することにした。鞘（さや）を払った剣の前に、リーガルが飛び出す。
「臥龍撃（がりょうげき）！」
回転蹴りを食らったホーンティングは、二、三歩よろける。が、
「砕覇双撃衝（さいはそうげきしょう）っ！」
と近づいて来たエミルを、これ幸いと太い腕で跳ね上げる。
「しまったっ！」
続いて頭突きをされそうになるが、マルタのヒールでなんとか体勢を立て直した。
「烈風燕波（れっぷうえんは）っ！」
「気をつけろ！　食（く）う気満々だぜ！」
エミルは叫ぶ。マルタの放つ気を受けてもなお、充血した目をギラギラ光らせながら、ホーンティングは突進してくる。
リーガルがもう一体に向かってジャンプしたのが目の端に映った。
（ちっ、あっちも片づけねぇとな！　ぐずぐずしてるヒマはない！）
「マルタ！　ここはいいからおまえは向こうに回れ！」
「わかったっ！」
マルタがリーガルの援護に走る。
エミルはホーンティングに向き直ると、床を蹴った。
「魔王獄炎波（まおうごくえんは）っ！」

氷の毛皮を斬り刻み、衝撃波を叩き込むと、魔物はエミルを睨みつけながら倒れる。
「はっ。もう腹減ったなんて感じなくてすむんだ。よかったじゃねぇか!?」
エミルはそう言い放つと、リーガルとマルタが対峙している二体目のホーンティングに鋭い目を向けた——。

二体のホーンティングが消滅してしまうと、
「……た、食べられちゃうかと思った」
「う、うん……」
マルタと、いつもの彼に戻ったエミルは顔を見合わせて安堵のため息をつく。
「だけど、なんか可哀想だったね。きっと、好きでここに閉じこめられた訳じゃないんだろうに……」
エミルは、空腹で辛かっただろう魔物たちを想った。その横顔に視線を当ててたリーガルが言う。
「エミルは不思議だな。敵を必要以上に怖がる割にはすぐに同情する」

エミルは、
「……なんか……嫌なんです。戦いとかそういうの。めめしいなって思うけど……」
なんとか自分の気持ちをうまくリーガルに伝えようとしたが、反応したのは頬を染めたマルタの方だった。
「……ううん、そんなことないよ。エミルのそういうところ、私……」
「……」
束の間の沈黙のあと、リーガルが話題を変えた。
「……ところで、気になっていたことがあるのだが。我々は騙されたのではないだろうか？」
「ど、どういうことですか」
エミルは驚いて顔を上げた。
「私は世界再生の旅でフラノールのアクセサリー屋の方に世話になったことがある。しかし店で会ったご老人は私の知るアクセサリー屋のご老人ではなかった」
「あの人が偽者……？　それじゃあ、グラキエスのコアは……」
一体どうなってしまったんだろう、とエミルは戸惑う。
「リフィルたちが目撃している以上、アクセサリー屋の人間がグラキエスのコアを持ち出したのは間違いないだろう。だが、ここに戻しに来たというのは……」
リフィルさんが会ったのは本物のアクセサリー屋だったんだね、とマルタは言い、

「でも、そんな嘘ついて、何の意味があるの？」
と、首を傾げた。テネブラエがハッとする。
「もしや、マルタさまのラタトスク・コアを狙っているのでは……」
「なら、すぐにでもここから逃げた方がいいよ」
エミルはもう怖々とあたりを見回し始めている。
「う、うん」
前髪の上からしっかりと額のコアを押さえ、マルタが頷くと、
「よし、急ごう」
リーガルが先頭に立って歩き出した。

神殿の出口に向かって歩いていると、通路が分岐しているところに出た。
「ええと、外に出るには、まっすぐ行けばいいんですよね」
エミルがリーガルに確認した、そのときだった。
「マルタ……」
男の低い声がマルタを呼んだ。マルタはびくっと足を止める。
「……マルタ……ごめんよ」

声は細い分かれ道の方から聞こえるのだった。マルタの目に、マントに身を包んだ長身の男が映る。男はくるりと背を向けると、分かれ道をずんずん奥へ歩いて行ってしまう。

「……パパ……!?」

マルタが叫び、ふらふらと歩き出す。

「パパ？　マルタのお父さんがいたの？」

「こんなところに？」

エミルとリーガルは分かれ道の方を見たが、誰もいない。

「マルタ……おいで……。おまえに謝りたいんだ」

奥の方で、再び声がした。

「……パパ！　ホント!?　私の話、聞いてくれるのね!?」

マルタはうれしそうに言うと、氷の上を走りだす。

「マルタ！　待って！　おかしいよ！」

エミルは叫んだが、マルタは振り返りもしない。エミルとリーガルが後を追おうと駆け出したそのとき、地響きを立てて大きな岩がいくつも落ちてきた。岩は分厚い壁となり、エミルたちとマルタを完全に遮断(しゃだん)してしまった。

「マルタ!!　マルタ大丈夫!?」

エミルは岩壁を叩き、必死に叫んだが、返事は聞こえない。

「くそ！　壁を壊すか……」
リーガルが岩を破壊しようとしたとき、テネブラエが鋭く制した。
「お待ち下さい！　後ろに敵が！」
ハッと振り向くと、見覚えのある揃いの戦闘服に身を包んだ兵士たちがバラバラと走ってくるのが視界に入った。
「ヴァンガード!?」
「……狙いはマルタのラタトスク・コアか」
リーガルがぎりぎりと歯噛みする。
ヴァンガード兵はふたりを取り囲んでしまうと、
「おまえたちに用はない！　死ね！」
と、襲いかかってきた。
彼らはラタトスクモードに変化したエミルとリーガルの敵ではなかったが、如何せん数が多すぎた。
「ど、どうしよう……マルタが！」
兵士たちを蹴散らしはしたが、ヴァンガードにたっぷり時間稼ぎさせてしまった焦りから、緑の瞳に戻ったエミルはおろおろと岩の前を歩き回った。
「ラタトスク・コアを奪われればマルタさまも死んでしまいます」
テネブラエも難しい顔をしている。そのときリーガルが、

「――ふたりとも、少し離れてくれ」
と、エミルたちを岩壁から遠ざけた。
彼は呼吸を整えると両手に気をため、前方へ一気に放つ。巨大な岩が木っ端微塵に砕け散った。
「す……すごい！」
エミルは口をあんぐり開けて、砕け散った岩とリーガルの後ろ姿を呆然と見比べた。
「なんという破壊力……。何故その力を戦いに生かさないのですか」
テネブラエもリーガルの力に驚いた様子だった。
「私は……もう二度とこの手で人を殺めないと誓ったのだ」
「もう二度と……ってことは……」
エミルはリーガルの広い背中に目をやる。
「……私はかつて、愛した女性を自らの手で殺めてしまった」
「…………」
「……軽蔑してくれてかまわぬ。だが、いまはマルタを救わなければ」
軽蔑だなんて、とエミルは思う。
「……僕、リーガルさんがそんな人だとは思えません。何か事情があったんですよね？それに人を殺したっていうなら、僕だって身を守るためにって言い訳して、たくさんの人を手にかけてきました」

「……ありがとう、エミル」
背を向けたままで、リーガルは礼を述べた。
（愛した女性を自らの手で……。一体何があったんだろう）
エミルは自分の知らないリーガルの一面に触れ、人の奥深さをほんの少し知った気がした。

出口とは別方向の分かれ道を、二人はマルタを捜して走った。
そして前方に広間を見つけ、エミルがリーガルと共に駆け込んだとき、石造りのトーテムポールの前で、今まさにリヒターがマルタを手にかけようとしていた。
（ああっ⁉）
「リヒターさん、やめてください！」
左手でマルタの首を締め上げ、右手の剣を振り上げていたリヒターは、いまいましそうに舌打ちした。
「……エミル、来てしまったのか。おまえには見られたくなかったのだが、仕方あるま

い」

突然、センチュリオン・アクアが現れた。

「リヒターさまの邪魔はさせないんだから！　プリーチャー！」

アクアが配下の魔物を召喚する。人魚に似たプリーチャーたちが四体、エミルとリーガルをリヒターから遮るように出現した。

「くそうっ！　時間がない。早いとこ片づけちまおうぜ！」

ラタトスクモードに変化したエミルはリーガルに声をかけると、焦りながら剣を振るう。

（間に合ってくれ！　マルタ……！）

なんとかリヒターに近づこうとするのだが、そのつど魔物が邪魔をする。こうしている間にもマルタが殺されてしまうのではないかと、エミルは気が気ではなかった。

四体すべてが倒れるまで、ひどく長い時間がかかったように感じられた。ようやく魔物を仕留め、元に戻ったエミルが、マルタの方を振り向いたときだった。まるで待っていたかのようなタイミングで、リヒターが剣をきらめかせた。

鋭い刃がマルタの体に突き立てられる。マルタは目を閉じ、声も出さずにその場にくずおれた。

（マ……マルタ……!?）

「マルタ――――ッ!!」

冷たい神殿の壁に、エミルの絶叫が反響する。
が、リヒターは少しも動じることなく、マルタの額から赤い宝石――ラタトスク・コアを取り出した。
「リヒター！　貴様！　よくも……よくもマルタをっ!!」
搾るような唸り声を上げながら、再びラタトスクモードになったエミルはリヒターに向かって行った。そのまま斬りかかろうとする視界を、何かがよぎる。アクアだった。
「っ!?」
一瞬の隙の後、リヒターに弾かれた剣と一緒に、エミルは固い床に無様に転がっていた。
あわてて起き上がろうとする彼のすぐ横を、リヒターが走り去ってゆく。彼の傍らにはアクアが寄り添うように飛んでいた。
「くそっ！　オレにもっと力があれば！　いつも……いつも俺が俺の状態なら!!」
（……マルタ……マルタッ……！）
エミルは床に突いた剣で体重を支えながら、マルタににじり寄る。恐ろしい後悔と憤りで、体が弾けとんでしまいそうだ。
声がしたのはそのときだった。
「悔やむ前にもっとよく死体を確認するんだね」
「その声は……！」

リーガルが振り向く。広間の階段の途中に、ボンと音をたてて白煙が立ち込めた。
「藤林しいな、ここに参上！」
「でもって、地獄から甦った美少女、マルタ推参♡」
驚いたことに、藤林しいなの背後からぴょんと飛び出したのは、リヒターに殺されたはずのマルタだった。
一瞬、エミルには何が起きたのかわからなかった。
(え……!? 生きて、る……？)
「マルタ……!? マルタ!!」
エミルは思わず駆け寄ると、階段を降りてきた少女を強く抱きしめる。彼女は華奢だったが、その体には確かな温もりがあった。
「よかった……」
初めはびっくりしたマルタも、そっとエミルの背中に手を回した。
「エミル……心配かけてごめんね」
(こんなに心配してくれたなんて……エミル……)
閉じた瞳にはうっすら涙が滲んでいた。
リーガルはさりげなくふたりから視線をはずすと、トーテムポールの前にくずおれているもうひとりのマルタを手で示した。
「ではこの死体は……」

「イガグリ流忍術って奴さ。まだ、おじいちゃんほどうまくはないけどね」
しいなが笑うと、偽のマルタは白煙に包まれ、木偶人形（でくにんぎょう）——マルタのものによく似た髪飾りをつけている——に戻る。
「しいな、助かった。ありがとう」
リーガルは礼を言い、
「しかし何故ここに？」
と、訊ねる。エミルとマルタもそばにやって来た。
「拉致（らち）されたフラノールの住民を助けに来た、そのついでさ」
「拉致された？　それは一体……」
エミルが聞きとがめた。
「フラノールが襲撃されたのは知ってるかい？」
「は、はい……」
エミルは頷く。
「その時アクセサリー屋の一家が、ヴァンガードにさらわれたのを見かけてここまできたのさ」
しいなの説明に、エミルたち三人は顔を見合わせた。
「やっぱりあの人たちは偽者だったんだ……」
「どういうことだい？」

しいなが首を傾げる。
「その拉致事件は、我らをここにおびき出すために行われたらしいのだ」
事情を説明しだしたリーガルに、すかさず空中に姿を現したテネブラエは口をはさんだ。
「お話の続きは、別の場所で。このままここに止まるのは危険だと思います」
しいながギョッとする。
「な、なんだい、こいつは……」
「テネブラエです。お見知りおきを」
テネブラエはしいなの顔の高さまで降りてくると、すまして自己紹介する。
「……な、何だかわかんないけどあんたのいう通りだ。とりあえずここを離れよう。ぐずぐずしてるとさっきの男にラタトスク・コアとやらが偽物だって気づかれちまうからね」
しいなは言い、さっさと歩き出した。
しばらくはあたりの気配に気を配りながら無言で歩いていた四人だったが、
「えっと、あんた、エミルだったかい？」
急に思い出したようにしいなが立ち止まり、振り返る。
「あ、はい」
「……あたし、あんたとどこかで会ってる気がするんだけど気のせいかね」

じっと顔を見つめられて、
「すみません。あの、僕はちょっと記憶に……」
と、エミルは目を伏せた。
「そうかい？　おかしいねぇ。あんた、なんか懐かしい顔してるんだよねぇ」
しいなはしきりに首をひねっている。
「懐かしいと言えば、さっきのあのリヒターってのも見覚えあるね」
「そうなんですか!?」
マルタが驚く。
「ああ。どこで見たんだっけねぇ……。あんな初歩的な仕掛けに騙される間抜け、忘れるとは思えないんだけど……」
うーん、としいなが唸ったときだった。
「……え!?」
突然、足元の床がなくなったと思うと、
「きゃあ――――――!?」
しいなは悲鳴をあげ、真っ暗な穴の中へと落ちていった。
「……」
突然のことに、三人はしばらく絶句していたが、
「……ふたりにはすまないのだが……」



リーガルが顔をあげた。
「う、ううん、すぐに捜しましょう」
「そ、そうですよ。しいなさんはマルタの命の恩人なんですから」
マルタとエミルが口々に言う。
「どうしましょう。穴から飛び降りますか？」
闇が好きなテネブラエはまんざらでもなさそうに、暗がりを覗き込んでいる。
（真っ暗で怖い……）
エミルは背中をぞくりとさせる。と、リーガルが提案した。
「まずは落とし穴に繋がる道がないか調べてはどうだろうか」
「そうですね。そうしましょう」
うんうんと頷きながら、エミルは内心ほっとしていた。

「エミル。さっきはありがとう」
「え？　何が？」

急に後ろから声をかけられて、エミルは振り向いた。
しいながが落ちた穴に繋がる道は手分けして探すことになったので、マルタが後ろにいたのは思いがけないことだった。
わざわざ追いかけてきたのかな、とエミルは思う。
「エミル、私が殺されたと思って、本気で怒ってくれてたから……」
マルタははにかんだ表情をみせながら、もじもじしている。
「うざい奴がいなくなってくれたって思われてたらどうしようって……」
「そんなこと、思うわけないよ！」
エミルは自分でもびっくりするくらいの勢いで首を振った。
「僕、マルタが刺された時、ショックで……。どうして自分の気持ち、ちゃんと伝えなかったのかなって……」
「……え？……」
マルタの唇が震える。
「前に言ったこと、取り消すから！　好意の押しつけだとか、そんなこと思わないからっ！」
「そ、それって……もしかして……」
口元を押さえるマルタに、エミルはあわててつけ加えた。
「ち、違うよ！　ただ、その……マルタが思い描いている理想の僕とホントの僕は違う

けど……」
「ううん。エミル、違うよ」
エミルの言わんとしていることを理解して、マルタは微笑んだ。
「そりゃ、最初の頃は私、エミルのこと勝手に強くてかっこいい王子様だって決めつけてたけど……。これだけ一緒に旅してれば、エミルが本当に怖がりなんだってこともわかるよ」
「う……うん……情けなくてごめん」
エミルはそっと顔をそむける。
「でもそんな怖がりのエミルが、巻き込まれただけなのに一生懸命戦ってくれてるんだよ。最初から勇敢な人が戦ってくれるより、よっぽどどきゅんとなっちゃうよ」
「え……」
「私ね、自分の理想のエミルより、目の前にいるキミの方がずっとずっとかっこいいと思うよ」
（マルタ……）
「お幸せそうで何よりです」
突然、テネブラエの声がした。別方向を調べに行ったはずのリーガルも、いつの間にかそばに来ている。目的の道が見つかったらしかった。
「ははは。エミル。女性にそこまで言わせて、だんまりというのはいただけないな」

「あ……あの……ぼ、僕は……」
仲間たちの視線に、エミルはしどろもどろになった。
「いいよ、エミル。私は勝手にエミルのことが大好きなの。エミルは無理しなくていいから」
(ここまで気を遣われると、ほんとに情けない……)
エミルはため息をつく。
「ならば先を急ごうか。しいながかわいそうだ」
「は……はい……」
リーガルに促され、エミルたちは歩き出した。

テネブラエが脚を止める。
「……何か臭います……」
言われるまでもなく、エミル、マルタ、リーガルの三人はすでに手で鼻を覆っている。
あたりにひどい臭いが漂っているのだ。
「な……なんだこの悪臭は……」
リーガルが顔を顰めた。

「……あれ……これって……」
エミルとマルタがほとんど同時に気づいた。
「メロメロコウ！　まさかデクス⁉」
彼らは急いで神殿の奥へと駆け出した。やがて、
（あっ⁉）
エミルは目を見張る。そこにはメロメロコウの臭いを撒き散らしている張本人だけでなく、しいなとアリスの姿があったからだ。
「……まずいよ。全然目覚めない」
しいなは床に膝をつき、気を失っているのかぐったりしたアリスを抱きかかえている。そしてデクスが、
「アリスちゃん！　アリスちゃん！　キミのデクスが来たよ！　さあ、目を覚ましてくれ！」
と、アリスににじり寄って呼びかけているのだった。
「これだけの臭いなら普通目が覚めそうだけれどねぇ……」
しいなは露骨に迷惑そうな顔をしたが、
「はっはっはっ、あんたもオレの香りにメロメロなんだな。だが！　オレはアリスちゃん一筋だ！」
と、ポーズを決める。彼の背後にはアイアンメイデン――やはり通販で買った――が

ドンと置かれている。

「デクス!?」

マルタが叫ぶと、しいなはハッと顔をあげる。

「あ、あんたたち！　ちょうどよかった！　あたしこの子の上に落ちちゃってさ。治癒術で回復してやってくれないか」

落とし穴の真下にアリスがいたんだな、とエミルは思った。そのとき、デクスが立ち上がり、

「マルタ!?　おまえ、リヒターに殺されたんじゃなかったのか!?」

と、驚いているわりには大げさな決めポーズでマルタを指さす。

「……ちょっと待て、リヒターって……あんたたちあのいけ好かない男の仲間なのかい？」

しいなが真顔で訊ねるのに、マルタが叫んだ。

「しいなさん！　そいつらはヴァンガードだよ！」

「！」

とたんにしいなはアリスを放り出し、エミルたちの側へと飛び退った。冷たい床に落ちたショックだろう、アリスは意識を取り戻して立ち上がる。

「いたたたたた……な……何……？」

意中の人の無事な姿に、デクスの顔がぱっと輝いた。

「アリスちゃん！　キミの王子様、デクスだよ」
アリスはぎょっとし、
「ちょっと！　なんで３Ｋデクスがいるの？　もうやだぁ！　臭いのうつっちゃう！」
とあわてて離れる。
が、そのとき自分を見ているマルタに気づき、ゆっくりと頭を巡らせた。
「マルタちゃん？　なんで生きてるの？　何、リヒターってば失敗したの？」
そうなんだよ、とデクスがいまいましそうに言う。
「せっかくこのオレがこうやって化けてマルタをおびき出してやったのに……」
驚いたことに、彼は一瞬にして別の男の姿に変わった。マントをまとった、先ほどの男だった。
「パパ！　……あんた……あんたが化けてたの！」
マルタが息を飲む。
「しいな、あれもおまえの忍術のようなものか？」
「……違うよ。いくらイガグリ流だって、種も仕掛けもなしにあんなことできるもんか」
リーガルとしいなも、変身したデクスから驚きで目が離せないでいた。
「あらあら、じゃあリヒターを笑ってやるためにも、ここでマルタちゃんを始末しちゃいましょう♡」
アリスがにこやかに鞭をペチペチと鳴らす。

「オレも手伝うよ、アリスちゃん」
アリスは、
「デクスは臭いから近寄らないで！」
と、マルタの父親の姿をした男に早口で言い、エミルたちに向き直る。
「さぁ、覚悟しなさいね。アリスちゃんが天国へ連れて行ってあげますよ～♡」
そのとき、しいなが氷の精霊を召喚した。
「……そうはさせないよ！　セルシウス！」
すると、たちまち彼らを隔てる分厚い氷の壁が出現する。
「ず、ずるい～！　私の頭の上に落ちてきたうえにこんな氷の壁なんか作ってぇ～！」
アリスが悔しがる声も遠く聞こえるほどだったが、しいなは、
「さあ、この氷の壁も長くはもたないよ。早いとこ、ここから逃げよう！」
と、仲間たちを促した。

「アリスたち、まだ追いかけてこないね」
どれくらい走っただろう。
「そうだね」

神殿の出口に向かっていたエミルとマルタは足を止めた。
エミルは仲間たちと一緒に奥の方から何か聞こえないかと耳を澄ませてみたが、何も聞こえない。
「リヒターさんも……」
「エミル……」
「……アクセサリー屋さんをさらったのも、リヒターさんが関わってたのかな」
エミルのつぶやきに、しいなが腰に手を当てて言った。
「……そうだとしたら、ずいぶん回りくどいことしてるねぇ」
「マルタを殺す現場をエミルに見せたくなかったのではないか。奴はそのようなことを言っていただろう」
リーガルが推測する。
「そうだ！　本物のアクセサリー屋さんは無事なんですか⁉」
エミルが思い出して訊ねると、しいなはにっこりした。
「もちろん。いまごろはあたしの仲間が無事に街へ送ってるはずだよ」
「よかった……」
エミルはほっと息をついた。そのとき、テネブラエがあまり機嫌がいいとは言えない口調で言った。
「どうして人間というのは、すぐ無駄話（むだばなし）をするのでしょうか。何度も言うようですが、

敵に追いつかれますよ」
「そういやさっきからずっと気になってたんだけど、あんたは精霊か何かかい？」
しいなが聞く。
「センチュリオンです。詳しくはここを離れてからご説明します」
ふーん、としいなはテネブラエを一瞥し、呆れたように言った。
「センチュリオンってのは口やかましいんだねぇ」
テネブラエはムッとしたが、これ以上は時間の無駄だと判断したのだろう。先にたって出口に向かい始めた。

「ああ……ようやく外に出られたよ……」
神殿を出ると、しいなは心底ほっとして体を伸ばした。喋っているといちいちテネブラエが注意しに来るので、長いことだんまりでいて疲れてしまったのだった。
「なにやら一度にいろいろなことが起きて混乱してしまったな」
エミルたちがリフィルに再会したセルシウスの涙のところまで来て、リーガルも口を開いた。しいなはずっと気になっていたことを訊ねてみる。
「……なあ、リーガル。あんたはどうしてこの子たちと一緒にいるんだい？」

「……実は……」

休憩をかねて、リーガルはこれまでのいきさつを説明した。

「……あの襲撃はロイドの仕業だってのかい⁉　まさか……信じられない……」

話を聞き終わったしいなの顔色は悪かった。

「でもロイドがセンチュリオン・コアの暴走に影響されているなら、考えられなくはないでしょう」

それまで黙っていたエミルが言うと、

「確かにそういうこともあるかもしれないけど……」

と、考え込んでしまう。が、すぐに、

「あ～～～～っ！」

と、髪をかきむしる。

「やめたやめた。考えても無駄だよ。確かロイドのことはリフィルたちが追いかけてるんだったたね」

「あ、はい……」

マルタが頷く。

「じゃあ、あたしはあんたたちについていくよ」

「え⁉」

エミルは驚いて声をあげた。

（ロイドの仲間だった人たちって、いつもこうなるよね……よっぽど心配なんだ……）
「ロイドがおかしくなったってんなら、あたしが一発鉄拳（てっけん）を喰らわせて目を覚ましてやらないと。あんたたちについていけば、ロイドに会えるかもしれないんだろ」
「まあ……そう……ですね」
マルタが言うと、
「よし、じゃあ決まりだ。いいだろ？」
しいなは――微笑んではいたが――ふたりを強い視線で見た。
「……は、はあ……」
「よ、よろしくお願いします……」
ふたりはなんとなく頭を下げてしまう。
「さあ、そうと決まったら、フラノールのアクセサリー屋を訪ねよう。グラキエスのコアがどこに行ったのか聞き出さなきゃね」
疲れも見せず、しいなは張り切って歩き出した。

フラノールの街へ入ると、エミルたちはまっすぐあのアクセサリー屋を訪ねた。
中から出てきた若い男は、しいなを見ると、
「頭領。この家にいたヴァンガードは追い払いました」
と、報告する。
「頭領？　頭領って？」
マルタが不思議そうにしいなを見ていると、リーガルがかわりに説明した。
「しいなはミズホの民だ。聞いたことはないか？　テセアラ王家に仕える隠密集団なのだが」
「知ってます！　情報収集とか戦いのエキスパートなんですよね」
マルタは目を輝かせてしいなと若者を見比べた。
（そっか。だからふたりともなんとなく服装も違うんだ……！）
「ふふーん♪」
しいながおどけてみせると、
「エキスパート!?　うそでしょ!?」
エミルは思わず驚いてしまう。
（落とし穴に簡単に落ちてたくせに……）
「ど、どういう意味だい！　まったく……」
しいなは一応文句を言ってから、

「じいさんたちは無事だろうね」
と、手下の若者に訊ねた。
「もちろんです」
「ご苦労様」
しいなが手下を労うと、彼は煙と共にその場から消えた。

アクセサリー屋の老主人は、暖炉に薪をくべていたが、
「おお、あんたは！」
しいなを見るなり声をあげた。
「じいさん！　無事でよかったよ！」
「ヴァンガードどもにさらわれたときは殺されるかと思ったが……。とにかくありがとう、命拾いしたわい」
主人はエミルたちにも笑顔を向けながら礼を言う。
確かに別人だな、とエミルは本物の主人を見ながら思った。
「いいんだよ、そんなの。それより聞きたいことがあるんだけどいいかい？」
しいなはそう言い、老人を椅子に座らせてやる。リーガルが訊ねた。

「セルシウスの涙が取れる洞窟付近から、珍しい宝石が見つかったと聞いたのだが……」
「ああ、グラキエス……とか何とかいうらしいの」
主人は頷き、
「息子の奴、メルトキオの貴族に売るとか言って、出て行ったよ。たまに実家に帰って来たと思ったらこれだ……。淋しいのぅ」
と、最後はうなだれてしまう。
「じいさん、元気をお出しよ。あたし、また今度遊びに来るよ」
気のいいしいながが主人を励まし、笑いかけた。
「メルトキオか……」
「急がないと、何か悪いことが起きるかも」
エミルとマルタが話していると、
「うむ。我が社の高速艇を用意させよう。一刻も早く、メルトキオへ向かわなければな」
リーガルは早くも次の行動計画を立てている。
エミルたちは老主人に礼を言い、店を後にした。

10

レザレノ社製の高速艇でフラノールから南下したエミルたちは、グラキエスのコアが売られたらしいメルトキオへ入った。
「ここがメルトキオ!? 大きな街だね……」
街の入り口に立ち、エミルはあたりを見回す。大きいだけでなく、建物も道行く人々も、彼の目には全てがきらびやかに映った。
(こんなに繁栄してるんじゃ、テセアラ人がシルヴァラント人を軽く見るのって、ちょっとだけ理解できる気もするなぁ……)
「なんだい。メルトキオは初めてなのかい」
しいなが意外そうに言う。
「あ、はい……」
うーん、としいなが唸る。
「前から思ってたんだけどさ、その……敬語はやめとくれよ。あたしは、どうもそういうのが苦手でね」

「は……じゃなくて、う、うん……」
半分街の様子に気をとられながら、エミルは頷いた。
「まだグラキエスのコアがここにあるといいけど……」
マルタが不安そうに言うと、
「ま、この街はあたしもリーガルも詳しいからきっと見つかるさ」
と、しいなが笑ってみせる。
リーガルの提案で、彼らはまず道具屋に行ってみることにした。フラノールのアクセサリー屋に個人的な貴族の知り合いがいないのなら、道具屋に持ち込む可能性が高いからだ。
しいなとリーガルの案内で、道具屋のすぐ近くまで来たときだった。店の扉が開き、黒いスーツに身を包んだ紳士然とした男が出てきて、エミルたちと擦れ違った。
あれっ、としいなが立ち止まる。
「……いまの、トクナガじゃないか？」
「私にもそのように見えたが」
リーガルもそう言ったが、先ほどの男はすでに角を曲がり、姿を消していた。
「お知り合いですか？」
マルタが訊ねる。
「うむ。この街にはテセアラの神子が住んでいるのだが……」

リーガルが説明し出すと、
「ゼロス……」
エミルが呟いた。
「ん？　ああ、そうか。たしかパルマコスタで会ってるんだったね」
しいなが聞きとがめて言う。
そういえばそうだったな、とリーガルも思い出したようだった。
「いまの男は神子の妹であるセレス様の執事だ」
「ふーん……。セレスさんっていう人のお使いかな」
マルタが首を傾げる。しいなが、
「そんなところじゃないのかい」
と話を切り上げ、店の扉に手をかけようとしたときだった。中から店主らしい恰幅のいい男が出てきた。手には鍵を持っている。
「なんだい、今日はもう店じまいなんだけど」
店主はエミルたちを見て訊ねた。場合によってはもう少し商売をしてもいいと顔に書いてある。
「あの、フラノールで見つかったっていう珍しい宝石を探しているんですけど、この店に持ち込まれませんでしたか？」
エミルが聞いてみると、

「ああ、あれか……」
店主は即座に答えた。
「持ち込まれたんですね!?」
マルタの顔が輝く。こんなに早く見つかるとは思っていなかったからだ。
「ああ、だがもう売れてしまったよ」
「だ、誰に!? 誰に売ったんだい?」
しいなが詰め寄ったが、店主は「だめだめ」と首を振る。
「それは言えないよ。お客さんのことは話せないんだ。わかるだろう」
「どうしてですか」
納得がいかない表情のマルタに、
「……顧客情報というものは守られなければならないのだ」
と、リーガルが説明してやる。
「特に宝石のような高級な品は持ち主がわかれば良からぬ輩に狙われる恐れもある」
「さすがそちらの紳士はよくお分かりだ。悪いね」
店主はほっとした様子で、店の扉に鍵をかけると帰って行った。
「でもあれを放っておいたら、持ち主だけじゃなくてこの街にも被害が……」
マルタは心配で仕方ないようだった。すると、
「私に考えがある。ひとまず陛下を訪ねてはどうか」

とリーガルが提案する。
「陛下って、王様のことですか！　ど、どうして？」
思いがけない言葉にエミルは驚いた。
「宝石などを購入するのは、ほとんどが貴族だ。彼らは手に入れたものを黙って隠しておいたりはせぬ」
「そうか。貴族の連中から情報を集めれば、グラキエスのコアの持ち主がわかる！」
しいなは手を叩いて感心した。
「なるほどねぇ。さすが、リーガル。伊達に公爵様じゃないよ」
「リーガルって、公爵様なんですか？」
今度はマルタが驚きの声をあげる。
「話していなかっただろうか……」
「聞いてないですよ！　大きな会社の会長で、公爵だなんて……すごい……」
エミルは軽く混乱しそうだった。
「色々と肩書きはついているが、おまえたちと何も変わらぬ普通の人間だ。さあ、城へ向かおう」
本人はなにほども気にしていないらしい。さっさとテセアラ城へ向かって歩き出す。
「何かロイドの仲間って、すごい人ばっかりだね」
マルタがエミルに囁いた。

「こんな人たちが信じるロイドって、何者なんだろう……。センチュリオン・コアの暴走に巻き込まれてなかったら、ホントはいい奴……なのかな…」
頷きながらもエミルは、考え込んでしまう。
「……かもしれないね」
ふうっとマルタは吐息を漏らした。

城に向かう道々に軒を連ねる店には、色とりどりの商品が並んでいる。その洗練された佇まいに、エミルは思わず目を奪われてしまった。
それで気づくのが一瞬遅れたのだ。
石畳を敷きつめた広場の向こうからやって来たアリスを認識できたのは、仲間たちの間に緊張が走ったときだった。
「……あらぁ、フラノールではよくもやってくれたわねぇ♡」
アリスはコツコツとブーツの音を響かせながら、ゆっくりと近づいてきた。そして突然、キッとした表情になると、鞭を振る。
石畳に浮かび上がった円陣の上に、地響きをたててゴーレムに似た魔物、ヘリオンが現れた。

「こ、こんな街なかで！」
エミルはすぐ目の前の城らしき堅牢な建物をちらりと見上げ、アリスを非難した。近くに居合わせたメルトキオの人々は、悲鳴をあげながら逃げてゆく。
「別にこの街が壊れても、アリスちゃん痛くも痒くもないモン♡」
アリスは「うふふっ」と笑いながら告げた。
「死・ん・で♡」
ヘリオンの横に、アリスが乗り物として使っているティリーのサブローが現れる。エミルたちは広場に散り、魔物たちと対峙した。
ヘリオンの太い腕がエミルを叩きのめそうと迫ってくる。魔物が一歩踏み出すたびに、激しい地響きと共に石畳の亀裂が広がってゆく。
リーガルが、ヘリオンの振り上げられた腕に向かってジャンプする。回転蹴りの衝撃で、魔物の動きが一瞬止まった。
「食らえっ！」
エミルは魔物の肩先を斜めに斬り上げ、返す刃で脳天から一気に斬り下ろす。ヘリオンは割れ鐘のような濁った声で吼えた。
「こっちはまかせとくれ！　散力符っ！」
しいなが札を使う。札を持った手で大きな円を描くようにすると、ティリーの丸いからだが浮き上がる。さらに背後からマルタがスピナーで何度も斬りつけ、

「烈風燕波！」
放った気で魔物を吹き飛ばした。
バランスを崩したヘリオンは、石畳を踏み砕きながら体勢を立て直すことができない。
「もう諦めろ！」
エミルはさらに魔物の硬い体に剣を振るうと、とどめの一撃を加える。
ヘリオンは、出現したときと同じような大きな音をたてて仰向けに倒れた。エミルの瞳が緑色に戻る。
「……アリス、勝負はついたよ」
「うふ♡　それはどうかなあ♡」
石のモニュメントの上に足を組んで腰かけ、戦いを観戦していたアリスは、小首をかしげて微笑んだ。
倒したはずのヘリオンがゆっくり立ち上がる。そしてエミルを後ろから羽交い絞めにした。
「うっ⁉」
「その子ね、負けたら自爆するように首輪に仕掛けをしといたの。アリスちゃん冴えてる～♡」
「な、なんだって！」
しいなが驚いて魔物の首を見上げる。

でこぼこしていてひどく太いために気づかなかったが、確かに半分めり込むようにして首輪がかけられていた。
「バイバイ、マルタちゃん！　ブルート総帥には死んじゃったっていっとくから♡」
アリスはそう言い残すと、ティリーに乗って飛び去った。
マルタはヘリオンに駆け寄ると、
「エミルから離れて！」
その巨体を拳で必死に叩く。
「私に任せろ！」
リーガルはがっちりとエミルを捕らえている腕を開こうと試みたが、どちらも無駄に終わった。
ヘリオンは今にも爆発しそうに、その体を赤く明滅させている。
「……ぼ……僕……嫌だ！　死にたくない！　離れて！」
恐怖に我を忘れ、エミルは叫んだ。
「エミル！　ど……どうしたら……！」
おろおろするマルタの上方に浮かんでいたテネブラエは、じっと様子を窺っていたが、
「――私が！」
意を決したように、伸ばした尻尾でヘリオンの頭を掴む。
「闇の眷属よ、我が意に従え!!」

ヘリオンはあっさりと腕をほどくと、エミルを放した。それを確認したテネブラエはヘリオンを掴んだまま上昇を始める。
「テネブラエ！」
石畳の上にうずくまっていたエミルは立ち上がり、叫んだ。ヘリオンは間もなく自爆する。そうなったらセンチュリオンとて無事ではすまないだろう。
「来てはいけません！」
テネブラエが叫ぶ。だがエミルたちは巨大なヘリオンのシルエットを仰ぎ見ながら、走った。
爆発が起きる。想像以上の規模だ。
「テネブラエッ!!」
マルタが叫ぶ。返事のかわりに、粉々になった魔物の破片(はへん)がバラバラと地上に降ってきた。
「テネブラエ！　ねぇ、テネブラエ！　まさか……本当に死んじゃったの？」
空に広がる黒煙が次第に晴れていっても、テネブラエの姿はどこにも見当たらない。
「う……うそ……」
声を震わせるマルタの瞳に涙が滲んだ。
「コリン……。コリンのときと同じだ……」
しいなはかつて自分の犠牲で最愛の精霊を失ったことを思い出し、唇を噛みしめる。

「テネブラエ――――!!」
エミルの叫び声が、もう魔物の気配さえ留めていないからっぽの空に悲しく響いた。
がっくりとマルタが石畳に膝をつく。と、彼女の額が輝きだした。緑と赤、ふたつのコアが宙に浮かぶ。これまでマルタが孵化(ふか)させた、ウェントスとイグニスのコアだった。
「な、何が起きたのだ……！」
リーガルがコアを凝視する。
ウェントスのコアが輝きを増した。
〝センチュリオンは何度でも甦(よみがえ)る。ラタトスク様のお力さえあれば……〟
低い声が響いたと思うと、コアはふたつともエミルの喉のあたりへ入って行く。エミルは体をビクリとさせ、ほんの少しの間動かない。そして軽く頷いたかと思うと、
「……くっ。だから俺じゃないと駄目なんだ！」
赤い瞳をカッと見開いた。
「エミル……？」
座り込んだままのマルタがおそるおそる声をかける。
「……センチュリオンが教えてくれた。テネブラエは眠りについているだけだ」
エミルは大股で歩き出した。
「あいつを迎えに行く」
「迎えに行くって、どこへ……」

しいなが首を傾げる。
「闇の神殿だ」
エミルは振り返りもせずに答えた。
「今までのセンチュリオンと同じなら、祭壇へ繋がる入り口があるはずだ。ならば――」
「テネブラエはそこにいる！」
マルタがあわてて立ち上がった。
しいなは、
「わかった。ならあたしも行くよ。リーガル、あんたは……」
どうする、と訊ねる。だが、彼は本来の目的を忘れてはいなかった。
「私は先に陛下にお会いして、グラキエスのコアのことをお伝えしておこう。その後おまえたちを追う」
「……勝手にしろ」
「リーガルさん、お願いします！」
マルタはリーガルに声をかけると、しいなと共にエミルを追いかけ始めた。

闇の神殿までの道すがら、エミルはマルタたちにセンチュリオン・ウェントスに聞いたことを話した。

本来センチュリオンがコア化するほどのダメージを受けた場合、ラタトスクの元へ戻るらしい。精霊と同じように、マナが枯れない限り何度でも再生できるのだ。

だが現在はラタトスクもコア化してセンチュリオンを癒す力を失っている。そのため、テネブラエは祭壇へ向かったということらしい。

「……テネブラエを感じる」

闇の神殿の入り口を潜ったとたん、エミルが言った。

「本当!?」

マルタはほっとする。

あたりは薄闇に包まれてはいるが、足元が見えないというほどではない。

「シャドウがいないからなのかねぇ。ブルーキャンドルなしでも視界が明るいよ……」

しいながため息まじりにあたりを見回した。

「ブルーキャンドル？」

ああ、としいなはマルタに頷いてみせ、

「シャドウがいた頃はこの辺りは真っ暗でね、そいつがないと、一歩も歩けなかったのさ」

と、世界再生以前のことを話そうとした。だがエミルはそっけなく、
「そんなことはどうでもいい。行くぞ」
と遮り、さっさと神殿の奥へ入って行ってしまう。
「……なんていうか……。あたしゃラタトスクモードのエミルってのはどうも好きになれないねぇ」
「しいな……」
マルタが悲しげな顔をしたのに気づき、
「あ、ああ、ごめんごめん。エミルには変わりないいんだけどねぇ。ま、いいさ」
しいなはあわてて謝り、肩をすくめた。

どれくらい歩いただろう。エミルは突然足を止めると、
「テネブラエがいないとコアがどの辺りか見当もつかないな。くそっ」
と、いまいましそうに吐き捨てた。
「他のセンチュリオンはテネブラエほどしゃべってくれないもんね……」
マルタがため息をついた。
イグニスはもちろん、ウェントスもすっかりだんまりを決め込んでしまっている。ふ

だんは陰険で口うるさいと思っていたテネブラエが、今は懐かしい。
「使えない奴らだ……」
エミルはチッと舌打ちをした。
「……そういや、エミル。あんた今回ずいぶんラタトスクモードが長いねぇ」
しいながふと気づいて言った。
「悪いか」
「悪かないけどさ……」
そのとき、エミルがしいなを手で制した。
「……しっ！　静かに」
「ど、どうしたんだい」
エミルは、
「……この奥から声が聞こえる」
と、通路脇の壁を指差した。
（そんな……一体誰が……）
マルタは不安になる。もしもコア化したテネブラエを奪われてしまったらと思うと、
彼女は気が気ではなかった。
「テネブラエ……ちゃんといるかな」
「マルタ。大丈夫だよ」

しいなが優しく声をかけてやる。
「他のセンチュリオンたちがテネブラエはここにいるって教えてくれたんだ。きっといるよ」
「……うん」
それでも不安そうなマルタを、エミルは振り返った。
「大丈夫だ。気配はある」
「ホント⁉」
駆け寄るマルタに、エミルはまっすぐに向き合う。
「ああ。俺を信じろ、マルタ。オレはおまえを守るラタトスクの騎士だろ」
「うん……」
薄闇の中、マルタはほんのり頬を染めた。しいなは、
「エミル。あんたラタトスクモードだとえらく男前なこと言うねぇ」
と、からかいを含んだ声でくすりと笑う。
「う、うるせぇっ！」
エミルは照れ隠しにしいなを怒鳴りつけた。

ようやく祭壇の間に足を踏み入れるところまで来て、
「この先にテネブラエがいるのかな」
と、マルタはまた不安になってしまった。
紫色の光が滲みながら、暗い床に文様を描き出している。
「……ああ、多分な。まぁテネブラエだけじゃなくて敵もいるだろうけどよ」
「さっき聞こえたっていう声の主だね……」
マルタはエミルに言った。先ほどから気になって仕方のないことだった。
「こんなとこに人がいるとすればロイドかヴァンガードぐらいだろうしね」
しいながが言う。どちらも手ごわいことに変わりはない。
「テネブラエを奪われないようにしなきゃ。行こう！」
マルタはいてても立ってもいられなくなり、扉から中へ入った。
「この気配……アクアだ！」
エミルが奥の祭壇へ目をやると、そこには果たしてセンチュリオン・アクアとリヒター の姿があった。
ふたりはコア化したテネブラエを前に、話をしている。
「……さっきのエネルギーはテネブラエがコア化したものだったんですね」
「好都合だ。このまま破壊すれば……」
破壊と聞いたとたん、エミルは思わず叫んでいた。

「やらせるか！」
「エミル！」
リヒターが振り返る。
「テネブラエは渡さない！」
マルタがスピナーを構える。しいなは懐から札を取り出した。
ふん、とリヒターが鼻で笑う。
「……フラノールでは小賢（こざか）しい真似をして逃げ出した割に、威勢がいいな」
「負け惜しみはみっともないよ」
しいなに言われ、
「ははっ。……その通りだな」
と、リヒターは認めた。が、次の瞬間、
「うわぁ!?」
しいなは目にも止まらぬ速さで近づいたリヒターに吹き飛ばされる。エミルの剣が背後から迫ったが、振り向きざま、リヒターはそれを右手の剣で食いとめ、左手の斧は、
「死ね！」
マルタに振り下ろされた。スピナーがかろうじてそれを受け止める。
「……よせ、エミル。おまえとは戦いたくない」
そのままの体勢で、リヒターはエミルに視線を当てた。だが、エミルはひどく殺気（さっき）だ

った口調で言い放つ。
「あいにくだったな！　オレはあんたをぶち殺したいんだよ！」
「くっ！」
戦うしかない、とリヒターは覚悟を決めたようだった。
エミルとマルタを左右に突き放す。
しいながその隙をついた。
「炸力符！」
彼女が放った札にも怯むことなく、リヒターはエミルだけを見ていた。
「エミル――。覚悟はできたか……苦しむのは一瞬ですむ」
剣が頭の上に掲げられる。闇の中に、リヒターの姿が浮かび上がった。
「はあああっ！　タワーリング・インフェルノ！」
エミルの体は幾度も煌く刃に翻弄され、床に倒れた。
「……し、しまった……」
「エミル――っ！」
マルタがレイズデッドで回復を図ったが、エミルはしばらく動けないでいた。
やがて、ゆらりと立ち上がったエミルの瞳は、怒りに燃えていた。炎にも似た光を纏う剣を、後手に構える。風が吹き始めた。
「アイン・ソフ・アウル！」

剣を前方に払うなり、巨大な光の塊がリヒターに向かってゴウッと襲いかかる。

「こ、この技は……!!」

リヒターから血の気が引いた。

「ぐあああっ！」

凄まじい光に包まれ、もはやリヒターの姿は見えない。仲間たちもただこの光景を固(かた)唾(ず)を飲んで見守るしかなかった。

やがて、光が消える。リヒターはなんとかその場に立っていた。その顔には苦痛というより、驚きが浮かんでいるように見えた。

「案外しぶといじゃないか！　なら、もう一発お見舞いしてやるぜ」

エミルはにやりと笑った。だがリヒターは、愕然(がくぜん)とした表情のままでつぶやく。

「エミル……おまえ……まさか、そうなのか……」

「何、訳のわからねぇこと言ってるんだ？」

「……エミル、聞こえるか」

リヒターはひと言言を、やけに重そうに口にする。

「いますぐラタトスクの騎士をやめろ。でなければ、俺は……おまえを……」

エミルが焦(じ)れ、

「うだうだうぜぇんだよ！　死ね!!」



剣を振るおうとした、そのときだった。
「待ちな、エミル！」
エミルの腕をしいなが掴む。
「落ち着いていつものあんたに戻るんだ！　このままじゃ神殿が……」
「……うるせぇ！　俺の邪魔をするな！」
エミルはしいなを片手で投げ飛ばし、
「アイン・ソフ・アウル！」
再び剣を振るう。しかし今度はそれを受け止めたリヒターが、交差させた剣と斧で跳ね返した。
「エターナル・リカーランス！」
「な……何!?」
X型に迫ってくる光の刃に、
「危ない！　エミル！」
マルタが飛び出した。エミルをかばった華奢な体はリヒターの技をまともに食らい、そのまま床に倒れる。
「……マルタ……？」
目を見開いたエミルの視界が激しく揺れ出す。
「マルタ——!!」

しいながで危惧していた通りのことが起きたのだった。柱が折れ、天井が轟音をたてて落ちてきた。祭壇の間は破壊され、恐ろしい勢いで走った床の亀裂が、エミルの足を捉える。

(落ち……る……！)

エミルの意識はそこで途切れた。

「……んん……ここは……」

気がつくと、冷たい床の上に倒れていた。エミルは体を起こしかけ、ハッとなる。

「……マルタ!?　マルタ、どこだ!?」

大声で呼びながらあたりを捜したが、彼女の姿はなかった。

「くそっ！　はぐれたか……！」

別の場所を捜そうと走り出しかけたエミルは、ふと足元に落ちいてるものに気づいた。祭壇にあったコアに違いない。

「テネブラエのコア！　……そうか、一緒に落ちてきたのか」

エミルはコアを拾い、上を見上げる。暗くてよくわからないが、この真上が祭壇の間だったのだろう。同じ場所から落ちたのだ、そう遠くへは行っていないだろうとエミル

は思った。

案の定、マルタは次の間で見つかった。

「マルタ！　無事だったか！」

「エミル！」

彼女もまたエミルを捜そうとしていたらしい。だが、

「うっ……」

と、呻くとその場にうずくまってしまう。リヒターの技をまともに受け、おまけに階上から落下したのだから無理もなかった。

「マルタ！　怪我(けが)が痛むのか！」

エミルはしゃがみ込み、肩で息をしているマルタに問いかけた。

「応急処置はしたから……大丈夫」

彼女は健気(けなげ)に言い、ふらつきながらもなんとか自力で立ち上がってみせた。

「……すまない。おまえに怪我させちまうとは」

「ううん……だけどエミル、どうしちゃったの？」

マルタは不思議そうに首を傾げる。

「しいなも言ってたけど、ラタトスクモードが長い……」

とたんにエミルの顔がこわばる。

「……おまえも、そんな風に言うのか」

「え？」
エミルの赤い瞳からは、ついさっきまでの優しさがすっかり消え去っていた。
「……しいなもリヒターもいつもの俺に戻れっていう。おまえもだ！」
「私は別に……」
首を振るマルタに、エミルは弁解の余地を与えない。
「どうしてだ？　何がいけない！　いつもの俺ってのは気弱で臆病で何もできない豚じゃねぇか！」
「エミル……」
マルタは、ラタトスクモードのエミルがこんな気持ちを抱いていたことを初めて知った。今まで気づこうとしなかった自分が、悲しかった。
「おまえは……俺にラタトスクの騎士として自分を守って欲しいと言った。俺はその通りにしている！　何が気に入らないんだ！」
「……エミル……私はそんなつもりじゃ……」
ふいにエミルの瞳から怒りが消えた。
「……俺が……消えればいいんだろう。みんな……俺が邪魔なんだ……」
そのままがくりと膝をつくと、前のめりに倒れ、彼は意識を失ってしまった。
「エミル！　しっかりして、エミル！」
マルタはエミルの肩を揺すり、何度も名前を呼ぶ。エミルはそれでも目覚める気配が

ない。
(エミル……)
薄闇のなかで、マルタは途方に暮れた。

ゆっくりとまぶたが開く。緑の瞳がマルタを捉えた。
「……あれ……ここは……？」
エミルは自分がマルタの膝枕で眠っていたことに気づき、あわてて起き上がる。
「……エミル……。さっきと逆だね」
「……さっき？」
なんのことだろう、とエミルが思っていると、
「大丈夫かい？　エミル」
しいなの声がした。
「しいな！　しいなも無事だったんだね」
エミルはマルタとしいなの姿にほっと胸を撫で下ろした。
(ふたりとも、僕の目が覚めるのを待っててくれたんだな……)
「ああ……あんたもマルタも無事で何よりだよ。でも……」

だが、しいなはそう言い、顔を曇らせる。
「……でも？」
「テネブラエが……目覚めないの」
マルタが悲しげに言った。
「テネブラエ!?　じゃあコアはリヒターさんに奪われなかったんだね」
「な、何言ってるんだい。あんたが持ってたんだよ」
しいなは怪訝（けげん）そうにエミルを見た。
「あ……あれ……」
（そうだった……かな……）
どうも記憶があやふやだなと思いながら、エミルはマルタがコアを孵化（ふか）させる儀式を見つめた。
「……ほら、私、さっきから、今までのセンチュリオンと同じようにしているのに……テネブラエ……目が覚めなくて……」
崩落のショックでコアがどうかしてしまったのだろうか。エミルはそう思い、テネブラエのコアに手を伸ばす。
「う、うわ……!?」
とたんにコアが輝き出した。
「な……何だ!?」

しいなが一歩あとずさる。まばゆい光が溢れ、ゆっくりと消えると、そこにはセンチュリオン・テネブラエの姿があった。
「テネブラエ⁉」
マルタが明るい声をあげる。
「……エミル……マルタさま……ご心配をおかけしました」
心なしか、いつもよりかしこまった口調でテネブラエは挨拶(あいさつ)する。
「テネブラエ！　もう平気なの⁉」
ほんの短い間離れていただけなのに、テネブラエがひどく懐かしかった。エミルはほっとして笑顔になる。
「センチュリオンは死にません。コアに戻ります。もっとも、おふたりが迎えに来てくださらなければ目覚めることはできませんでしたが……」
エミルはあのヘリオンの爆発を思い出した。
「テネブラエ……僕のために……ごめんなさい」
「お気になさらずに」
テネブラエが短く返す。
「……良かった……。仲間と別れるのは……つらいからね」
しいなの脳裏(のうり)にはどうしてもコリンが浮かんでしまう。
マルタはうれしくて仕方がない様子で、

「テネブラエ！」
と、センチュリオンに駆け寄り、抱きついた。
しいなはその様子をうらやましそうに見守っていたが、
「さあ、そろそろ戻ろう、リーガルが心配するよ」
と、頃合いを見計らって声をかける。
「うん」
マルタがすっかり元気を取り戻した様子で頷いた。
「……あ、待って」
エミルが手を上げかける。
「あの……リヒターさんは？　リヒターさんはどうしちゃったんですか？」
神殿の出口に向かおうとしていたしいなは振り返り、
「……ああ……。それがあたしも崩落に巻き込まれたから確かなことは言えないんだけど……」
と、前置きしてから、
「どうもあのアクアっていうセンチュリオンが助け出していったみたいだねぇ」
と言った。
「じゃあ、生きているんですね！」
「え……まあ、多分ね」

エミルはそれを聞いて、
「良かった……」
と、長い吐息を漏らした。しいなは複雑な表情になる。
「……なんというか、ラタトスクモードと普段のあんたは正反対だねぇ」
「………………」
エミルはなんと答えていいかわからず、ただ曖昧(あいまい)に笑ってみせた。

神殿の出口の形に、外の光がまぶしく象(かたど)られている。あと少しで外に出られるというところまできて、エミルたちは誰かが神殿に走り込んで来たのを見た。
「リーガル！」
しいなが驚いて足を止めた。リーガルはエミルたちの姿を認めると、
「無事だったか！　テネブラエは……」
と訊ねる。テネブラエは姿を現してみせた。
「私ならこの通り大丈夫です。ご心配をおかけしました」

仲間たちが改めて再会を喜んでいると、マルタが思い出したように口を開いた。
「そういえばリーガルさん。陛下にグラキエスのコアのこと、お話してくださったんですか？」
「うむ。そのことで進展があったので、おまえたちを迎えに来た」
と、リーガルは頷いた。エミルが、
「進展？　もしかしたらコアの持ち主がわかったんですか？」
と訊ねると、その通りだという。
「やはり、メルトキオの貴族が買い求めていた」
ふーん、としいなは腕組みをし、
「で、そいつは誰なんだい？　おとなしく渡してくれそうな奴だといいけど」
と、貴族の名を聞いた。
「その点は大丈夫だろう。買い主は、セレス・ワイルダー様だ」
「セレスって……アホ神子の妹じゃないか！」
しいなが驚く。
「神子ゼロスの……妹……」
エミルは一気に気が重くなってしまった。ゼロスは苦手だ。そもそもあのチャラチャラした感じがどうしても好きになれない。
「うむ。とにかくゼロスの屋敷へ行こう」

リーガルが促すと、
「ふたりとも、それでいいかい？」
と、しいながエミルたちに確認する。
「もちろん」
マルタはそう即答したが、エミルはどうにも力が入らない。
「気は進まないけど、仕方ないもの……」
すると、しいなはふっと笑い、
「気が進まないのは、あたしも同じだよ。とにかく行こう」
と、仲間たちを励ますように真っ先に神殿を出て行った。

ワイルダー家の屋敷は、想像以上に広大だった。エミルは気後れしたまま、仲間たちと一緒に応接間に通される。
革張りのソファ、壁には貴婦人の大きな肖像画。キャビネットの上に山と積まれた贈答品らしき美しい包みの数々——目に入るものすべてが、エミルやマルタにため息をつかせた。
手入れのゆき届いた口髭を蓄えた執事が出てきて、恭しく頭を下げる。

「お帰りなさいませ、ブライアン公爵。それからしいなさま、ごぶさた致しております」
「セバスチャン、久しぶり」
しいなはもう慣れっこなのだろう。執事に気安い笑顔を向ける。
セバスチャンはそれから初対面の客人たちに礼を失しない視線を向けると、
「そちらがエミルさまとマルタさま、それにテネブラエさまですね。お話はブライアン公爵から承（うけたまわ）っております」
と、あくまでも物腰柔らかくにこやかだ。おかげでエミルも喋ってみようという気になった。
「あ……ありがとうございます。それでグラキエスのコアのことなんですけど……」
「はい。実はこの屋敷に勤めておりますトクナガという者が、不思議な宝石を手に入れたと申しておりました」
セバスチャンはエミルに応えた。
「そういえば、トクナガさんって確か道具屋さんら出てきた執事さんじゃ……」
マルタが思い出してリーガルを見上げる。
「ああ。どうやらあの時買い求めていたようだ」
エミルが、
「お願いします！　トクナガさんを呼んでください！」
と、セバスチャンに頼んだときだった。

ガタガタッという大きな物音が上の方から響いてきた。
「!?」
「――な、何事でしょう……」
エミルたちとセバスチャンが顔を見合わせていると、慌てふためいた男がバタバタと駆け込んできた。あの日、道具屋から出てきたトクナガだ。
「た、大変です！　ハニーさまがセレスさまにさらわれました！」
「なんと！　ハニーさまがセレスさまを!?」
セレスがさらわれたことにも驚いたが、マルタは、
「……ハニー？」
と、怪訝そうに聞き返す。
「それ……もしかしてロイドのこと？」
エミルも思わず訊ねてしまう。
「その説明は後だよ！　ロイドはどこに!?」
さすがにしいなはふたりを相手にせず、トクナガに詰め寄る。
「二階の窓から外へ……」
トクナガが白い手袋で上を指さした瞬間、
「追いかけるよ！」
彼女は応接間を飛び出していた。

屋敷前の階段を駆け降り、エミルたちはあたりを見回す。が、それらしき姿はどこにもなかった。
「くそ……どこだ……！」
リーガルが拳を握りしめた。
「テネブラエ！　グラキエスの気配ってわからないの⁉」
エミルが訊ねると、テネブラエはちょっと難しい顔になった。
「遠ざかっていることは感じます。ですが別のセンチュリオン・コアの気配も交じっていて、はっきりとは……」
「別のコア？　ロイドが持っているルーメンのコアかい？」
しいなが聞く。
「……いえ……これは……ソルム、でしょうか。ソルムだとしたら、何故こんなところで……」
「詮索はあと！　それより手分けして捜そう！」
マルタのひと言で、彼らは四方に散った。

ひとりになってからエミルは、自分がメルトキオにまったく土地カンがないことを思

い出した。ぐるぐる回ってみたが、相変わらず貴族の住む地区から抜け出せない。
(困ったな……。よし、今度はあっちへ行ってみよう)
エミルが階段を上がろうとしたときだった。ちょうど上から降りて来た若者とぶつかりそうになる。
「おおっと、気をつけろ……。――って、おまえは！」
その声にエミルはハッとした。
「ゼロス・ワイルダー!!」
ゼロスは赤い髪を風になびかせながら、
「……はん、わざわざ俺さまのテリトリーにまで顔を見せるとはな」
と、皮肉っぽく笑った。
「そんなこと言ってる場合ですか！　あなたの妹がロイドにさらわれたんですよ！」
「何言ってんだ、おまえ……」
テセアラの神子は、エミルの言葉を全く信用していない。
「本当なんです！」
なおもエミルは訴えかけ、それから視界の端に映ったものに驚いて振り向いた。
「……あ!?」
ロイドが白いドレスを着た少女を肩に担ぎ、走ってゆく。
「ロイド!?」

ゼロスが目を丸くした。その声が耳に入ったのだろう、ロイドが立ち止まる。
「……ロイド・アーヴィング！　あなたは……！」
怒りをあらわにするエミルが、ラタトスクモードに変わる。
「あんたって奴は!!」
ロイドは振り返りもせず、再び走り出した。
「待ちやがれ！」
エミルはゼロスと共にロイドを追う。が、逃げ足の早いロイドはすぐに見えなくなってしまった。
「……くそっ！　見失ったか！」
舌打ちするエミルに、
「……今のが、ロイドだと？」
ゼロスがうんざりしたような声を出した。
「当たり前だろ！」
「……バカ言うんじゃねぇよ。あれは……ロイドなんかじゃねぇ」
ゼロスの目は、セレスが消えた先を見つめていた。
「ふざけるな！　てめえの妹がさらわれたんだぞ！」
エミルはのんびりしているように見えるゼロスが、腹立たしくて仕方ない。
「……ふん、熱くなるなよガキンチョ」

薄く笑ったゼロスは頬を引きしめ、
「ロイドなら……セレスにあんなことはしない。あれはロイドじゃねぇんだよ」
と、歩き出した。
「どこへ行く！」
帰るんだよ、とゼロスは事もなげに言う。
「わざわざセレスをさらうなら、俺さまのところに連絡があるでしょーよ」
そして、その場に立ったままのエミルに顎をしゃくってみせた。
「おまえも来いよ。ロイドに会いたいんだろ」
「……ふん」
エミルは顔をそむけた。

ゼロスが屋敷に戻るなり、セバスチャンが駆け寄った。
「ゼロスさま！　セレスさまが！」
「——こいつに聞いた」
ゼロスがそばにいるエミルをちらりと見る。
「ブライアン公爵としいなさまもセレスさまを捜して下さっております」

「リーガルとしいなが？」
彼らがメルトキオに来ていることは初耳だった。ゼロスが驚いているところへ、マルタが走り込んでくる。
「大変！　ロイドが街の外へ出たらしいって……あ！」
マルタはゼロスとエミルが一緒にいるのを見て目を見張った。エミルのラタトスクモードが解ける。
「──セバスチャン。セレスがさらわれたときのことを話せ」
ゼロスが促すと、
「それは私めからお話し致します」
と、トクナガが進み出る。
「私がセレスさまに、グラキエスという特別な宝石を献上し、ご説明申し上げていたときのことです──。突然ロイドさまが窓から侵入してセレスさまと宝石を持って逃げていかれたのです」
「そんな！」
声をあげたのはマルタだった。
「グラキエスのコアはやっぱりロイドに奪われたってこと⁉」
エミルは、
「ご、ごめん、マルタ。僕がちゃんとロイドを捕まえられなかったから……！」

と、すまなそうに詫びた。
「で、ロイドから連絡はないのか？」
ゼロスが自分付きの執事に訊ねる。
「今のところ、何も……」
セバスチャンが首を振ると、
「……おかしいな」
ゼロスはつぶやく。
「おかしくはないでしょう。あいつはコアを探しているんだから」
マルタが反論すると、
「ならわざわざセレスをさらったりしねぇでしょーよ。だいたいあいつはロイドじゃねぇよ」
ゼロスはエミルに言ったのと同じことを繰り返した。
「嘘！　ロイドだったよ！　僕、この目で見たもの」
エミルがもう一度ロイドを見たと主張すると、ゼロスはつかつかと彼に歩み寄る。
「おまえがロイドの何を知ってるってんだ。それにあいつはあんな臭いはしないぞ」
「臭い……？」
マルタが訊ねる。
「ああ。あいつが俺の横を走って行ったとき、鼻が曲がりそうな強烈な臭いがしたぞ」

「俺の知る限り、ロイドは香水をつけるような奴じゃねぇし、つけるにしてもありゃひどすぎだろ」

顔をしかめるゼロスに、エミルの胸は嫌な予感に満たされてゆく。

「……そういえば……なんか……どこかで嗅いだような臭いだった……」

「……まさかと思うけど、メロメロコウ……とか？」

おそるおそるマルタが訊ねると、エミルはハッとした。

「そ、それだ！　……ってことは、デクスがロイドに化けてたってこと⁉」

顔を見合わせるふたりに、それまで黙って聞いていたゼロスが業を煮やした。

「……おい。おまえらだけで話を進めるな。コアだのデクスだの。何なんだ」

「……えっと……実は……」

マルタは、混乱するまいと自分を励ましながら、ソファにどっかりと腰かけたゼロスにこれまでの事情を話して聞かせた。

「……ふーん、ラタトスク、ね。大げさな話になってきたな」

話を聞き終わったゼロスは、足を組み替え、

「とにかくさっきのロイドはそのヴァンガードのデクスって奴の可能性が高いんだな」

と、念を押す。

やっぱりロイドのことが気になるんだ、とエミルは思いながら、

「あの臭いは……多分……」

と、頷く。
「――よし」
ゼロスは立ち上がり、セバスチャンに向かって言った。
「俺はこいつらを連れて陛下に謁見する。リーガルたちが戻ったら伝えとけ」
「かしこまりました」
驚いたのはマルタたちだった。
「謁見って……」
「ワイルダー家の格は王家に次ぐんだよ。……このことを知らせねぇ訳にはいかねぇからな。行くぞ」

テセアラ城では、ほとんど待たされることなく謁見の間に通された。
(一日のうちに、貴族のお屋敷とお城にまで来ちゃうなんて、なんだか信じられないよ……。ゼロスって、本当にすごいんだな……)
エミルがぼんやりしていると、玉座についたテセアラ王が口を開いた。
「神子ゼロス。セレスがハニーにさらわれたとか」
「正確に言うと、ハニーの偽者です。恐らくヴァンガードの仕業でしょう」

ゼロスが応える。
「あの……どうしてハニーなの？」
しいなから理由を聞きそびれたエミルが、思わず場所もわきまえずに質問してしまう。
ゼロスは——半ば自慢げに——答えた。
「俺さまの親友だから」
「？」
エミルはマルタと顔を見合わせ、首を傾げた。わかったようで、さっぱりわからない。
(王様までハニーって言うなんて……。ロイドってそんなに愛されてるのかな)
一方、対の玉座に座っているヒルダ姫は、ヴァンガードと聞いただけで身を震わせた。
「まあ、あのシルヴァラント解放戦線を名乗る蛮族の仕業ですの!?　恐ろしいことですわね」
と、口元を押さえた。
「……」
マルタが目を伏せたとき、
「リーガル・ブライアン公爵とミズホの里の藤林しいなが到着しました」
と、衛兵が報告した。
「通せ」
王が鷹揚に頷くと、すぐにふたりが入って来た。

「大変なことになったたな」
王はふたりを見比べ、顔を曇らせた。
「陛下、その件につきまして新たな情報を入手しました」
リーガルが言うと、しいながー歩進み出た。
「レアバードがメルトキオの東の空へ飛んで行くのを我が里の者が目撃しております」
それを聞いて、
「……ここから東って、まさか岬の砦じゃ……」
と、マルタがつぶやく。
「マルタ、何か知ってるの？」
エミルが訊ねると、彼女は、
「……岬の砦にはヴァンガードの拠点があるんです」
と、答える。ゼロスがくるりとマルタを振り返った。
「へぇ、マルタちゃん。キミ、どうしてそんなことを知ってるのかな」
「そ……それは……」
言い淀むマルタを、ゼロスはにやりと笑って見る。
「さすが、元ヴァンガード」
テセアラ王が息を飲んだ。
「……ヴァンガードの一員だと……」

すかさず護衛の兵士たちが武器を構え、マルタに突きつける。エミルはあわてて両手を広げ、

「な……や、やめて下さい！　今のマルタはヴァンガードとは関係ありません！」

必死でマルタをかばう。ゼロスは、

「ま、それに、今は妹の命のほうが大事だからな」

と頷き、兵士たちに命令した。

「――武器を収めろ！」

忠実な兵士たちはいっせいに元の体勢に戻る。ゼロスは改めて玉座に向き直ると、

「今のところ、ヴァンガードが私のところに接触してくる気配はありません。となると、セレスを拐かした目的は私ではなくロイドではないかと思うのですが」

と王に言った。

「ど、どうしてですか？」

目的がロイドと聞いて、エミルは声をあげた。リーガルが静かに答える。

「エミル、ヴァンガードもコアを集めているのだったな。そしてロイドはコアを持っている」

「……そうか。取り引きするために、セレスさんを……」

エミルはヴァンガードの卑劣さに眉を寄せた。

やっとわかったかという顔で、

「まあ、こいつは偶然なんだろうけどな」
ゼロスは前置きし、続けた。
「たまたまセレスがコアを手に入れた。ヴァンガードは、それを奪うついでにセレスを利用することを思いついた、と」
「デクス……なんてことを……！」
マルタは唇を噛みしめる。
「私たちはヴァンガードの拠点とやらへ侵入します」
ゼロスはすでに今後のことを頭の中に組み立てているようだった。
「空振り（からぶ）りだった場合を考えて、王立軍には私たちとは別にセレス捜索をお願いしたいのですが」
「わかった。すぐに手配しよう。ミズホは……」
王は頷き、しいなの方に頭を巡らせる。
「すでに捜索を命じております」
しいなが答える。
「よかろう。――しかし神子、そなたは残った方がいいのではないか？」
王の気遣いに、テセアラの神子はにっと笑ってみせた。
「たまにこういうスリルを体験しておかないと早く老け込（ふこ）んでしまいますからね――それでは、失礼致します」

城を出、広場まで戻ってきたエミルは、
「あの……ちょっといいかな……」
と、思い切って仲間たちを呼び止めた。
「どうした？」
リーガルが振り返る。マルタもゼロスも足を止めた。
「……みんな、ごめん」
エミルは深々と頭を下げる。
「なんだい、急に謝ったりして」
しいなが面食らって訊ねた。
「……ロイドのこと……」
エミルは、自分が恐ろしい間違いをしてきたのではないかという思いで、頭がおかしくなりそうだった。
「もしかしたらロイドがやってきたひどいこと、みんな偽者の仕業かもしれないって思って……」
「エミル……」

マルタがつぶやく。ロイドに対するエミルの憎みようを目の当たりにしてきた彼女には、今の彼の気持ちが理解できた。
「わかんないよ」
エミルは言う。
「もしかしたら今回だけ偽者だったのかもしれないし、やっぱり今回も本物のロイドの仕業なのかもしれない……。だけど、ロイドの仲間だって人たちに会うたび、どうしても同じ人の話をしているようには感じられなくて……だから……」
そこで言葉に詰まったエミルに、リーガルが最初に声をかけた。
「……キミがそう思うようになってくれたのは嬉しい。だが真実は何もわからない」
「それはそうです」
エミルは頷き、
「だけど、僕は真実がまだ何もわからないってことに気づきました。だから、謝りたかったんです」
と、結ぶ。
「……なら、一時休戦だ」
ゼロスが軽い調子で言う。
「さっき禍々しい目つきで俺を睨んだときは、感じの悪いクソガキだと思ったが、話してみれば素直ないい子でねーの」

「ゼロス！　そんな言い方はないだろ」
すかさず、しいなが文句を言った。
「あんたが感じ悪いと思ったのは、きっとラタトスクモードのエミルだったんだよ」
「うむ……。エミルはラタトスクモードとやらになると、少々荒い性格になるようだ」
仲間たちが重ねる言葉を聞いて、
「やめて！　もうひとりのエミルを非難しないで！」
マルタがエミルの前に飛び出して、かばうように両手を広げた。
「あのエミルもエミルなの！　エミルは一生懸命なんだからそんな言い方……」
「あ……ああ。悪かったよ」
しいなは髪に手をやってかりかりと掻く。リーガルもすぐに、
「確かに言葉が過ぎたな。すまない、エミル」
と、詫びた。
「い、いえ……僕は別に……」
エミルはしどろもどろになってしまう。最近ではラタトスクモードのときの記憶が曖昧なことが多い。謝られたりするのはかえって苦に感じるのだ。
「ま、それはさておき、そろそろ出発しようや」
ゼロスが仲間たちを促した。
「悪いが、セレスのことが気がかりなんでね」

「そうだね。引き留めてごめん。急ごう！」
エミルは、胸がいくらか軽くなったことを感じながら、足早に歩き出した。

11

岬の砦はメルトキオから東南の方角にあった。海風に晒された入り口はところどころ崩れ落ち、すっかり傷んでしまっている。
「ヴァンガードの拠点という割に見張りがいないようだが……」
リーガルがあたりを見回して言った。
「……ホントだね」
まったくひと気がないのに拍子抜けしたしいなが頷く。
「ねぇ、マルタ。マルタはここを知ってるんだよね」
エミルが訊ねた。
「誘拐した人を閉じこめておくようなところ、ある？」
「私、ここの拠点のことは話で聞いていただけなの。だから詳しいことは……」
ごめんね、と謝るマルタに、ゼロスが肩をすくめてみせる。
「なるほど。手当たり次第に探せってか……。仕方ねぇ。行くぞ」
彼は草ぼうぼうの地面を踏みしめ、砦の入り口を潜った。

地下に降りて行くと、広い廊下に出た。古い彫刻などが、松明（たいまつ）の火に不気味に照らされている。

「セレス、無事だといいけど……」

ぼろぼろの絨毯（じゅうたん）が敷いてある手前まで来て、しいながつぶやいた。

「……無事じゃなかったらヴァンガードの奴ら、皆殺しだ」

ゼロスの声には憎しみがこもっている。

「……すみません……」

マルタが思わず謝ったが、彼はにこりともしなかった。

「……悪いが気にしないでくれとは言えねぇぞ」

「ゼロス！　そんな風に言うのは……」

しいなが棘（とげ）のある口調（くちょう）をたしなめようとしたときだった。

「しいな！　後ろだ！」

リーガルが叫ぶ。

「え!?」

振り返ると、彼女の背後にはいつの間にか魔物が迫っていた。

「しいな！　あぶない！」
エミルが剣を抜く間もなく、魔物はしいなに飛びかかる。が、一瞬早く床を蹴った彼女は空中で一回転すると、
「大丈夫さ！」
絨毯の上に見事な着地を決めた。エミルたちがほっとしかけたとき、
「ええっ!?」
突然しいなのバランスが崩れた。絨毯の下には落とし穴があったのだ。
「うそだろ〜ッ!!」
彼女は驚きの声をあげながら、暗い穴の中に落ちて行った。
「……えええ!?　また!?」
マルタは信じられないという表情で、閉まってしまった穴の蓋を見つめる。ゼロスが、
「あいつ……アホかっつーの……」
と、呆（あき）れた。これまでにも、しいなは何度も穴に落ちている。
(俺さまはもう慣れっこだが、なにもこんなときに落ちなくてもいいんでねーの)
「仕方ない。私がしいなを捜す。おまえたちはセレスさまを頼む」
前回もしいなを捜しに行ったリーガルが、エミルたちに先に進むように促した。
「は、はい。わかりました。しいなをお願いします」
エミルは言いながら、ゼロスについて広間を抜けた。

「それにしても、セレスはさらわれるわ、ハニーの偽者は出るわ、しいなは落とし穴に落ちるわ……」
ずんずんと歩きながら、ゼロスの口は休まない。
「どうしてこう、俺さまの周りには事件が頻発するんだ」
それを聞いて、
「す、すみません……」
「ごめんなさい……」
マルタとエミルは思わず揃って頭を下げる。ゼロスは足を止め、
「……何でおまえらが謝るんだよ」
と、腰に手を当てた。
「……あの……それは……」
マルタがしどろもどろになる。
「……んだよ、これじゃ俺さま悪者みたいじゃねーのよ」
ゼロスはため息をつき、
「んなしけたツラしてねーでもっと気合い入れろや」
と、唇をへの字に曲げた。
「だけど……私たちのせいで……セレスさんが……」
まだ口ごもるマルタに、

「そう思うなら、しっかり助けようって気合い入れてくれる方がよっぽどマシだ。おまえらがしおらしくしてたって、セレスが助かるってもんでもねぇんだぞ」
と、ゼロスは言い聞かせる。
「は、はい、すみま……」
「ストーップ」
今度はエミルを遮ると、
「俺さまはセレスを助けたい。ただそれだけだ」
と、ふたりの顔をじっと見る。
「おまえらをいじめても楽しかねぇの。……言わんとすること、わかるかな？」
「……はい！」
「必ず、セレスさんを助け出します！」
マルタとエミルの返事に満足したのだろう、
「そうそう、そーゆーことよ」
ゼロスはにこやかに頷いてみせた。
「おや、見かけによらず優しいところがあるのですね」
テネブラエが意外そうに言う。とたんにゼロスの表情が元に戻った。
「あのな！　この慈愛あふれる美しい姿を見てどうしてそういう言葉がでるのかね」
これは失礼、とテネブラエは澄まして言う。

「どうやら魔物と人間とでは美しさの基準が違うようですな」
「……おまえ、ステーキにして食うぞ」
ゼロスは目を剝いてテネブラエを睨みつけた。

奥に進むにつれ、エミルはあたりにメロメロコウらしき臭いが濃くなってくるのに気付いた。
(まさか……)
ゼロスは何も言わずに歩を進めている。やがて、彼らは広間に突き当たった。
「ロ、ロイドがふたり！」
足を踏み入れようとしたエミルが息を飲む。
松明に照らされた広間の奥で、ふたりのロイドが斬り結んでいるのだった。
(同じ顔に同じ服……両刀で、力も互角……)
マルタも目の前の光景に、
「じゃあ、本当にデクスが……!?」
と、声をあげた。
「みんな！　力を貸してくれ！　あの偽者を倒すにはみんなの協力がいるんだ！」

左側のロイドがエミルたちに気づき、声を張る。
「騙されるな！　あいつは偽者だ！」
右のロイドは前を向いたまま、短く言った。
「どちらかがデクスなら、メロメロコウの匂いが……」
左右のロイドを見比べながら、マルタがひどい臭いに鼻を覆う。エミルは、
「けど、香水の匂いが充満してて、どっちがどっちだか……」
嗅ぎ分けるのは無理だよ、と顔を顰めた。
ひとりゼロスは、ロイドたちの戦いをじっと見つめている。
激しくぶつかり合う刃、飛び散る火花の行方さえ、彼は見逃すまいとしているかのようだった。
「くそっ！　いい加減にしろ！」
膝をつき、しつこい刃を跳ね返しながら、右側のロイドが叫ぶ。すると、左側が両手を挙げ、
「俺は、みんなを信じてる。みんなの正義の心が、俺を見分けてくれるって！」
と、エミルたちに期待のこもった笑顔を向けた。
「エミル、どうしよう……」
マルタはどちらとも決められない様子だったが、それはエミルも一緒だった。だが、いつまでもここで見ているわけにはいかない。

(どっちだ……臭いの元は……こっちかな。みんなを信じてるって言ってるし……きっと……)
「偽者は……こっちだ！」
エミルは膝をついている方のロイドに挑みかかった。
「……魔神剣！」
なんと、エミルの剣を止めたのはゼロスだった。
「え？」
ポカンとするエミルに、
「違う違う、違うのよね〜エミルくん」
と、揶揄する口調で告げたゼロスは、
「……偽者は、こっちだ！」
言いざま、左側のロイドを跳ね飛ばした。
ロイドは大きな弧を描き、ドサリと落ちる。その体から不気味な煙があがったかと思うと、偽者はロイドとは似ても似つかない別の男の姿に変わっていた。
「デクス!? ……そんな」
マルタが震える声で言う。
「……じゃあまさか、今まで街を荒らしていたのもパルマコスタを襲ったのも……」
ようやく起き上がったデクスは、こんなときだというのにアイアンメイデンの取っ手

をしっかり握りしめたまま、
「……しまった。ばれたか」
と肩をすくめる。
「マルタにはからくりを教えるなって言われてたんだがなぁ」
それを聞いたマルタの顔色が変わった。
「ど、どういうこと！　まさか……まさかパパの指示で……」
「パパ……？　パパって……」
前に見たあのマントの人かなと思いながら、エミルが訊ねる。
「なんだ。マルタ、何も話してないのか」
デクスが急におかしそうに笑った。
「そりゃそうだよな。話したら、そいつらと一緒にはいられないもんな」
「……」
マルタは黙って唇を噛んでいる。
「どういうこと？　マルタ……」
エミルが彼女の顔を覗き込んだときだった。コツ、コツ、とブーツの音を響かせ、奥の暗がりからアリスが現れた。彼女の横にはセレスの姿があった。つば広の帽子をかぶったセレスは、アリスにしっかりと腕を摑まれていて逃れることができない。
「マルタちゃんは、我らがヴァンガードの総帥（そうすい）であるブルートさまのひとり娘なの♡」

「セレス！」
マルタの素性など今はおかまいなしに、ゼロスは妹を見て叫ぶ。
「お兄さま！」
ただでさえ体の弱いセレスは、だいぶ弱っているのだろう、それでもか細い声でゼロスを呼んだ。
「うふふ、動かないでね♡」
アリスはゼロスたちを牽制（けんせい）し、
「アリスちゃん、こういう可愛い女の子の腕をへし折るの、だーい好きなの♡」
と、セレスの腕を掴む手に力をこめる。
「えぐいことしてくれるじゃねぇか……」
怒りに震え、ゼロスが呻くように言った。
「勝てばいいのよ♡」
「そうだそうだ！　アリスちゃんの悪口を言うとこのデクスが許さないぜ！」
ポーズを決めるデクスに、
「デクスうざーい」
と声をかけてから、アリスは、
「……さ、みんなおとなしく武器とコアを渡しなさい。マルタちゃんが持ってくるのよ」
と、向き直った。

「センチュリオン・コアまで集めて何をしようとしてるんだ！」
エミルがアリスをキッと睨みつけると、デクスがかわりに答える。
「本命はラタトスクのコアだよ。コア集めはブルート総帥の個人的な趣味みたいだぜ」
「も～！　よけいなこと説明しなくていいの！」
叱られた彼は、
「ご、ごめんよ、アリスちゃん」
と、身をふたつに折って謝る。アクションはふざけてると思うほど大げさだが、心から許しを請うているのがわかるので、かえって痛々しい。
「さ、マルタちゃん、早くなさい」
アリスはセレスの腕に力をこめる真似をする。
「……」
(このままじゃセレスさんが……)
マルタが意を決してアリスに向かって歩き出した、そのときだった。
「……そうはいかないよ！」
奥の暗がりから飛び出したしいなが、目にも止まらぬ速さで背後からアリスを突き飛ばす。
「きゃ!?」
少し離れた場所まで飛んだアリスを助けようとするデクスの視界に、輝く輪が煌く。

チャクラムだった。とっさにアイアンメイデンを盾にしたが、チャクラムの威力でデクスは仰向けに転倒する。チャクラムの戻った先は、しいなの隣に立つ、コレットの手だった。
「やらせないんだから！」
コレットが両手にチャクラムを構え直す。しいなも札を手にしていた。
怒りの表情でやっとのこと立ち上がろうとしたデクスを、
「おまえたちの好きにはさせぬ！」
タイミングよくリーガルが背後から蹴り飛ばした。デクスは目玉が飛び出しそうな勢いで、今度は前のめりに――片足を上げたまま――倒れた。
「しいな！　リーガルさん！　それにコレット⁉」
エミルが驚きの声を上げると、三人は小さく笑って頷いた。
「ロイド！　セレスは⁉」
ゼロスは本物のロイドに向かって訊ねた。ロイドはアリスが飛ばされてからすぐにセレスを保護していたのだ。
「――無事だ」
ロイドはセレスの肩を支えてやっていた。
「セレスは任せて！」
コレットもゼロスに叫ぶと、

「ロイド！　こっち！」

と、道案内のために走り出す。彼女の瞳はロイドにやっと再会できたことに輝いているように見えた。

「わかった」

三人が広間から出てゆく。しいなとリーガルがすぐさま続いた。

「逃がさないんだから！」

アリスがすかさず立ち上がり、走り去る。

「待て！」

エミルが叫び、彼女の後を追おうとしたとき、ようやっと体を起こしたデクスがアイアンメイデンを引きずりながら片足で滑ってきた。

「そうはいかないな。ここは俺がアリスちゃんの盾になる！」

「はっ！　香水のつけ方もしらねぇダサ男くんが、俺さまの邪魔するんじゃねぇよっ！」

ゼロスは、こうしている間にもアリスがセレスに追いつくのではないかと苛立ち、剣を抜いた。

その場に残っていたエミルとマルタも参戦し、デクスを三方から囲んでしまう。勝負は時間の問題だった。

ほどなく膝から崩れたデクスは、がっくりと前のめりに両手をつく。

「……くそ……通販で買った筋トレマシーンの効果が……」

彼のポケットから、グラキエスのコアが落ち、ころころと床を転がった。
マルタにそれを拾われたことに気づき、
「……しまった！」
と、顔を上げる。すると、まっすぐに自分を見下すマルタと視線が合った。
「デクス……本当にパパが命じたの？　パルマコスタを襲わせたのも……」
「……俺がセンチュリオン・コアの力でロイドに化けて、ヴァンガードの集会を襲えば……」
デクスはすっかり掠(かす)れてしまった声で続けた。
「内部の不満分子を一掃(いっそう)できて……マーテル教会をおとしめることができる……」
「……そんな……」
呆然(ぼうぜん)とするマルタの背後に殺気(さっき)が生まれた。ゼロスは彼女と背を合わせる格好で、振り下ろされた斧を剣で受け止める。一瞬の出来事だった。
「リヒターさんっ！」
エミルは、彼がまたもマルタを殺そうとしたことを知って衝撃を受けた。どこまでしつこいのだろう。
「……ここは引き受ける。行け」
リヒターが目配せすると、
「……悪い……」

デクスはアイアンメイデンを担(かつ)ぐと、ぎくしゃくしながらものすごい速さで広間を出て行った。

「待って！」

追いかけようとしたマルタに、アクアが体当たりする。

「きゃっ⁉」

マルタはその場に倒れた。彼女に気をとられていたエミルは、リヒターの刃が自分の喉に向けられるのに気づかなかった。

「！」

「ったく……。次から次へと冗談じゃないぜ！」

目まぐるしい展開に、斧を受け止めたままのゼロスがうんざりしてみせる。

「……エミル……さらばだ！」

振り上げた剣を再びエミルに向け、リヒターが冷たい目で言い放った。

「陽流・甲(きのえ)！」

ゼロスを突き放した斧と剣が一瞬交わるように見えた。交差する武器に、エミルは飛(と)び退(すさ)りながら剣を抜く。

「魔神閃光断(まじんせんこうだん)っ！」

赤く燃える瞳が、宙に舞い上がったリヒターの体を捉えた。胸に刃を受けながらもリヒターは、

「陽流・丙（ひのえ）！」
エミルの肩口に斧を振り下ろした。
「ぐあっ！」
背後に吹き飛ぶエミルに、マルタが回復術を使う。左手に盾を手にしたゼロスは、着地したリヒターに余裕を与えまいと、
「瞬迅剣（しゅんじんけん）っ！」
正面から剣を繰り出した。が、それは激しく弾（はじ）かれてしまう。
マルタが走った。それを目の端に捉えたリヒターは、
「陽流・戊（つちのえ）！」
斧を斜め上に払い、彼女を宙に浮かせると、斬りつけた。スピナーは手を離れ、床に落ちると暗がりへ滑ってゆく。
「あぁっ！」
リヒターは武器を拾おうと背を向けたマルタに二度、三度刃を浴びせた。
「きゃあああっ！」
「マルタっ!?　しっかりしろっ！」
倒れたマルタに、エミルが駆け寄る。
「陰流・丁（ひのと）！」
間髪を入れず、リヒターの攻撃は剣を握りなおしたばかりのゼロスに向いた。

「うわあっ！」
業火（ごうか）に巻かれたゼロスもその場に倒れ伏す。
「……ゼロス！」
エミルが叫んだ。
「人の心配をしている場合か？」
リヒターは剣の切っ先をエミルに向けた。
「くそうっ！　うおおおおっ！」
エミルは怒りの声をあげながら、リヒターに突っ込んでゆく。
しばらくは激しい息づかいと、刃のぶつかり合う音だけが響いた。が、ほんの僅かの隙を捉え、リヒターはエミルの剣を叩き落とした。
「しまった！」
ハッとしたときはすでに遅く、リヒターの右手が丸腰のエミルの喉を締め上げている。瞳が、すうっと緑色に戻った。
「リヒターさん……どうして……」
グローブ越しに伝わってくる感覚が、彼は本気だと知らせている。
「……うぐぅっ!?」
背後にはマルタとゼロスがいたが、ふたりはまだ立ち上がることすらできない。
「……エミル。許してくれとは言わない。あの世で俺を呪え！」

「……リヒター……さん……」

薄れてゆく視界の中で、リヒターが斧を振り上げたのが見えた。

（もうダメだ……今度こそ……）

エミルが観念したとき、

「……アス……テ……ル！」

リヒターの苦しげなつぶやきが聞こえた。斧を持った左腕が、力なく下ろされる。

「リヒターさま！」

センチュリオン・アクアがリヒターの隣に浮かんだ。エミルは、喉を締めつける指の力がふっと抜けるのを感じた。

リヒターはそのままエミルを放すと、踵（きびす）を返（かえ）して出て行ってしまった。

「リヒターさま！」

あわてたアクアが後を追う。

「……アステル……？」

（人の名前みたいだけど……）

一体何が起きたのだろう、とエミルはふらふらしながら考えた。と、背後でマルタとゼロスが立ち上がる気配がした。

「とどめは刺されなくてすんだけど……」

マルタが体の痛みに顔をしかめる。ゼロスも朦朧（もうろう）としたまま腕をさすりかけ、

「セレス！」

ハッと正気に返ると、走り出した。

「そうだ！　エミル！　私たちも追いかけよう」

マルタに呼ばれたが、

(アステルって……誰？)

エミルはリヒターが口にした名前が気になってならない。

「エミル！」

もう一度大声で呼ばれ、

「あ、う、うん！」

エミルはあわてて返事をした。

ロイドが両刀を構える先には、アリスが立っていた。

「……さすが、世界再生の立役者。アリスちゃん、ちょっとピンチかな」

ロイドの後ろにはセレスのほかにコレット、しいな、そしてリーガルがいる。それでもアリスには鞭をペチペチ鳴らす程度の余裕はあるらしい。

ロイドがじりりっと一歩、アリスににじり寄った。

「おまえたちもコアを持っているな。それを渡せ！」
「だ・め♡」
アリスは小首を傾げてみせる。
「おまえたちの目的にコアは必要ないだろう」
そのとき、マルタとエミルが駆け込んで来た。ゼロスはセレスの手を取り、無事を確かめる。
「ヴァンガードの目的って、シルヴァラント王朝の復活……？」
エミルが以前聞いた話を口にすると、
「シルヴァラント王朝の復活？　何を寝ぼけたことを……」
ゼロスがせせら笑う。ところがアリスは、
「あら、総帥は本気みたいよ。ブルート総帥は八〇〇年前に滅んだシルヴァラント王朝の子孫なんですって」
と、歌うように言った。そのとき、
「……上に誰かいます！」
テネブラエが気配を察知した。エミルたちが見上げると、二階の回廊にデクスの姿があった。一緒にいたティリーがふんわり降りて来て、アリスをデクスのところへ連れて行く。デクスはまだ体に残る痛みのために腰をガクガクさせながらも、
「知ってるかい。シルヴァラント王朝はクルシスの天使とマーテル教会に滅ぼされたん

だぜ」
とポーズを決めようとした。
「マルタちゃん。戻っていらっしゃいよ」
回廊からバルコニーに出たアリスは、マルタを見下ろして微笑みかけた。
「ラタトスク・コアを持って帰れば、ブルート総帥も許してくださるわよ」
「……戻らない、絶対に」
キッとマルタはバルコニーを見上げる。
「パパの馬鹿げた野望を打ち砕くために私はラタトスク・コアを持ち出したんだから」
(それで、エミルとも出会ったんだもん……あの夜)
マルタの脳裏(のうり)に、ラタトスク・コアを持ち出した夜の暗さが甦(よみがえ)った。その中に立ち尽くしていたエミル・キャスタニエ――。
「頑固なコは嫌われちゃうんだからね。さ、デクス、行くわよ」
アリスは、これ以上の長居は不利だと踏んだのだろう。ティリーにつけた鞍(サドル)にひらりと飛び乗る。
「アリスちゃんとならどこへでも！」
ぱっと顔を輝かせたデクスもティリーにまたがると、ふたりはそのまま消えて行った。
「…………」
松明の燃える音だけが微かに響いている。

マルタは、複雑な思いにうなだれてしまう。
「マルタさま……気をしっかりお持ちください」
「……う、うん……」
テネブラエに励まされ、彼女はやっと顔をあげた。
「……皆傷ついて疲れている。ひとまずメルトキオへ戻ろう」
リーガルが仲間の体を気遣った。
「そだね。セレスも心配だし……。ロイドもそれでいいよね？」
コレットは訊ねたが、ロイドは返事をしなかった。

外へ出ると、岬の砦の出口は目の前だった。潮(しお)の香りのする新鮮な風が、エミルの胸を満たしてゆく。彼は思い切って口を開いた。
「あ、あの……ロイド……さん」
エミルの前を歩いていたロイドが足を止め、振り返った。仲間たちも何事かとエミルに視線を当てた。
「……今までのこと、すみませんでした」
ロイドは、

「……気にすることはないさ。俺は最初から説明するつもりがなかったんだ」
と言う。
「ロイド……どうして何も言ってくれないの？」
「我らに話してくれないのか」
コレットとリーガルが訊ねたが、
「…………」
ロイドは答えない。エミルは、
「ロイドさん……。マルタに寄生したラタトスクのコアを取り外すには、すべてのコアを孵化させてラタトスクそのものを目覚めさせるしかないんです」
と、ロイドの方に進み出た。
「あなたは、どうしてコアを集めているんですか？　もし僕たちで協力できることなら……」
「なら、協力してくれ」
ロイドはあっさり言い、両手で剣を抜いた。
「今すぐ、すべてのコアを渡すんだ」
あわててマルタが叫ぶ。
「私だけのことじゃないんです！　ラタトスクが目覚めれば、世界の異常気象もおさまるんです！」

「聞こえなかったのか？　今すぐコアを渡せ！」
かまわずロイドは剣を構えた。
「あんたらしくないよ、ロイド！」
じりじりしていたしいなが声をあげる。
「なぜだ？　おまえがこんなことをするのには理由があるのだろう？」
リーガルが訊ねても、ロイドは表情ひとつ変えなかった。コレットは、
「ロイド……」
悲しそうに彼を見つめる。
「ロイド、話してくれ！」
ゼロスがひときわ強い口調で声を張ると、ロイドは剣を収め、仲間たちに背を向けた。
そして、
「今は、何も言えない」
たったひとこと言い残し、ダッと走り去る。
「ロイド！」
コレットの悲痛な声も、すでに姿の見えなくなった彼には届かなかったかもしれない。
「追いかけよう！」
エミルの言葉に、ゼロスは首を振った。
「……無理だ。あいつはレアバードを持ってる。今ごろは空の上だろうよ」

「そんな……」
エミルは唇を嚙んだ。
(せっかく誤解が解けたっていうのに……ロイドさん、どうして……)
「とにかく一度、俺さまの屋敷に戻ろうぜ」
ゼロスが仲間たちを見回して言った。
「セレスの体調が思わしくないみたいなんでね」
それを聞いて、マルタたちはハッといちばん後ろにいたセレスを振り返る。
セレスは、両手で胸を押さえ、
「……すみま……せん……ご迷惑をおかけ……して……」
と、血の気の引いた唇を震わせる。
「……本当だ。ごめんなさい、気づかなくて」
セレスに謝ってから、エミルはもう一度ロイドが消えて行った方向を見つめた。

ワイルダー家の屋敷では、ふたりの執事がセレスの帰りを待ちわびていた。
「おお、セレスさま……！　ご無事でなによりでございます！」
トクナガは心の底からほっとした様子でセレスを迎えた。

「トクナガ……心配をかけて……ごめんなさい」
「トクナガ、セバスチャン。セレスをベッドへ」
ゼロスが命じると、ふたりは、
「かしこまりました」
と、頭を下げる。セレスは、
「あの……。エミルさん。事情はお兄さまから伺いました。グラキエスのコアとやらはあなたに差し上げます。頑張ってください」
と、苦しそうに胸を上下させた。
「あ、ありがとうございます！」
エミルは、ゼロスが妹を大げさなほど大切にする気持ちが理解できた気がした。
セレスはその場にいる者たちに弱々しく微笑みかけると、ふたりの執事に支えられ、寝室へ向かった。

「しかし面倒なことになったな。シルヴァラント王朝か……」
応接間のソファにどっかりと腰かけたゼロスが言う。
「世界がふたつに分かれてたころ、シルヴァラントで何が起きたのかなんてこっちには

わかんねぇが、奴らがマーテル教会に復讐しようとしてるってことは確かだな」
「ラタトスク・コアも王室の復興に使おうとしているの？」
エミルがマルタに訊ねる。
「……うん。ラタトスク・コアを使ってマーテル教会を滅ぼそうとしてるの。それだけじゃない。テセアラ王室も」
「ラタトスク・コアでそんなことできるの!?」
エミルは驚いた。
「魔導砲っていう武器に使うみたい」
マルタはため息をついた。
以前テネブラエが言っていたやつだな、とエミルは思う。
「なんてこった……」
しいなが呆れて言った。
「知ってるんですか？」
エミルが聞くのに彼女は頷き、
「あたしは使ったことがあるからね。あんなもの悪用されたら世界が滅びかねないよ」
と、深刻そうに答えた。ゼロスが立ち上がる。
「……俺さまはこのことを教会の奴らと陛下に伝えないとな」
「私も、イセリアに戻って伝えてくる。できればリフィル先生にもお話を聞いてもらい

たいけど……」
　コレットが言うと、
「そっちはミズホの連中に頼もう。捜し出して伝えてくれるはずさ」
　しいなはリフィルを見つけることを約束してくれた。
「エミル、おまえたちはこれからどうするのだ？」
　リーガルがエミルとマルタを見る。
「僕は……僕はマルタと一緒にコアを集めます。そうすれば、ラタトスクを解放できて魔導砲ってのも使えなくなるから。……ね、マルタ」
「……う、うん……」
　そうだね、とマルタはエミルに返事をした。
「ならば、私も引き続き同行させてもらおう」
　リーガルが言う。
「今のロイドが何を考えているのかはわからぬ。だがおまえたちとロイドが相対したときには助けてやれるかもしれぬ」
　そうだね、としいなも考えながら頷いた。
「あたしも一緒に行くよ。あたしなら魔導砲のことも知ってるし……それにロイドの奴が何を考えてるのかわからない以上、あいつに協力はできないよ」
「俺さまはパス」

と、ゼロスが手をひらひらさせた。
「ロイドにはロイドの考えがあるはずだ。あいつが世界を危機に陥れるはずがない……ってなわけで、ロイドくんを追いかけることにする」
じっとみんなの考えに耳を傾けていたコレットも、
「……私もゼロスと同じ。私、ロイドを信じてる。絶対信じてる。だから追いかけて、協力したい」
と、自分の気持ちを言葉にした。
「……そうしてやるといい。では、これでまたおまえたちとはしばしの別れだな」
リーガルは、別行動になる仲間を深い眼差(まなざ)しで見る。
「ま、元気でな」
ゼロスは、どちらでもいいような軽い口調で別れを告げた。コレットは、いつもと変わらない笑顔だ。
「みんな無事でいてね」
「ゼロス、コレット……。ありがとう」
エミルもコレットにつられて微笑んだが、
「パパが迷惑かけてごめんなさい」
マルタは相変わらず落ち込んでいるようだった。ところが、今までマルタにきつい言葉をかけてきたゼロスに、

「親に振り回される子供ってのはつらいよな。元気出せよ、マルタちゃん」
と、思いがけなく励まされる。
「！」
マルタは精一杯の笑顔で応(こた)えた。

メルトキオの出口まで来ると、
「さてと。こっちはまたセンチュリオン・コア探しだね」
しいなが自分に気合いを入れるように言い、仲間たちを見た。
「うむ。ここから近いのは地の神殿か……」
リーガルが頷く。
「地ってことは……」
エミルがテネブラエを見ると、彼は、
「ソルムのコアがある……はずですが……」
と、尻つぼみに応えた。

「どうしたの？　テネブラエ。なんか歯切れが悪いね」
マルタが首を傾げると、
「いえ……。この間からヴァンガードがうろついている場所で、何度もソルムのコアの気配を感じていました」
と言う。
「まさか、やつらに取られちゃってるってこと⁉」
どうしよう、とエミルが慌てた。
「……わかりません。ただ、ソルムは敵を幻惑させることを得意としていたセンチュリオンです。もしやあの香水臭い男が容易に他人に化けていたのは……」
「ソルムのコアのせいってこと？　だけどそれならデクスからソルムの気配がするんじゃない？」
そんなこと言ってなかったよね、とマルタがテネブラエを見る。彼は、
「あのメロメロコウという匂いが私の感覚を狂わせるのです……」
と、申し訳なさそうに告げた。しいなはそのやりとりを腰に手を当てて聞いていたが、
「だったら、地の神殿に行ってみればはっきりするんじゃないかい？」
と、さばさばした口調で言う。
「うむ。考えていても始まらないな。エミル、行ってみよう」
リーガルは、地の神殿はここから北西の方角にあるのだと教えてくれた。

ところが、地の神殿の内部に足を踏み入れようとすると、

「こら！　ここは立ち入り禁止だ！」

エミルたちは、奥から走り出てきた甲冑(かっちゅう)を着た男に止められた。マーテル教団兵だ。

「何かあったんですか」

エミルはきょろきょろしながら訊ねた。

「このところ地震が続いてるだろ。そのせいで中が崩落しちまって大変なんだよ」

「入ることはできぬのか」

リーガルが確認する。

「見学か？　中の修理が終わるまでは無理だと思うぜ」

神殿の内部は、ここからは想像がつかないほど崩れてしまって危険なのだと、兵士は言い、奥へ戻って行った。

「……どうしよう」

エミルは仲間たちに相談する。

「そうだねぇ。入れるようになるまでただ待ってるのも何だし、先に雷(かみなり)の神殿に行ってみるかい？」

しいなが提案する。
「あそこも精霊がいた場所だからコアもあるんじゃないかい？」
「そうだな」
すぐにリーガルが賛成した。待っていてもいつ入れるようになるかわからないのだ。時間を無駄にしたくなかった。
そのとき、テネブラエが現れた。
「ところで、出発前にグラキエスのコアを孵化させませんか？」
「あ、そうだよね。そういえば手に入れてそのままだったもんね」
マルタは、デクスが落としたコアのことをすっかり忘れていた。セレスに貰ったのに、まだ孵化させていなかったのだ。
マルタは近くに人がいないことを確かめてから、コアを孵化させる儀式を行った。
エミルはほっと息をつき、
「これでグラキエスも目覚めたんだね。よか……た……」
ガクンと膝をつき、そのまま地面に倒れ伏してしまう。
「――エミル⁉」
マルタがあわてて駆け寄った。リーガルもエミルの傍らにしゃがみ込むと、脈をとる。気を失っているだけのようだ。
「疲れがたまっていたのでしょうか……」

　ぐったりしているエミルを覗き込んだテネブラエが言う。しいなは、ここからいちばん近い宿屋はどこだろうと考えながら頷いた。
「そうかもしれないね。とにかく街まで運ぼう」

　暗闇に、恐ろしい形相（ぎょうそう）のリヒターが浮かび上がる。
（……やめろ……）
　剣と斧をきらめかせ、リヒターの顔が間近に迫る。
（殺される――――！）

「うわぁ――――――!!」
　エミルは絶叫し、ベッドの上で跳ね起きた。
「エミル！　どうかしたの!?」
　マルタが走り寄る。宿屋の一室で、彼女はずっとエミルが目覚めるのを待っていたの

だった。
「……マルタ……か……」
エミルはほっとして、目を伏せた。
「あなた……もうひとりのエミル、だよね」
マルタがエミルの瞳を覗き込む。
「……わかるのか？　ああ、そうか。俺が邪魔だったんだな」
「違うよ！」
マルタは語気を強めて否定する。
「ただ、あのとき以来、戦っているときにしか姿を見せなくなってたから……心配して……」
「……そう……か……。そういえばおまえ、俺をかばってくれてたな」
彼は、もうひとりの自分(エミル)を非難するなとかばったマルタの姿を思い出した。
「……え？」
マルタは何の疑いも偏見も持たず、ただ純粋に俺を見ている、とエミルは感じる。
「……俺は……おまえに必要な存在か？」
ぎこちなく、彼は訊ねた。
「当たり前だよ！　キミもエミルなんだから」
「……また顔を出しても平気か？」

「もちろん」
少しの間も開けず、マルタはしっかりと頷いてくれる。
それで充分だった。
「……ありが……とう……」

「――あれ？　マルタ、どうしたの？」
エミルは、自分の顔を覗き込んでいるマルタに気づいた。
「どうしたの……って、今まで話、してたじゃない」
「……え？　そうだっけ？」
（あれ……覚えて……ないな）
マルタは彼の瞳の緑に気づき、ハッとする。
「エミル……ごめん。なんでもないの。私の勘違い……」
「え？　本当……？」
とエミルは素直にそれを信じた。
「もう少し寝てた方がいいよ、エミル……」
「……う、うん、そうする。……えっと、お休み、マルタ」
エミルはにっこり笑うと、ベッドに横になった。

「う、うん、お休み……」
さっきまでと同じ姿勢で、エミルはすぐに目を閉じた。
（エミル、どうなってるの……？）
マルタは不安になる。
ラタトスクモードのときの記憶が、エミルにはないのだ。エミルがラタトスクに憑依されているというより、まるでふたりの人間が共生しているようだった——そのうちのひとりはもうひとりの意識を遮断して。
幸せそうに寝息をたて始めたエミルにそっと近づき、マルタは寝顔をじっと見つめる。
たった今、このまぶたの奥の瞳は、何色をしているのだろう。
漠然とした予感を、マルタは必死に打ち消し続けた。

【『テイルズ　オブ　シンフォニア―ラタトスクの騎士―　世界の願い③』に続く】

あとがき

こんにちは、矢島さらです。

『テイルズ オブ シンフォニア–ラタトスクの騎士–』メインシナリオ編第二巻です。

ゲームの三章から五章までが今回のお話ですが、中盤に入り、ゲーム画面には総勢十数人がひしめいているときもあって賑やかです。

が……、エミルはだんだんと大変なことになってきましたね。アステルという謎の名前も出てきて。見ているマルタも不安だろうなと思いますが、「なにがあってもエミルの全部が好き！」っていうところがすごいです。

突然ですが今年は『国際カエル年』です。全国各地で両生類まつり♪ が開かれ（もちろんもっとちゃんとした名称です）、年々平和に暮らせなくなってきているカエルを守ろうという呼びかけをしているみたいです。

そんなわけで、かえる日記に突入しておりますが(笑)、記念すべきこの年にヒッカリ

カエルが登場したのは運命でしょうか。これまでのテイルズオブですとモンスターとかダンジョンの装飾品（口から水がだーっと出てるやつ）とか、そんな登場の仕方にとどまっていたと思うのですが、今回はゲスト主役ですよ。すごいな〜。個人的に大変幸せでした。ばんざいノストロピア。

次はいよいよ完結編です。いくつもの謎が一気に明らかになるはず……お楽しみに。

今回もオリジナルイラストを描いてくださったバンダイナムコゲームスの奥村大悟氏、また、シナリオの実弥島巧先生にも引き続き大変お世話になりました。ありがとうございました。

それでは、またお会いしましょうっ。

二〇〇八年九月

矢島さら

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー

運命(とき)をつぐもの[上][下]

青の記憶

蒼黒の想い[上][下]

テイルズ オブ ファンタジア

はるかなる時空(とき)[上][下]

真紅の瞳　紺碧の絆

琥珀の回廊　瑠璃の夢

テイルズ オブ エターニア

永遠(とき)のきざはし全3巻

蒼天の星[上][下]　暁の約束[上][下]

リッドのとかげ　キールの希望(ゆめ)

テイルズ オブ デスティニー2

蒼黒(そうこく)の追憶(とき)[上][中][下]

朱鷺色(ときいろ)の風

テイルズ オブ シンフォニア

久遠(とき)の輝き全4巻

青翠(みどり)の器

テイルズ オブ リバース

第一話 落日の瞬間(とき)[上][下]

第二話 偽りの再誕(とき)[上][下]

第三話 新たなる時代(とき)

テイルズ オブ ジ アビス

緋色(あか)の旋律[上][中][下]

真白(しろ)の未来(あした)[上][下]

黄金(きん)の祈り[上][下]

テイルズ オブ シンフォニア -ラタトスクの騎士-

世界(とき)の願い①②

ISBN978-4-7577-4486-8
C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行◯エンターブレイン

Famitsu Bunko

英雄ロイドに親を殺され、彼を仇と憎むエミル。そんな彼はラタトスクの騎士となり、マルタとセンチュリオンのテネブラエとの旅を続けるが、途中で出会ったロイドのかつての仲間たちにより、ロイドへの憎しみの形が変わっていくのだった……。人気RPGの完全ノベライズ、第二巻。果たしてロイドは、本当にエミルの両親、そして多くの人たちを惨殺したのか!?